
魔法先生ネギま! ~ 黒き翼の異世界譚 ~

風ノ華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～黒き翼の異世界譚～

【Nコード】

N0582N

【作者名】

風ノ華

【あらすじ】

神（くそ爺）にム力つくって理由から殺された俺。そんな俺を見かねて救ってくれた女神様。そんな女神様に感謝をし、ネギまの世界で第二の生を存分に楽しむもつ。

キャラ崩壊、原作破壊、作者の表現方法などに嫌悪を抱く方は読むのをお控えください

第零話「プロローグ」（前書き）

作者の都合でキャラ崩壊する場面もあります。
あらかじめご了承ください。

第零話「プロローグ」

やあ皆さん。こんにちは、それともこんばんはかな？

俺の名前は神^{かみなぎ}風翼^{つばさ}。漫画好きゲーム好きギャルゲーもそこそこ好きな至極一般的（【それはどうかと思う】）な大学生さ。

何か変なツツコミが入った気がするが、気にせず今の俺の状態を説明しよう。

・・・落ちてます。ものっそい勢いで下降中です。

俺選択肢間違えた？と思いつつ先ほどの出来事を思い出していた。

く回想く

「ん…………ふわあ〜っ」

目を開けるとそこは真っ暗な世界でした。

「……………うん、これは夢だ。おやすみなさい。」

自分の身に何が起こったかなんとかなく予想がついたが否定しなかった
ので眠ることにした。

明日はどのゲームをやるのかなと考えながら……………。

「END 1　そして伝説は始まらなかった」

『いやいやいやいやいきなり終わらせないでください!』

ホラ来ちゃったと思いい目を開けると、そこには【見習い】という札をつけた少女が立っていた。

『神風翼さんですね?　ボクはアテナといいます。突然のことで驚かれていますと思いまs「誰のせいだ?」えっ?』

「だから誰のせいで俺は死んだんだって聞いてんだよ!　アンタか?　ああっ!?!」

『ヒッ!?　違います違います、ボクじゃないです。』

怒気を込めてボクっ娘少女を睨むとものすごい勢いで首を予期に振りながらボクっ子少女は答える。

その様子に少し萌えゝゲフンゲフン、毒気を抜かれてしまった俺は再度質問した。

「じゃあ神様あたりか?　どうせ俺の寿命か何かが書かれた紙を燃やしてしまっただとかそんな感じなんだろう?」

二次元SSが好きな俺はよくあるテンプレの中からの知識を引っ張

ってくる。

『ちよつと違うんですけど……怒らないでくださいね?』

ボクっ娘＋上目遣い＋涙目の萌死コンボにお持ち帰りをしたくなつた心を抑えながら続きを聞いた。

『実はですね、神様と冥王様が暇潰しで下界の人達を使って……』

やはりテンプレか……でも人達って?

『リアルDEA。HNOTEでもやろうかってことになって最初にあなたが殺されてしまいました。』

「……………はっ?なに?もつかい言って?」

『ですから、神様と冥王様がそれぞれキ。第二のキ。となつてリアルDEA。HNOTEでもやろうかってことになりまして、あなたがム力つくからって理由で神様があなたを殺してしまったんです。』

「リアルDEAT。NOTEってなに!?てかなんで神と冥王の両方が。ラやねん!?せめて神様工。やれよ!?てかム力つくってんな理由で人殺すな!」

『仕方ないではないか、誰しも殺してしまいたいと思うこと一度や二度あるはずじゃろうし。イタタタタ……痛いよへっちゃん。』

振り向くとそこにはボツコボツにやられたお髭のお爺さんと妙齡の女性がいた。

『妾たちが目を放した隙にそなたを死なせてしまつて申し訳ない。妾はヘラじゃ。』

ヘラ？ヘラつてあのギリシア神話に出てくる女神？確か結婚と母性、貞節を司る女神だったっけかな。

『そうじゃ、よく知つておるな。』

やっぱりそうなんだ、って

「人の心読まないでください！（つてことはさっきのアテナつて子とあの爺……。あれゼウス？ありえねえ〜。）」

『ありえないとはどういうことじゃ！消してしまうさ』お黙りなさい
『……………ハイ。』

「だってこんな美人が何が悲しゅうてアンタみたいな浮気性の爺と一緒にいるんだつての。勿体無い。」

途端にヘラの顔がボンと赤くなつた。

『（美人じゃと！？そんなことこの爺からはここ何千年と言われたことがなかったわ。よし、決めたぞ！）そそ、そんなことよりも翼よ。お主もう一度生を得る気はないか？』

「そりゃあまだ恋のひとつも出来ていないのに死にたくはないですけど、いいんですか？」

『勿論じゃ。ただ、悪いが元の世界で生き返らせることは転生の輪から外れてしまったおぬしの魂では叶わんのじゃ。』

ヘラさんが言うには、魂を持つものは皆その寿命を全うし転生の輪にて魂を浄化し輪廻を巡るのだそうだ。稀にその輪から外れてしまふ魂があるのだが冥府タルタロスに世界の滅びがくるまで囚われ続けるのだそうだ。

『そこでお主には異なる世界で生きてもらうことになる。まずはお主の好きな漫画の世界「ネギま！」の世界で生きよ。その為の力も授けよう。』

「マジで！？力もくれんの？ありがとうヘラさん♪」

憧れの能力付きの異世界転生にうれしくなった俺は思わずヘラさんに抱きついた。

『にゃ、にゃにゃ』『ワシのへーちゃんに何をしとるかー！』……黙っている爺。』

『へ、へーちゃん？』

『今日を限りに妾とキサマは夫婦でもなんでもない！さっさと出て行くがいい！あとで父上から降格届けを送っていただくからの。』

『へーちゃん、それだけは勘弁を……。』

「ん？なあアテナ。何であの爺はあんなに下手に出てんだ？仮にも神様なのに……………」

そばで苦笑いしていたアテナに聞くと、なんでもゼウスは婿養子だったそう。今まで何度もの浮気をしては離婚の危機に陥り、その都度神界に貢献することで有耶無耶にしてきたそう。

だが今回は世界を玩具にただでなくそこに住まう魂（つまり俺だ）にまで干渉したことにより神罰が下ったそう。ザマアみる。

『それで、翼よ。どんな力を望む？』

「じゃあ、デビデビから暗黒魔闘術、裏・暗黒魔闘術とヴィシユヌのデス・クリムゾン。あ、出来るなら裏・暗黒魔闘術は魂を使うんじゃない。魔力を使うように変更してもらえます？」

『その程度簡単じゃ。他にはあるのか？』

「はい、次はLIVE ALIVEというゲームから各キャラの特殊能力と技を。あ、アキラの人の心を読む超能力はいらないよ。プライバシーの侵害も甚だしいもんね。」

『超能力は不要……と。』

「で、あとはBLACK MATRIXシリーズの魔法とその魔法を使用するためにBLOOD+の小夜の刀。最後にスレイヤーズから光の剣をお願いします。」

『うむ、承知した。しかし翼よ、お主は妾が予想した斜め上の能力を選択したのう。普通多いのは【無限の剣製】アンリミテッドブレードワークスであったり【王の財宝】ロイヤルトレASUREを選ぶ輩が多いのだが。』

「なに、そういうSSをたくさん見てきたからちよつと違う能力がほしかったっただけさ。」

『なるほど。では次に容姿だがこれも希望はあるか？』

「容姿まで決めれるの？だったらデビデビのシバ・ガーランド、髪色は紫で。半人半魔で悪魔の翼を自由に出入れできるようにしてください。」

『委細承知した。最後にこれは妾からの贈り物じゃ。魔力と気はその世界の最強種の10倍、魔法を使用するための媒体としての指輪、そして瞬視の魔眼を授けよう。』

「瞬視？」

『眼に飛び込んでくるものなら、一瞬でその物事の本当の姿が見きわめられる直観力が働く眼のことじゃ。その直観力による判断は、百万の知識、理屈よりも正しいものといわれておる。』

「それどんだけチートな眼だよ。」

『なに、これくらいしておかないとあの世界では厳しいと思ってな。そろそろ行くがよい。』

ドアが現れる。

「ああ、ありがとうヘラさん。……また、会えるかな？」

『無論じゃ。お主の魂はここと繋がっておるからいずれまた会える。その時までにもっといい男になっておるのじゃぞ。（そして妾と…

……♪(『

「ああ、分かったよ。じゃあ、行ってきます。」

ドアを開けて踏み出すと、足場がなかった。

「やっぱり落ちるのねえー!!!!」

『……翼よ、折れるでないぞ。』

【続く】

第零話「プロローグ」（後書き）

初作品ですのでいろいろと問題点があると思います。
感想は勿論ですが、誤字脱字報告も待ってます。
これからよろしく願います。

第零話その1「主人公設定」(前書き)

主人公設定です。

第零話その1「主人公設定」

名前：神凾 翼 かみなぎつばさ

性別：男

年齢：12歳（肉体年齢）

人種：半魔（人と悪魔のハーフ）

身長／体重：152cm／41kg

容姿：デビデビのシバ・ガールント

髪色 紫、肘までの長さ、首元で結っている

悪魔の翼をもつ

二つ名：裏切りの異端児、マーベリックピトレイナル 殲滅円舞 アウトブレイクフルツ

能力（Fate風）

属性：混沌・善

筋力：B（B+）

魔力：SS

耐久：D（D+）

俊敏：C+（B）

幸運：C

宝具：I

特技：家事全般、早撃ち、魔力操作、気

武器：基本的に拳、BLOOD+の小夜の刀、光の剣、リボルバー

使用技：暗黒魔闘術、裏・暗黒魔闘術、デス・クリムゾン、Live

eAliveの技、BLACKMATRIXの魔法

【保有スキル】

瞬視の魔眼：魔眼ランクB

外から、一瞬、眼に飛び込んでくるものを受容するなら、物事の本当の姿が見きわめられる直観力が働く眼。

その直観力による判断は、百万の知識、理屈よりも正しいものである。

使用している間は瞳の色が赤水晶に光る。

魔力操作B

魔力放出、圧縮、変換などの魔力運用を効率よく行うための能力。
Bランクで魔法を使用せず魔力のみでの放出も可能。

心眼（真）D（A+）

- 功夫編 心山拳師範より -
修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。

ランクが高くなれば自らの最適な動きと相手の隙を看破できるようになる。

（ ）は瞬視の魔眼使用時のランク。

早撃ちB

- 西部編 サンダウン・キッドより -
純粋な射撃能力。

クイックドロ―はお手の物。

千里眼C（C+）

純粋な視力の良さ。
遠距離や動体視力の向上。

（ ）は気で強化したときの能力

気D

- 現代編 高原日勝より -

身体能力を＋分ランクアップさせる。
また、相手の強さを肌で感じ取れる。

精神力B

単純な心の強さ、想像力。

ランクが上がるほど詳細なイメージを練ることができ、屈しづらくなる。

隠密A＋

- 幕末編 おぼろ丸より -

気配遮断能力。魔力が感知されない限り発見されなくなる。

また、魔力操作Bによりよほどの使い手でない限り魔力が感知されない。

【武器の補足】

BLOOD＋の小夜の刀：

鏢際にある刀の部分で指を切り、そこから滴る血を刀全体に彫られている溝に流し込む。

本来ならこの状態で翼手を斬ることで、翼手を結晶化させて倒す事が出来るのだが、

本作品においては後述のBLACKMATRIXの魔法を使用するための媒体として用いられる

光の剣：

サイラークを襲った魔獣ザナッファアを倒した剣士が使った伝説の剣。

正式名称『ゴールデンヴァア烈光の剣』。

異界の魔王・闇を撒くものの生み出せし

五つの武器のひとつ。

敵の魔法や『光』など、物質・非物質を問わず、なんでも切り裂い

てくれる。

『光よ！』との合言葉^{キーワード}により使い手の意志を収束・増幅し、光の刃となす。

刀身の長さや威力は使い手の精神力に比例する。

リボルバー：

LIVE ALIVEのサンダウンが最終編で使用した44マグナムをモチーフとしたもの。

普通の弾だけでなく魔弾を装填できるよう強化を施した。

【使用技の補足】

暗黒魔闘術：

魔界に伝わる幻の戦闘術。

自分の魔力を集束し異質のエネルギーとして使用する。

悪魔の中でも習得した者は極僅かであり、その威力は消滅の不可能とされる魔王の魂すらも消滅させたほど。

裏・暗黒魔闘術：

暗黒魔闘術と対を成す究極の流派。

使い手の魂を加工することで様々な物体を作り出すことができる。

極めて強力だが、使用には強靱な魂とそれを加工する強い精神力が必要。

本作品においては魂ではなく魔力を代替エネルギーとしている。

デス・クリムゾン：

兄・シバを目標とするヴィシユヌが編み出した最強の技。

己の魔力を凝縮した球体を作り、敵に向かって投げつけて大爆発を起こす。

威力は凄まじいが手加減できず、味方を巻き込む恐れがある。

L i v e A L i v e の技：（多用する技）

功夫編：心山拳、弟子の技

中世編：オルステッドの剣技

B L A C K M A T R I X の魔法：

血を媒体とした魔法。

強力な魔法を使う場合、相応の血が必要となる。

第零話その1「主人公設定」(後書き)

ネギまの世界の魔法はまだ使用できないため魔法始動キーはなし。

第一話「黒き翼との出会い」(前書き)

いきなり短いです。ていうか長い文章書けないのかも

第一話「黒き翼との出会い」

「ナギ、急いでください！」

眼鏡の男は赤毛の少年、ナギに苛立ちを持った声をかける。

「わかってるつつうの詠春！遅れんなよジャック、アル！」

ナギも軽い口を叩きながらも内心焦っていた。

「うるせえ！こっちは二日酔いで来てやってるんだ、文句言つなバカ！」

ジャックと呼ばれた筋肉質の男はそう言いながらさらに速度を上げる。

「おやおや、誰に言っているんですか？ゼクト殿、準備はよろしいですか？」

アルと呼ばれたローブを着た青年もいつもの笑顔が消えて受け答えをしていた。

「まったくお主等は…。と、見えてきおったぞ！」

ゼクトと呼ばれた白髪の少年は呆れながらも魔力を高め空を翔る。

街まではあと少し…

＼ SIDE ナギ 〵

俺達、紅き翼はかなり焦っていた。というのも連合のとある都市が帝国の奴等が召喚した悪魔に襲われていると姫さん達から聞いて向かっているところだ。正直悪魔の軍勢程度じゃ俺達は負けるはずは無いが【完全なる世界】が関わっているのだから単なる破壊活動じゃないはずだ。

気合を入れなおす意味でジャックやアルに声をかけ魔力を練りあげる。

ようやくと街が見えてきた！よし行くぜ！

と、突然街中から膨大な魔力が発せられたと思ったらこちらに漆黒の球体が迫ってきた。

「な……んだありや………！？」

漆黒の球体を避けて街を見ると、遠くてまだハッキリとは見えないが魔力のほどから俺と同等な力を持っていそうな奴が悪魔の軍勢を吹っ飛ばしていた。

「ナギ！急ぐぞー！！」

詠春に言われハツとする

「あ、ああ。行くぜテメエ等！」

そつだ、考えるのなんか後でいい。今は奴等を倒すだけだ！

俺達が着いた時には街の悪魔の気配はほぼ消えていた。

「こいつぁ一体……。」

「見てください、皆さん！」

アルが指した先を見るとかなりの力を持った悪魔4組と見た目俺と同じくらいの紫色の長髪を結った男が戦っていた。

「あの力、爵位級か……ムッ！これはちとヤバいかの！？」

「くっ！仕方ない！ハアッ！！！」

駆けつけようとしたとき、男の雰囲気が変わった。先ほどまで悪魔の邪気しか感じられなかったが、今では男のほうから感じられる邪気のほうが強い。

それもそのはず。男の背中からは悪魔の翼が広げられており、魔力の桁が膨れ上がっていた。クッこの魔力、桁違いだぜ！

それからは一方的な展開だった。

- ある悪魔は拳を受け胸を貫かれ -

- ある悪魔は蹴りによりその体を上と下に引き裂かれ -

- またある悪魔は男の放った魔力の塊に全身飲み込まれ -

一瞬のうちに3匹の悪魔が消え去っていった。

俺はその戦い方に啞然とするしかなかった。悪魔、しかも爵位級ともなればその魔法障壁を破るのもなかなかにしんどい。だというのに目の前の男は障壁がないかのように悪魔を倒していった。

「さて、貴様で最後だ！何か言い残すことはあるか？」

『クツ、サスガハ【裏切りマーベリックの異端児ビトレイアル】。コノ力ノ差……、才前ノホウガ化ケ物ダナ……。故二才前ハイツカ世界カラ消サレルダロウ。』

「五月蠅れっしやうえよ。んなことは分かっているさ！暗黒魔闘術奥義・魔人あんこくまとうじゅつおうぎ まじん烈光殺れつこうころ！！」

男の拳は最後の悪魔を粉碎した。

『先二逝ッテ…ルゾ……』

悪魔が消え去ると男は俺たちの前に降り立った。

） SIDE OUT ）

男は悪魔の翼を閉じてナギ達に近づいていった。

「はじめましてサウザンドマスター、それと紅き翼。俺の名は神凧^{かみなぎ}翼^{つばさ}。アウトブレイクワルツ殲滅円舞だ。」

【続く】

第一話「黒き翼との出会い」（後書き）

【使用技】

暗黒魔闘術：魔界に伝わる幻の戦闘術、自分の魔力を集束し異質のエネルギーとして使用する。これにより通常の魔法障壁はほとんど意味を成さなくなる。

暗黒魔闘術奥義・魔人烈光殺：拳に魔力を圧縮し、相手を殴りつけ粉々に粉碎する。

第二話「紅き翼と黒き翼」(前書き)

うん。サブタイ意味わかんないかも…。

第二話「紅き翼と黒き翼」

俺の目の前では赤毛の少年、眼鏡の男性、筋肉質の男、ローブに身を包んだ青年、白髪の少年が呆然とこちらを見ていた。

うわっ紅き翼だよ！やっぱり漫画のキャラに会って感慨深いものだな……。てかこんなエピソードあったっけ？

とりあえず挨拶も兼ねて通り名（【中二くさいな……】）を告げた。

「はじめましてサウザンドマスター、それと紅き翼。俺の名は神凧かみなぎ
つばね翼。…穢滅円舞だ。」

） SIDE ナギ ）

男が名乗った。名前の感じからすると詠春と同じく旧世界の生まれっぽい。だが穢滅円舞だと！？確か奴は…

「お主が400万\$の賞金首、悪魔を狩りし悪魔じゃと？…じゃが奴の噂は30年以上も前のもの……。お主どう見ても10代ではないか？」

そう、師匠の言う通り奴の噂が出始めたのは今から30年以上も前。俺がまだ魔法学校に通ってた頃校長の爺から聞いたことがあった。どう見ても目の前の男が……。っておい！

「師匠、アンタがそれを言うのか？」

「まったくです。貴方ほど年齢詐称という言葉が似合う人もいないでしょうに。」

「…俺は半魔だからな、普通よりも年をとりにくいだけさ。そうさな、5年にひとつ年をとるといった感じだな。」

「半魔…悪魔とのハーフということですか。ならば先ほどの邪気や魔力も納得がいきます…バグキャラとしてですが…。」

アルがやれやれといった感じでため息をつきながら言う。

にしても悪魔とのハーフ、か。さっきの邪気や桁違いの魔力から賞金首にされてもおかしくはないが、目の前の男というより少年からはそんな気配感じられないな。

「なあ、翼。お前なんで賞金首になったんだ？」

とりあえず気になることを聞いてみた。

なに、当時の連合と帝国のNo.3、そして奴等の命令でやってきた立派な魔法使いを殺しただけさ。【完全なる世界】と繋がっていた…な。」

「そ、そんな昔から奴等との繋がりがあったのですか…。」

詠春が驚きを隠せないでいる。

「確かに、両名とも同時期に失踪し一時期は暗殺では？とは言われていたが、いくら搜索をしても魔力の痕跡すら見つからないことから神隠しとまで言われてましたよね。」

アルは翼を探るように見る。

「ああ、それは【死の刻印^{しこくいん}】っていう俺固有の呪いだ。その呪いを受けた者、66日後に消滅するというものだ。この間に俺を殺せば呪いが消えるってことだから奴等は必死になって賞金を上げ俺を殺そうとしたわけさ。」

「じゃから異例とも思える速度で賞金の額が上がっていったというわけじゃな。」

「そういうこと。…奴等は自分達に協力しない魔法使い達を危険分子として悪魔や、同じ魔法使いに滅ばさせていった。そういった奴等を残さず殺していったからついた名が【殲滅円舞】であり、悪魔からも忌み嫌われる【裏切りの異端児】というわけさ。」

「……………」

コイツはそんな生き方をしてきたのか……味方も作らずたった一人で……。よし、決めたぜ！

「なあ、翼。お前、俺達と一緒に来い。」

仲間からはヤレヤレといった呆れ顔で見られるが、どうやらコイツ等も俺と同じ意見のようだ。ハッ、珍しいじゃねえか。

「断る。」

…って

「断んのかよ！しかも即断って！？ちよつとは迷ったりしろよ！！」

「当たり前だ。さっきの悪魔を見ただろ？あれは俺がこの街にいてただけで召喚されたんだ。そんな俺がいても厄介事しかおきないことは明白だ。（そう、今は一人のほうがいい。そうすれば被害も小さくなる。）だから…」

「んなもんはどうだっていい！。厄介事？仲間なら迷惑をかけるってんだ！」

俺は畳み掛ける。コイツはどうやら今の自分の顔がわかってないらしい。

「だが俺は賞金く「俺達連合の裏切り者扱い。追われているのは同じ。」「…クツ！それに俺は悪m「あ、俺帝国の奴等から「連合の紅き悪魔」って呼ばれてたんだ。」「…グツ！？っていや、それはただの呼び名だろ！」

「うぐっ！とおにかあく、お前はこれから俺達の仲間だ！楽しくいこうぜ」

「！？…お前…バカだな……。 （ヘラさん、俺…思い出したよ。楽しく生きるってこと。）」

「まあナギがバカなのは今にはじまったことじゃありませんしね。」

「そうじゃの。未だにあんちょこ使うようなバカじゃしのお。」

「ナギ^{バカ}につける薬はないといえますからね。」

上から順にアル、ゼクト、詠春。あまりバカバカ言っくんじゃねえ！

「テ、テメエ等…！好き放題言いやがつて！」

「ハッハ。ところで翼よお、後でいつちよ戦^やろうぜツ！」

ジャックの奴、俺が言おうとしたのに…。まあ後で戦^やりあえればそれでいいがな。

「気が向いたらな…。」

気がついたら涙が翼の頬を流れていた。

「翼…。よし、いこうぜ俺達の秘密基地へ！」

「ああっ！」

いい顔するじゃねえか、コイツとならさらに高く飛んでいけるだろうぜ。

） SIDE OUT ）

黒き翼は再び空へと駆け出した。周りに広がるは紅き翼。その紅と

黒の翼、どこまでも高く飛んでいけるように…。

あれ？秘密基地？それって…確か……

やっぱり原作どおりの掘立小屋なんですなえ〜

【続く】

第二話「紅き翼と黒き翼」(後書き)

描写が少ない…。これも文才のなさのなせる技か…orz

第三話「バグキャラ VS 黒き翼」

紅き翼の掘立小屋…もとい秘密基地に着きました。思ったよりもボロいな……。

お、あそこにいる金髪の女性と隣の褐色肌の幼いゲフンゲフン…少女がアリカ姫にテオドラ姫か。

こらアル、こつちを見るな。俺はお前のような趣味は持っていない……一応……。

「帰ったか、我が騎士よ。」

「だから姫さんよお、俺のクラスは魔法使い。騎士じゃねえつつうの……実はアンタ頭悪いんじゃないの？」

おいおい、そんなこと言っと

パアン！…はたかれるぞって遅いか。

「いつてえ！何しやがる！？」

「そ奴は何者じゃ。」

「聞いちゃいねえし…。コイツは翼、俺達の新しい仲間だ。」

「はじめまして、アリカ姫。俺は神風翼、殲滅円舞と呼ばれている。」

アリカ姫が驚きの表情を浮かべる中、なぜか横からツツコミが入った。

「嘘じゃ！お主のような人間ヒューマンのしかも子供が、あの泣いている子供を食べてしまうといわれた悪魔であるはずなかるう。」

ラカンに肩車され（ラカンは振り落とそうとしているが…）こちらに向かってくる。……俺はナマ。ゲですか？

「むう、君のような子供に子供といわれるとは納得いかんが…。」

言いながら羽を広げ

「見ての通り、俺は半分悪魔の血が流れていてね。こんな成りだが50年近くは生きている。納得したか、テオドラ皇女殿下殿？」

軽く笑いかけると

「／／／／。わ、妾を子ども扱いするな！（なんて笑顔をするのじゃ。それに城の者達以外の男に名前と呼ばれるなど初めてじゃ…。な、何じゃこの火照りは…。）ジャ、ジャック、下ろすのじゃ！」

「勝手に飛び乗ってきて下りるのかよ。ハハーン、ホレたか？」

「なっ！？」

「ハッハア、そうかそうか。ジャジャ馬かと思ったら意外なところもあるじゃねえか。」

「だ、だ、黙れ！この筋肉達磨！！」

「ヨオシッ、荷物もなくなったところで戦^やろっぜ、翼！」

「本気だったのか……って当たり前か、この戦^{バトル}闘^{マニア}狂^アめ。」

「褒め言葉として受け取っとくぜ！じゃあまずは小手調べだ。ラカ
ン適当に右パンチ！」

「クウッ！これで小手調べかよ！！」

遠くから放ってきたために何とか避けれたが、なんて一撃だ！

ネギの千の雷を5本を喰らってもまだ立ち上がれるタフな奴だ。^{バケモノ}
なくともコチラが遠慮することはないだろう。

「今度はこっちからいくぞ！ウオオオオッ！！！」

） SIDE 紅き翼 ）

「あれは先ほどの……魔力強化……いえ、違いますね。」

「そうじゃの。あれは魔力そのものを圧縮しているといったところ
じゃろ。じゃが、実際にそんなことをやれる奴など闇^{ダークエヴァンジェリル}の福音以外に
は聞いたことがない。しかも翼のは闇の福音のとは違い、何の術式
も使用しておらん。これがどういふことかわかるか、馬鹿弟子よ？」

「まあ、なんとなくだが……術式なしの魔力行使は術者への反動が
大きく危険が高いつてことか？」

「ホツ、そこまで馬鹿ではなかったか。そうじゃ、具体的な例が魔力暴走^{バードライフ}じゃな。それにしても翼の魔力操作はかなりのものじゃの。見たところ魔法は使えていないようじゃが使えるようになれば面白そうじゃな。」

） SIDE OUT ）

足に魔力を集中し瞬動を行いラカンに襲い掛かる。

「よつと、危ねえ危ねえ。その技、かなりの威力があるからな。それに、ソイツはどうも普通の魔法障壁じゃ防げねえみたいだしな。」

さっきの戦闘でそこまで理解したのか！？筋肉達磨の馬鹿かと思っただが、やはり戦闘に関しては以上に頭が回るようだな。

「フム、大体分かった！。俺式強さランクで言う伯爵級の強さを900とするとお前さんは6400といったところか…。これならさっきの戦闘も納得がいくつてもんだ。あっちなみに俺は100000くらいだな。」

この生けるバグキャラめ…。毒づきながらも連続で瞬動を行いフェイントを混ぜながら攻め立てるが、時に避けられ、時にカウンターを入れられこちらの攻撃は掠るくらいだ。

仕方がない。切り札のひとつを使うか。瞳に魔力を通し「瞬視…」と呟く。

＼ SIDE ラカン 〵

この年齢… つつても50年近く生きているらしいが、これだけの強さを持っているとはな。身体が成長したら今の俺より強くなるのは確実って所だな。

さて、色々と分かったことだしそろそろ終わらせるか… ツ！？な、何だこのイヤな感じ！！？

翼を見ると、ダークレットの瞳が赤水晶に輝いていた。経験上アレはヤバイ！

「全開！ラカン・インパクトオ！！！」

あつヤベ…………

＼ SIDE OUT 〵

全開できたか！

「だが、この眼なら！」

瞬時に理解する。強大なエネルギー、だが急な練り方のせいか綻びを直感した。

「狙うは……そこだ！暗黒魔闘術奥義・魔人烈光殺！！」

一点を目掛けて拳に集中させた魔力を爆発させる。ラカンの放ったエネルギーを弾き飛ばした俺はラカンの技後硬直を感じラカンに襲い掛かる。

「なっあれを弾くだと！？クッ気合防御！！」

「ムダだあ！」

「グボアアアツツ！！！」

「馬鹿な！？ジャックの障壁を破壊したと！！！？俺の千の雷をも防いだつてのに……」

「どうやら……翼が使っている技は普通の障壁は役に立たないようじやな……。おそらく魔力を圧縮することにより魔力の性質そのものが変化しているのであろう。」

「どれだけバグキャラなんですか、彼は……！？」

「人をあまりバグ扱いしないでくれ詠春。これは親から受け継いだ技でな、ゼクト殿の考えの通りコイツを防ぐには同じく圧縮させた魔力で防ぐしかない。ラカンもそれに気づいたから魔力を圧縮しようとしたが、あれくらいでは防げないさ。」

瞳を元に戻し、翼を引っ込めてナギたちに近づく。

「お主やるではないか。あのジャック・ラカンを一撃で倒してしまふとは。よし、決めたぞ。お主を妾の従者にしてやろう。」

「お断りします。」

「何故じゃ！？妾のことがキライなのか？」

「いやいやいやいや、キライとかそんなことじゃなくて…。」

「なら問題ないのじゃな？」

「いやだから駄目だって。俺には悪魔の血が半分流れていると言っただろう。そんな奴が従者になつては殿下の品位が疑われるぞ。」

「そりゃ大丈夫じゃねえか？」

「ちょ、お前ピンピンしてんじゃねえか。それに何か不吉なこと言つたぞコイツ。」

「コイツは殿下といつてもたんなるジャジャ馬だし、現ヘラス王は寛大だからな。娘が気に入った奴は認めてくれるだろう。」

「そうでしょうね。では皇女殿下のお守…警護は翼にお任せしましょう。」

「おお、そいつは丁度良い。お前もそれでいいよな？」

「無論じゃ。」

なんて親馬鹿なのだろう……てかお前等人的の話聞けよな……。

「よし、決まりだ。ところで翼よお、さっき何をやった？もの凄くイヤな感じがしたんだが…。」

「イヤな感じ？どついうことだ？」

「ナギ、それにお前等もだが、何も感じなかったのか？うまくは言えないが、言うなら…そうだな、こつちのすべてを見透かされているような感じがした…。」

「よく分かったな。あれは魔眼の一種で、瞬視の魔眼という。対象範囲は俺の瞳にはいる範囲全て。効果としては眼に入るもの全てを理解・直感できるってことだな。そうだ、ラカン。あれだけ早く力を練れるのはたいしたもんだが、その分練り方が雑になっているぞ。あれだと今回のように弾かれることもあるだろう。もっと丁寧に練ることをお薦めするぞ。」

「おお、気をつけとくぜ。それを直したらまた戦^やりあおうぜ。」

「……気が向いたらな……。」

できるだけそんなことは勘弁してほしいなと思いつつ日は暮れていくのであった。

【続く】

第四話「日常、そして接触」

俺が紅き翼の一員になってから数週間が過ぎた。

最初のころはガトウには警戒され、タカミチ少年からは避けられていたが完全なる世界の拠点をいくつも一緒に潰していくうちにガトウからは警戒が解かれ、タカミチ少年からは暗黒魔闘術を教えてくれと頼まれた。

この世界の住人に使えるのかと試したくもあり魔力の操作から教えてみたが、どうも術式なしで魔力を圧縮させることまでは出来ないようだ。それでもタカミチには手に溜めた魔力を打ち出す魔力砲を教えることが出来た。

呪文詠唱が出来ないタカミチからはそれでもかなり喜ばれ、ガトウには感謝された。ガトウから聞いた話によると魔法のように自分の魔力を外に放出することが出来るのがかなり嬉しかったようだ。

それからというもののタカミチは空いている時間があれば俺に魔力の操作について聞いてきたり、俺が居ないときはガトウに咸卦法の修行をしてもらったりしている。

そうした修行をしていると必ず寄ってくる戦闘^{バカ}狂共がいる。ラカンにナギ、果ては詠春までもだ。

詠春曰く、俺の差していた刀に興味を持ち挑んできたのだが、オルステッドの剣術と血を刀に流し込み、^{ブラックマトリクス}BMの魔法で撃墜してやった。

剣を使用しながら無詠唱の魔法を使用したことに驚きをもたれたが、

俺が半魔ということもあり納得してもらった。アルからは「バグキヤラではなくチートキャラでしたか。」と言われたが気にしないことにした。

詠春との試合が終わった後で、俺はゼクトに魔法の師事を仰いだ。こちらの世界の魔法は使えないことを言うと、

「魔力媒体の指輪を持ちながら何故じゃ？」

と突っ込まれたが、家族の形見でそんな効果があつたとは思わなかったと嘘について誤魔化した。

「まあよからう。ナギのバカは詠唱をあんちよこで済ませて覚えようともしんくせに魔法自体を覚える速度が半端なくてつまらんかったからのう。」

く それから数日後 く

「お主もある意味つまらんかったの…。というかある意味チートじやの……。」

「それは申し訳なく思うが、チートというのは出来るだけやめてくれ。」

ゼクトが溜息混じりにジト目でこちらを見る。

結果から言つと俺のこちらの世界の魔法の素養はかなりなかった。得意といえる属性がなく、魔法の射手は全属性使用可能だが、中級魔法は雷の暴風くらいしか使えなかった。だがそこはチートキャラ嘗めるなよってことらしく、魔法の射手の無詠唱の本数は一属性毎に1000を超えていた上に、同時に複数属性の使用可能で一矢の破壊力がガトウの居合い拳に相当していた。

俺も最初は魔法の素養がないことを軽く落ち込みはしたが、魔法の射手で王の財宝の真似が出来ることには呆れてしまった。

ゲート・オブ・バビロン

魔法を覚えてから一週間後、俺は新たな完全なる世界の拠点を潰しにいった。

そこでようやく奴等の本拠地の情報を手に入れた。まあ、原作知識があるから場所は分かっていたが、皆には言えるわけもなく情報を探していたのだが。

「それは返してもらおうか？障壁突破・石の槍」

「なっ!？」

地面から突如複数の石の槍が現れ襲い掛かる。

「解放、魔法の射手・光の十矢!」

俺は遅延させていた魔法の射手により槍を破壊する。

「魔法の射手如きでこれを防ぐとは…。流石は【1000の射手】。

「

水のゲートから現れたのは白髪青年。

「お前がアーウェルンクス……完全なる世界のNo.2か。」

「驚いたね、キミは僕が黒幕でないことを知っているのか？」

感心するような顔でこちらを見るアーウェルンクス。

「当然だ。ついでに言うなら貴様等の目的も……。例え世界の存在が幻でも、今ここに生きている人々の運命を決めることなんか許しはしない！」

「なっ!？」

今度は驚愕の表情になる

「今ここで滅びるか？地のアーウェルンクス……。」

遅延させておいた魔法の射手を解放して自分の背後に出す、その数約5000本。さらには瞬視の魔眼を発動させ戦闘態勢をとる。

「どうやらキミにはよほどの準備をしなければ返り討ちにあいそうだ。今日のところは引いておくよ。じゃあね、今度は墓守り人の宮殿で会おう。」

来たときと同様に水のゲートを使いその場から消えた。

俺も戦闘態勢を解き、その場を後にした。

【続く】

第五話「光の剣」(前書き)

今回オリジナルで魔法をイジってしまいました。

第五話「光の剣」

「いよいよ最終決戦だな。」

「ああ。」

俺達は奴等の本拠地、墓守りの宮殿を目の前にしている。

「不気味なくらいに静かだな、奴等」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

「油断するなよ。そういう敵に限って追い詰めたとき一歩乱起こすんだ。例えば……そうだな、黒幕的な敵がもう一人とかな……。」

「それは地のアーウェルンクスの他にまだ敵がいるということでしょうか？」

アルの前ではあまり迂闊なことは言えんな。適当に濁しておくか。

「……そういう気構えでいけて事さ。そら、準備が整ったみたいだぞ。」

「ナギ殿！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

若い頃のセラスが準備が整ったことを報告しにきた。

「おう。あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が

本丸に突入できる 頼んだぜ！」

「それで、あの……ナギ殿、それに翼様。」

これって確か…

「ササ、サインをお願いできないでしょうか。」

だよな。この人って意外とミーハーだったのな。って俺も？てか”様”って…。

「おお？ ああいいぜ、それくらい。」

「まあ俺のでよければいいが。」

「ナギ殿、そ、尊敬していました。そして【拳神】様にお会いできるとは。感激です！」

俺とナギがそれぞれサインを書いて渡す。

俺のサインなんか価値がないんじゃないかね？って聞いたたら

「何を仰いますか！翼様は半魔であるという境遇にも関わらず、弱きを助け、さらには悪をも救うという偉功を立ててきたではありませんか。そんなあなただからこそナギ殿に匹敵するファンが集っているのです。」

「けど賞金首にファンクラブってどう思っよ？」

振りむき、皆に聞く。

「そんなところもワイルドで素敵なところなんです。」

「民衆、特に年頃の女性とくれば完全な正義よりも多少の悪が混じっているほうが惹かれるということですよ。」

「ウハハハハッ！」

上からセラス、アル、ラカン。…駄目だ、コイツ等。てかラカンの奴はあとで殴る！

ちなみに先ほど呼ばれた【拳神】とは紅き翼と共に行動してからついた二つ名だ。

他にも【サウザンド・シューター1000の射手】、【赤眼の悪魔】と呼ばれることも増えた。

それと同時期に賞金額が1200万\$に跳ね上がり、【せきがん赤眼の死呪】と恐れられるようになった。

少し経ってからガトウから連絡が入る。

どうやら連合・帝国の正規軍の説得は間に合わないらしい。準備が整うまで決戦を遅らせてほしいというが、

「既にタイムリミットだ。」

「ええ 彼らはもう始めています……『世界を無に帰す儀式』を。」

世界の鍵『黄昏の姫御子』は今彼等の手にあるのです。」

「ああ。よし野郎ともいく「ナギ」んだよ、翼。今から突撃だつて時に。」

「それは悪かったな。ナギ、俺は混合部隊と一緒に外の敵を蹴散らそうと思う。どうも瞳が疼く……何か嫌な予感がするんだ。」

「魔眼の無意識反応か……。お主の魔眼は直観力が異常に働くからのう。別によからう、ナギよ？」

「師匠……。そうだな、こつちにも予備の戦力を残しておいたほうがいざって時に対処が出来るしな。頼むぜ、翼！」

「ああ、ありがとなナギ。突入の際の道は空けてやる。必ず姫子ちゃんを救い出せよ！」

「勿論だぜ！」

「さて、久しぶりにこの技を使うか！いくぞ、デス・クリムゾン！」

両の手に溜めた魔力を凝縮し、漆黒の球体を作り上げ敵に向かって投げつける。

投げた先の敵は飲み込まれ、大爆発によってさらに多くの敵が巻き込まれる。

「ナギ！」

「よし、改めていくぜ野郎ども!」

「「「「「おおっ!」」」」」

最終決戦の幕が上がった。

「個々で挑むな、必ず二人以上で挑め!さすれば仲間がお前達を守ってくれる。」

『おおっ!』

さて、俺も暴れるか!

「解放、魔法の射手・光の弾丸100発!」

眼前の悪魔を貫き、それでも尚威力が衰えなく後方の魔族も貫いていく。

絶え間なく向かってくる悪魔や魔族、それらを魔法の射手で貫き、暗黒魔闘術で碎き、刀で斬り裂く。

周りにも多少の被害が出ているが、まだ死人は出ていない。

「ッ、強スギル!?ナンドコイツ等ノカハ!」?

「コンナ割ニ合ワナイ戦イハイヤダ!」?

「何処へ行く、下等なる者共。」

背後から何十人も悲鳴。振りむくとそこには人の姿をした悪魔が30人ほどいた。

「キ、キサマ等は…。」

冷や汗が流れる。

「これはお初にお目にかかる、【裏切りの異端児】よ。我は公爵の名、そして後ろの者達は侯爵の名を冠する者だ。」

公爵級だと！？確か以前ラカンの強さ表から聞いたことだが、一般的な侯爵級の強さは3000前後、公爵級になると一般的に7000前後の強さを持っているとのことらしい。

「単刀直入に聞こう。お主、我等と共に来ぬか？」

「何だと？」

「このような幻の世界の、下等な者共の為に我等が同胞の散っている様は見るに耐えんのだよ。」

「黙れ！暗黒魔闘術奥義・魔人裂光殺！！」

ガシッ！

拳を掴まれただ！？馬鹿な！！？

「何を呆けた顔をしているのだ？今まで何度も見ているのだ。それが圧縮された魔力で封じ込められることなどとうに理解しておるわ。」

「
右足で掴まえている手を蹴り上げ距離をとる。

「で、今が答えというわけか……残念だよ。では君には消えてもらわねばならん。」

「はっ！元から答えなんて判りきっているからこそその手勢だろ。セラス、部隊を下がらせろ、奴等は俺が滅する。」

「なっ！？翼様、それは無茶です！我等もどこまでお役に立てるかは判りませんが一緒に戦わせてください！」

「駄目だ、それに……これくらい一人でなんとかしてみせるさ。」

不敵な笑みで答える。

「馬鹿を言つな。君のお得意の魔闘術は我等に効かぬうえに、これほどの爵位級を一人でだと？」

「生憎と、勝ち目のない戦いは挑まないのな。……アデアット！」

胸元から銀色のカードを取り出し言の葉を紡ぐ。

「ムッ！パクティオーカードだと！？」

光と共に出てきたのは一本の柄だけの剣。

「柄だけだと？嘗めるなよ！」

いるんだよね、相手の武器が脅威に値しないと突っ込んでくる敵が…。

「お前はテンプレキャラか？…光よ！！」

柄より光の刀身が伸びて突っ込んできた敵を斬り裂く。

「ば、馬鹿な…俺の障壁を斬り裂…くだ…と…。」

斬られた悪魔は塵となって消えていく。

「な、何なのだ！その剣は！？我等は呼ばれた世界で倒された場合、元の世界に還るだけのはず…だが今のは…。」

「そう、滅したのさ。この剣は光の剣、使い手の精神力を光の刃にとなす剣だ。こいつはお前達のようなこちら側の世界に精神界を介アストラルして召喚される奴を直接滅することも出来るのさ。人の命も介さぬ下種共よ、滅びの時間だ！瞬視！！」

魔眼を発動させ目の前の悪魔達に突っ込み上段から袈裟斬り、振り向きざまに薙ぎ払い、跳躍して振り下ろす。3匹の悪魔が消滅した。距離から一気に殲滅するのだ！」

「甘えよ！光よ、伸びろ！！」

10m以上の長さになった剣を突き上げ離れていった悪魔を貫く。

「アル・テム・ラ・テム・ルーテック、光の精霊1000柱、雷の

精霊1000柱！魔法の射手・光の1000矢、雷の1000矢！
！」

「こんな基礎的な魔法など効か「グワアッ！」」な、何だこの馬鹿げた威力は！！？」

「そら、止まっていると斬られるよつと！」

「クッ！こうなったら…！」

まだ近くにいたセラスに狙いを定める公爵級の悪魔。

「させるか！」

刀身を飛ばし公爵級の胸に突き刺す。

「グアアアッ！！！！ば、馬鹿な…我等が…こつ…も簡単…に…。
化け物…め…。」

「…化け物でもいいさ。大事な人達を守れるのならな…。」

宮殿からナギとアーウェルンクスの魔力を感じた。

「そろそろケリがつきそうか…！？そうだ、まだ奴がいた！セラス、
ここは任せるぞ！」

俺は歴史を変えるべく飛んでいった。

【続く】

第五話「光の剣」(後書き)

始動キーが決まったので詠唱しました。

あと、冒頭で触れましたが魔法の射手をイジりました。

『10矢を収束することで貫通力のある弾丸に』

『100矢を収束することで破壊力のある砲弾に』

『1000矢を収束することによって大火力の爆弾に』
という感じで使用していこうと思います。

あと、今回で翼がパクティオカードを使用したので下に記載しておきます。

翼のパクティオカード

主：ヘラ

従者：神風翼

【中央部】

名前表記：CAMINAGI TUBASA

称号：神に愛されし者

【下部】

徳性：s p e s (希望)

方位：c e n t r u m (中央)

【左上角・右下角】

数字：12

【右上角】

色調：A u r u m e t a r g e n t e u s (銀)

【左下角】

星辰性：c a e l u m (天)

【アーティファクト】
光の剣

第六話「黒き翼、英雄に至る」(前書き)

今回で大戦編が終了です。

また拙い文章ですがよろしくお願いします。

第六話「黒き翼、英雄に至る」

墓守の宮殿内はやけに静かであった。これは急がなくてはならないな。

「ハアツハアハア…、よお…翼。そっちも終わったみたいだな。これでこの戦いも終わりだ。」

決着がついたのか、アーウェルンクスの首を持ち上げながらこちらを向く。

「フツ…君達は…まだ、僕を…黒幕だと、思っていたのか…？彼は気づいて…いたと…いうのに」

「なんだと！？」

「バカナギ！油断するな！！」

奥から光線がやってくる。

クソツ間に合わない！ならば！！指を噛み、血を媒体にナギとの位置をリプレイスする。
いれかえる

「ガフツ！」

「翼！！」

光線が腹部を貫通していった。途端に腹部が灼熱の痛みを訴えてくるがまだ意識を手放すわけにはいかない。

追撃をかけるかのように強大な衝撃波のようなものが襲ってくる。

「いかん！最強防御！！」

「全開・気合防御！！」

ゼクトが何重もの障壁を展開するが次々と破られていき、ラカンの両腕は千切れ飛んだ。やはりとんでもない力だ。今のこの体でここまで出来るかはわからないが、俺もこの身に宿る最後の切り札を切らせてもらう！

「（イメージしろ、自分が考えうる最硬の盾を！）裏・暗黒魔闘術！！」

魔力を糧に巨大な盾を創りだす。一撃、二撃と魔力を弾き返すが亀裂が生じていく。

ガガガガガッ！！！マズイ、もうもたない！！？

「グッ、アデアット！光よ！！」

光の剣に残りの魔力・精神力を注ぎ込み光の壁を作り出す。

創りだした盾が破壊され、光の壁を押し込んでくる。途端に頭に鈍痛がする。

「痛ッ！フィードバック……か……。」

裏・暗黒魔闘術で創りだした物の破壊は術者にダメージがフィード

バックされる。生半可なものを創ると自分の首を絞めることになりかねないのだ。だからこそ考える最硬の盾をイメージしたのだが…。

ドガァーン!!

凄まじい爆音が響き渡り光の壁が砕け散る。

「くっー一体何が!」

「翼はどうなったッ!!?」

光の欠片が散乱する中に翼は倒れこんでいた。

「っ、翼アッ!!!!」

「ナ、ナギ……無事……か……?」

「ああ、お前のおかげでな。」

「そう、か……なら……勝っ……て……こい!」

「おうよ!お前はゆっくり寝てな。」

「そう、させて……もらっ……アスト……ラル。よし、いって……こ……」

そして俺は意識を失った。

） SIDE ナギ ）

気がつくと後ろにいたはずの翼が前方で光に腹部を貫かれていた。

何が起きたんだと確認する前に翼は倒れていた、その前方には黒いローブを着た奴。

よくもやってくれたな。俺の仲間に、友に手を出したこと…後悔させてやる！

「ワシもいくぞ。弟子が踏ん張ったのに師匠がこれでは情けないから。」

「たった二人で！？無茶です！！」

「無茶でも誰かがやらねばの。それに今のナギは翼から強化の魔法をかけられたようだな、一時的じゃが今のコヤツはチートキャラじゃ。」

翼の奴…そんなことまで…。ますます負けられねえじゃねえか！

「そういうこった。だからアル、翼を頼んだぜ！」

「判りました。ですが、生きて帰ってくるのですよ。」

「ハッ、誰に言っている。俺は紅き翼最強の「千の呪文の男」の男だぜ！！」

） SIDE OUT ）

ん…。俺は…そうだ、ナギを庇い造物主の一撃をくらってぶっ倒れたんだっけ。ライフメーカー

段々と意識が覚醒し、ゆっくりと目を開き上半身を起こそうとする。だが、胸元に多少の重みを感じ首だけ起こしてみると、テオが頭を乗せて寝ていた。

どうやらかなり心配させたみたいだな、と勝手に左手がテオの頭を撫でていた。

あれ？なんかテオの顔が赤くなっているような……

「おや、目が覚めましたか？つとこれはお邪魔でしたかね？ささっどうぞ続きを…。」

「うがあああつ！折角、折角の良い雰囲気を邪魔しおってえ……！」

テオ、起きてたんだ…。なら声くらいかけてくれよ。

「ですから今出ていこうとしているんじゃないですか。」

「それよりアル、あれからどうなった？皆は…？」

「私も直接は見ていなかったたので結果だけですが、ナギが勝ちました。まあこれは今私達がいることから簡単に予想が出来るでしょうが。そして儀式については、アリカ姫やテオドラ皇女殿下が間に合い連合、帝国の総力を尽くし封印に成功しました。そういう意味では良い結果といえます。ですが…。」

「…師匠は逝ったか……………」

クソ、原作の結果を回避しようとしたが結局失敗か…。

「気づいていたのですか…。そういえばあなたは魔力の操作が得意でしたよね。」

「ああ。紅き翼の魔力だったら1000km範囲内であれば掴み取れる自信がある。だが、師匠の魔力は…。」

「…。これからあなたはどうするのですか？」

俺の様子を察したのか、急に話題を変えてくるアル。コイツにしては珍しくはあるが、その優しさが今は有難かった。

「そうだな…しばらくは旧世界だけ？そっちを見て回ろうと思う。」

「そうですか、あなたはまだ魔法世界から出たことがなかったのでしたね。」

勿論嘘ですが、久しぶりに和食が恋しいというのも事実だ。詠春からスキヤキを振舞ってもらったときは泣けてきた。

「ああ、こちらの世界はようやく収まったが、あちらの世界ではまだいろいろな問題があるはずだ。その解決の手伝いをしたいことと思う。」

「それよりもヘラスに来ぬか？父上にも紹介したいし…。」

「悪いな、テオ。俺はまだヘラス、連合の両方から手配されている身。いくら今回の戦いで多少の正義を行ったからといっても俺を悪と呼ぶ人は多いだろう。」

「じゃが妾は知っておるぞ。そなたの優しさ、そして勇気を。」

「それはテオが優しい子だからさ。だから君はそんな君にしか出来ないことをやってくれ。」

「…うむ…。」

「あゝ、その、何だ。もういいか？てかもういいよね？」

「何だ、ナギいたのか…。」

「まったく気がつきませんでしたよ。」

「気づいていただろ、てかアル！お前は一緒に来ただろうが！！あゝもういい。行くぞ二人とも。」

「では私はこれで。」

アルは転移魔法を使用しこの場から去った。

「ちっアルの奴逃げやがったか。だがまあ翼さえいればいいだろう。てなわけで来い翼。」

それから式典に連行された。周りは歓喜に満ち溢れ人々の顔には笑顔があった。

「見ろよ、翼。この中でお前を悪だなんていう奴はいないぜ、勿論俺達もな。」

ナギはニツと笑い詠春は頷き、ラカンは大きく口を開け笑う。

その日俺は英雄となった。

【続く】

第六話「黒き翼、英雄に至る」(後書き)

いまさらですが、裏・暗黒魔闘術って運命の某弓兵みたいですね。
この小説では裏・暗黒魔闘術で無双ってことはやらない予定ですが、
次はそれをメインにした小説も書いてみたいかも。

以下は補足です。

使用魔法：アストラル

効果：対象者の能力を25%アップさせる。

使用スキル：リプレイス

効果：対象者との位置を入れ替える。範囲は100m以内。

第七話「妖怪と悪との出会い」

旧世界に着た俺はまず日本に向かった。理由は和食が食べたかったから。一月ほどはいろいろな所で食べてその料理法を吸収していた。

そして理由のもう一つが、

「それにしてもここまででかかったなんてな。」

今俺は夜の空から巨大な樹のある麻帆良学園を見下ろしていた。あちらこちらで魔力の変動があるということは侵入者がいるのだろうが今の俺には関係ない。

「こんな極東の学園に何の用かろう？」

後ろを振り向くとそこには…

「ぬらりひょん…。」

妖怪がいた。

「誰がぬらりひょんじゃい！…まあよい、この学園に何のようじゃ、拳神殿。」

「アンタは？」

「フオッフオッフオッ。そうじゃな、ワシは「ぬらりひょんではなくバル。ンだったか。」だからワシ人間じゃから！…オホン、ワシ

は近衛近右衛門。この麻帆良学園の学園長をしている。」

人間といわれても目の前にいるのは20年後と同じ姿の爺さんだ。人外と思っても仕方のないことだろう。

「用といつてもこの国には和食を食べに来て、ここには魔力の変動を感知したから来ただけだし…。」

半分嘘だけど…。

「フオツ!? なんじゃ、そうじゃったのか。」

「ああ、爺さん。あそこの山の中腹に召喚師がいるから捕まえときな。爺さんなら余裕だろ。」

「おお、そんなところにおったのか。感謝するぞい。ところで拳神ど「神風翼、好きに呼べ。」では翼君、お主さえよければこの学園で働かんかのう?」

「残念ですが、俺にはまだやることが山積みなのでお断りします。では、俺はこれで。」

そういつて飛び去っていく。

） SIDE 学園長 ）

人手が足りなくてワシ自ら侵入者捕獲に出ることになったときは正直面倒くさかったが、おかげで珍しい人物に会えたわい。

英雄にして1200万\$の賞金首『赤眼の死呪』。かの闇の福音よりも多額の賞金首じゃが、婿殿の言うとおり噂とは全然違うイメージじゃったの。

この人手不足を解消するのに学園に雇用しようとしたが失敗じゃったが、あの口ぶりだといつかは来てくれるかもしれぬの。

もしも婿殿に娘ができた場合は許婚にでもしてしまおうかの、フオツフオツフオツ。

＼ SIDE OUT ｝

日本を離れて早一ヶ月、俺は樹海を彷徨っていた。飛べばいいじゃないかというツツコミが入りそうだが、俺は認識障害の魔法が使えません。だからできるだけ地上を歩くようにしている。

なら何故麻帆良では飛んでいたの？というツツコミについてはどれだけ大きいか見たかったんだよ！と返しておこう。

さて、いい加減樹海にも飽きてきたからもう飛んでいこうかと思っただ矢先、複数の魔力の波動を感じた。

十数人ほどの普通の魔力を持った者が大きな魔力を持った者を追っているようだ。しかも大きな魔力を持った者の魔力は著しく小さくなっている。

翼を広げ空へと舞い、魔力の感じた方へ向かう。

上空へと辿り着くと、数人の魔法使いと思しき者達が一人の少女に向かつて中級魔法を放った…今の少女の魔力では防ぎきれないであろう威力の…。

「アデアット！間に合えよ、光よ！いつけえ！！」

光の刀身を幅広に伸ばし少女の数メートル手前に投げつける。魔法は光にぶつかり拡散し、少女も魔法使い達も呆然とする。

間に合ったことに胸を撫で下ろし、ゆっくりと降り立った。

＼ SIDE 少女 ｝

クソ、クソクソ！

正直悔っていた。いつものような正義の魔法使いと名乗る輩が襲ってきた。

それだけであれば何の問題もなかったが、今回の奴等是不死殺しの魔力を秘めた魔法具マジックアイテムを大量に使用してきた。しかも普通の魔法使いには手に入らないような概念を籠めた魔法具を…。

軽く傷つけられただけで魔力を奪われ、傷が治らず、血がどんどんと失われていく。

少し離れたところで中級ほどであろう魔力のうねりを感じる。今のこの身では障壁を張ることもままならない。

このようなところで私は終わるのか、と考えたがまあそれもよいか
と思ってしまうた。

魔法が迫り来る。普通自分が終わるときは走馬灯が流れるらしいが、
600年も生きてきた私には何もなかった。

ズガアアアン!!!

けたたましい音ともに突如、目の前を眩い光が包んだ。

何事かと思い目を開くとそこには輝かしい光を放つ剣が刺さってい
た。目の前の剣の光に呆けていると

「一人の少女をそんな大勢でいたぶるといふのは感心しないな。」

黒き翼を生やした男が静かに降り立った。

＼ SIDE 少女 ｝

「大丈夫か、少女よ。」

安否を確かめるために後ろを向くと俺の思考は止まった。あれ？金
髪に頭に乗っている人形、どこかで見覚えが………エヴァじゃん！？

「あ、ああ。貴様は……」

「邪魔をするな！お前自分が何をしたか分かっているのか！？そい

つは闇の福音、不死の吸血鬼なんだぞ!!」

男が苛立った声で告げるが正直鬱陶しい。

「少し黙っててもらえんか、魔法使いさん？」

殺気を込め軽く睨みつける。エヴァも自分の喋っているところを邪魔されたのがムカついたのか睨みつけていた。それだけで男は腰を抜かし周りの奴等も萎縮する。

萎縮する男達の中で一人が俺に気づく。

「紫の髪、赤い眼、そして黒い翼…! コ、コ、コイツ『赤眼の死呪』だ!!?」

あちこちで恐怖の悲鳴があがる。

「質問に答え、こちらの要求を呑むなら生かして返してやるが、どうする？」

腰を抜かしている男に問う。

「わ、わかった。」

「まず一つ、お前達のその魔法具はどこから手に入れた。そしてもう一つ、なぜ彼女を襲う。」

「こ、こいつはメガロセンブリアの元老院から渡されたものだ。そしてこれを使い、その吸血鬼を退治しろと…。」

「なるほど、ならその魔法具全て置いて去れ！」

そう言つてエヴァのほうを向き身体に異常がないかを調べる。

「い、いきなり何をすッ！おい、後ろ！！」

「闇の福音共々滅びよ赤眼の死呪！千の雷！！」

ズグアッ！ドドオオオン！！！！！！

「やったぞ！ついに闇の福音を退治した、しかも赤眼の死呪も……」

「千の雷を遅延呪文ディレイスベルで使うとはやるな。だが、ナギの千分の一の力もないお前がやつても意味はない。そして、つくづく救えない奴だな……。」

煙が晴れるとそこには光の剣を構える翼がいた。

「な、な、なぜ無事なんだ！？いつたい何をした！！？」

「斬つたのさ、お前の魔法を。コイツに斬れない物は存在しない。さて、撃つてきたということは死ぬ覚悟が出来ているということだな？」

右手を掲げ男に呪いをかける。

「死の刻印、お前はあと3日で死ぬ。せいぜい有意義に過ごすことだな。じゃあ行くか、っと忘れていた。魔法の射手・雷の弾丸100発！」

魔法具を破壊し、エヴァを抱え飛び去る。

「は、放せ！おい、聞いているのか！？」

「力が入らないのだろう、嫌なのは分かるがしばらく我慢してくれ。」

「うううっ／＼／＼。」

「ケケケ、柄二モナクゴ主人恥ズカシガツテヤガル。」

言った途端チャチャゼロは落とされた。自力で飛んでついてきているが。

湖畔に下りた俺は指を噛み血を流し魔法を使う。

「レイキュアー、ルリックヒール。」

体の状態を癒し、体力を回復させた。

「さて、聞きたいことはあるか？」

「ではまず、なぜ私を助けた。」

「女の子が教われてたら助けるのが男つてもものじゃないか。」

「私は悪の魔法使い、不死の吸血鬼のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだぞ！」

「誇り高い悪…か。だか、そんなこと助けるのに関係ないじゃない

か？」

「知っていたのか。ハッ、だが悪を助けるために正義の魔法使いを殺すとは…英雄とは思えんな。」

「守りたい奴を守って、それが偶々正義だっただけさ。俺は大切なもののためなら喜んで悪へと染まるよ。」

俺の答えに満足したのか口の端をニツと上げるエヴァ。

「貴様の考えはよくわかった。では次の質問だ。先ほど私に使った魔法は何だ？600年生きてきたが見たこともない魔法だったぞ。」

「どちらも自己流の魔法だ。媒体となるのは自身の血液。血液の量で利用できる魔法、魔法の威力が変化するといったところだ。」

「何だそれは！それでは諸刃の剣ではないか！」

「だから基本的にはこちらの魔法を使うというわけだ。…といっても魔法の射手くらいしか使えないが…」

言ってて落ち込む俺…。やっぱり大魔法とか唱えてみたいわけだよ、俺としては…。

「魔法の射手あの威力…それにあの光の剣…そして……………（チラツ）」

「ん、どうした？」

「／／／な、なんでもない！」

「さて、もう聞きたいことないか？ ないなら俺は行く、じゃあ」
「私のモノになれ！」 ナンデスト……？」

「私のモノになれと言ったんだ。」

あれ？ これってナギが言われることだよな？ まあいいか。結局はナギに惚れる事になるんだろーし、撒いちゃおう。

「俺は誰のモノにもならんよ。サンドマン。」

「な……待……て……。」

倒れこむエヴァを抱きとめて横に寝かせる。ナギ、後は任せた！

「ドコニ行クンダ兄サンヨオ。俺ト殺シアオウゼ！」

そつえば居たのね。エヴァに氣を取られていてすっかり忘れていた……。

「ナンカ殺ル氣ガサラニデテキタナ！」

「おいおい、お前と殺^やりあつつもりはないぞ。魔法の射手・風の10矢」

「コンナモンデ俺ヲ……ッテ動ケネエシ……。」

「じゃあ俺は行くから。エヴァンジェリンによろしくな。」

「待ちナ。才前ノ名前ヲ聞カセロヤ。」

「ああ、そういえば名乗ってなかったな、神風翼だ。じゃあな。」

） SIDE チヤチヤゼロ ）

ゴ主人ヲ助ケタ悪魔ノ翼ヲモッタ変ナ奴。

雰囲気カラカナリノ強サヲモッタ奴ダトイノ八分カタシ、アノ光ノ刀身ヲモツ剣モモシロイ。

コンナ奴ト殺シ合イガデキタラオモシロソウト思イ仕掛ケタガ、近ツクコトサエデキナカタ。

ドウヤラゴ主人ハ惚レチマッタミタイダシ、奴ヲ追ウノダロウ。

名前モ奴カラ聞キ出シタカライツカハ見ツカルハズダ。ソノ時ハ今度こそ殺シ合イトイコウジャナイカ。

） SIDE OUT ）

【続く】

第七話「妖怪と悪との出会い」（後書き）

多くのSSでもそうですが、やはりあの学園長を最初に人として見ることは出来ませんよね？

というわけでこのSSでも人外設定にしておきました。

あと、エヴァとの出会いですがかなり無茶をしたかもしれませんが。

だが、反省はするが後悔はしない！ってことで生暖かい目で続きを楽しんでいたただけならなあと思います。

次回で大戦編後日談が終了し、その次から麻帆良介入使用とします。

今後ともよろしく願います。

以下は補足です。

使用魔法：ルリックヒール

効果：対象者の傷を癒す。

使用魔法：レイキュアー

効果：対象者のステータス異常を回復させる。

今回は不死殺しの概念をも直すという暴挙に出てしまいました

た。

使用魔法：サンドマン

効果：対象者を眠らせる。

第八話「英雄の答えと世界放浪記」(前書き)

感想にて台本のような書き方はよろしくないと意見ができましたので、試験的にですがセリフの前の名前を消して書いてみました。

第八話「英雄の答えと世界放浪記」

俺が旧世界で放浪してもうすぐ二年。そろそろアリカ姫の処刑の日が近づいてくる。

原作では一応立ち直ってはいたが少し発破をかけとか。紅き翼の掘立小屋に向かった俺は皆と軽く挨拶をし、ナギを思い切り殴った。

「しばらく会わないうちに随分とつまらない男になったな、ナギ・スプリングフィールド！」

「つ、翼か…久しぶりだったのにキツイ挨拶をしてくれるじゃねえか。」

「翼！お前、ナギの気持ちが分からんのか！？」

「黙っている、詠春。これはナギの問題だ。」

「グッ！」

唇を噛み、こちらを睨みつける詠春。どうやらコイツもちゃんと分かっているようだ。だが、納得が出来なかったということだろう。

「なあ、翼。俺は一体どうしたらいい？…答えが出ないんだ。」

「…。好きにすればいい。大戦中の頃もそうしてきただろう。あのときのお前の瞳は輝いていた。だが今はその面影すらない。」

「……。」

「大戦中、いやその前から、お前は何を考え行動してきた？それをもう一度思い出せ。そうすれば答えは出るはずだ。俺から言えるのはそれだけだ。じゃあな。」

俯いたナギを振り返りもせず去っていく。

「もう行くのですか？」

入り口でこちらを伺っていたアルが探るような目で見てくる。

「こんなところにいたら腐ってしまうからな。」

「そうですか、では気をつけてくださいね。」

やはりコイツは食えない奴だ。そう思いながら掘立小屋を後にした。

〕 SIDE ナギ 〕

好きにやれ…か。そういえば何も知らなかった戦争中は随分と好きなことをやっていたっけ。襲ってきた奴を仲間にしたリ、姫さん連れて敵のアジトぶっ潰したり…。

俺は何を考え行動してきた？

思い浮かぶのは仲間との馬鹿騒ぎ、友との語り合い、そして姫さんの顔。何だ、答えはもう出ているじゃないか。

俺は姫さん、アリカを救う！英雄の答えとしては間違っているだろう、だが俺は英雄である前にアリカの騎士、それ以前にアイツは大事な女だ。失いたくねえ！

「アル、詠春、ガトウ、ジャック。俺に力を貸してくれ！」

「ええ、分かりました。」

「無論だ！」

「勿論。」

「ようやく動く気になったか。時間はもうあまりないから、さっさと動こうぜ！」

「ああ。」

待つてろよアリカ。今度は俺が守る！

） SIDE OUT ）

） SIDE OTHER ）

- 処刑執行当日 -

「魔獣蠢くケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに死の谷。」

これから死を迎えるものにその恐怖を知らしめるかのように説明する元老院。

「これよりかの災厄の女王アリカの処刑を始める！！さあ歩け！！」

「触れるな下郎。言われずとも歩く」

アリカ王女は自らの足で死に向かって着実に歩いて行く。その様はこれから死ぬ人とは思えないほど堂々としている。

そして最後の一步というところで空を仰ぎ、目元にうつすらと涙を浮かべ、

飛び降りた…。

直後に響く魔獣の雄叫び、その音が止み処刑の完了を告げる。

「よろしい。以上で処「よおーっし。こんなモンだろ」ぶ、無礼者！何者だ貴様。名を……「黙れやおっさん。録画はここで終わるだ。で、今からここで起こることは『なかった』ことになる。わかるな？」き、貴様は…！」

「ぬんっ！」

男の掛け声と同時に兵士の鎧が弾け飛ぶ。

中から現れたのは

「じゃ、ジャック・ラカンだと！？ではまさか…！」

「そのとおりです。アリカ女王のところにはナギがってます。」

ラカンに続きアル、詠春、ガトウが現れる。

「なあ！紅き翼が全員だと！？…フツだがいくらサウザンドマスタ
ーといえどあの谷底からは生きてはでれまい。そして、お前達もこ
こで死ぬのだ！」

「あゝ？たつたそれだけなのか？」

面倒くさそうに構えるラカン。

「な、何だと！？」

「我々をそれだけの戦力でどうにかできるとでも？」

刀を抜く詠春。

「それに、一人足りないと思いませんか？」

「ま、まさか奴も来ているのか！！？」

最悪の展開に怯える元老院達。その理由は彼の仲間を傷つける輩の
ほとんどが解けぬ死の呪いによつてこの世を去っているからだ。

「なんでえ、結局アイツも来たのかよ。」

「彼もかなり性格が曲がっていますからね。」

「お前にだけは言われたくない言葉だな、アル。」

「おや、そこにいたのですか？気づきませんでしたよ。で、ナギ達は？」

「言ってる。ナギ達ならあそこだ。」

指をさした先には夕日を背景にナギとアリカの二人がキスをしていた。

「やれやれ、お熱いこつたな。冷やかに行くか、翼？」

「脳まで筋肉に侵食されてきたか？ようやく結ばれたんだ、邪魔者は退散だ。」

「これで自分のことがわかっていたら文句ないのですがねえ。」

「ヘラスの姫様は苦労しそうだな。」

「？」

ガトウの言葉に疑問符を浮かべながら皆と一緒に後始末をする翼であつた。

＼ SIDE OUT ｝

アリカ姫を助けてから2週間が過ぎ、ナギとアリカ姫は姫子ちゃんーアスナを連れて観光兼新婚旅行ということで旧世界、日本の京都

にいくことになった。

だがそこは空気を読まない筋肉馬鹿^{ラカン}とか面白そうだとついていく変^ア態^ル、果ては常識派のガトウ、詠春、果てはタカミチまでも巻き込んで京都観光に行こうということになった。

さすがにこれ以上邪魔をしたくない俺は遠慮したのだが、ナギやアスナから一緒に行こうと誘われた。

勿論ナギが引つ叩かれたは言うまでもないが、アスナに『翼にい』と懐かれるとは思ってもみなかった。

ひとしきり観光を堪能し、詠春のこの本家に向かい身内だけで軽く祝いをし、あとは寝るだけとなったのだが…。

スクナの封印が解けたそうだ。

こんなときに復活したスクナに同情すら感じてしまう。現在は酔ったラカン、ナギにボッコボコにされてます。

無事スクナを封印し、最後に京都での隠れ家へと赴き、紅き翼のメンバー^ンだけや、アリカ姫にアスナも入れたり、それぞれの写真を撮った。

そして数々の伝説を作り上げた「紅き翼」はその日をもって解散することになりそれぞれの道を歩むこととなった。

ナギ達と別れてから10年、俺は旧世界、魔法世界の紛争地域を飛

び回っていた。光の剣は危なすぎるので今は刀とリボルバーを武器としたスタイルで戦闘を行っている。

そうしている途中、ある戦場でまたしても原作キャラに出会った。

「今回あなたが私のパートナーか。マナ・アルカナだ、よろしく。」

「神風翼だ、こちらこそよろしく頼む。」

「へえ、あなたが『拳心』か。まさか銃の扱いまで心得ているとはね。そうだ、よければ一つご教授願えないだろうか？私の武器はライフルだが、接近戦用に銃も扱えるようになっておきたいんだ。」

紛争が収まるまでの3ヶ月、俺はマナを鍛え寝食を共に過ごした。その間、何度も仮契約を^{バックティオー}してくれと言われたがずっとはぐらかしてきた。

そして別れのときは来た。

「じゃあな、マナ。いい女になれよ。」

「フフツ、その時は貰ってくれるかい？」

「馬鹿、それはもう少し大人になって好きな奴が出来たときに言ってもんだ。」

「はあつ、これさえなければ最高なんだが…イヤ、待てよ。（ともすれば他の女が寄ってきてくもくつつく事はそうはないだろう。その間に既成事実を作ってしまうば…。）」

マナは何か深い考えをしてるらしくこちらに気づいていない。まあいいか、また数年したら会えるんだし。じゃあな、マナ。

翼がないことに気づいたのは1時間経ってからだ。

「フフフツ、別れの挨拶もなしに行くとは…。今度会ったときは逃がさないからな。」

【続く】

第八話「英雄の答えと世界放浪記」（後書き）

前書きで書きましたが、セリフの前の名前を消して書いてみました。それでですが、ご意見をください。

前のほうが分かりやすい / セリフの前の名前なんか不要

どちらか選んで活動報告にて意見をいただけたらうれしいです。

第九話「英雄の遺児と異世界のモノ」（前書き）

ちわ、です。

感想にて一件、活動報告にて一件、両方ともセリフの前には名前不要ということでこれからはそのようにしていきたいと思います。

修正についてはぼちぼちしていきたいと思っています。

あと、PV30000超えとユニークが6000超えました。
ありがとうございます。

第九話「英雄の遺児と異世界のモノ」

） 1995年某日 ）

イギリスのウェールズに着いた俺は幼いネギを見ていた。

「ピンチになったら現れる」どこからともなく現れる」

わざわざ危ない事をして父を待つ。^{ナギ}実際にこの目で見ると正直バカ？って言いたくなってしまう。

まあ一度も親に会ったことがない子供の気持ちかわからない俺に理解できることではないのだろうか…。

「ムッ!?この気配…魔法の射手・光の一矢!」

上空に不審な魔力を感じ、撃ち落す。落ちてきたのはココではない何処かで昔見たことのある悪魔だった。

「コイツは……………」

ここではないということ俺が元の世界でまだ生きていたとき漫画か何かで見た奴だ。でも何故この世界にいるんだ？

月一でやってくるこの悪魔を見つけては見つからないように撃ち落していく。

そして一年後の雪の夜とうとう事件が起こった、悪魔達の襲撃だ。

村ではあちこちで魔法による爆発が起こっている。多くを救うため翼を広げ上空より魔法を展開する。

「アル・テム・ラ・テム・ルーテック！炎、氷、光、雷の精霊1000柱！凝縮！！魔法の射手・四種の弾丸400発！！」

村に散っている下位悪魔^{レッサーデーモン}を撃ち抜いていく。突然降ってきた魔法の弾丸に戸惑いながら上空を見上げる魔法使い達。

「女、子供、そして怪我を負ったものはすぐに逃げろ、まだ動ける奴はその者達の護衛をしろ！ここは俺が食い止める！！」

悪魔の翼を広げた俺を疑いの目で見てくる。

「皆よ、今はその者を信じるのじゃ。」

魔法使い達を掻き分け現れるは白い長いひげを生やしパイプを咥えた老人。

「スタン老！ですがコイツは村を襲った奴と同じ悪魔、そんなこと信用できるはずがないでしょう！」

「グダグダ言ってる時間はないぞ！自分の大切な者が死んでしまってもいいのか！？」

「そのとおり、さあ皆よ行くのじ」ギヤアアアアツ！！」な、なんじゃ！？」

奥から聞こえる悲鳴に駆け出す。辿り着いて見た物は切り刻まれバラバラになった人達、中には子供もいた。

対峙するは石の大剣を持ったココとは異なる姿をした悪魔。

「ハーツハツハ。弱い、弱すぎるぞ蛆虫共。^{うじむし} このアザル様を倒すことなどできんだ!」

何故奴がこの世界に!? 目の前にいる悪魔はデビデビに出てきた最初の悪魔、アザル。

「お前…あのアザルか? どうしてこの世界にいる!」

「ん? 紫の髪に赤い瞳、そして背中の翼…キサマがこの世界のイレギュラーか…。どうして俺がココにいるかだと? キサマに教えると思っでんのか!」

アザルは飛びながら大剣を叩きつけてくる。左に避けようとするが後ろにはスタン老がいた。すかさず両腕に魔力を流し受け止める。

ドゴオオオオン!!

轟音と共に地面が陥没する。

「グツ! 爺さん、皆を逃がせ! ここにいたら邪魔だ!」

「逃がすと思っでんのか? 来い、木偶共!」

アザルの影から悪魔が湧き出て逃げ惑う人を襲う。

「ヒヤハハハツ。逃げろ、恐怖しろ、それこそが我等の力になるのだ! そして今度こそ憎きソードをこの手で…」

「黙れ！」

ゴッ！！ドガアアアン！！ガラガラガラガラ…

高笑いしているところに力いっぱい殴りつけ壁に叩き付ける。

「キ、キサマ…よくも俺の顔をつヒツ！？」

瓦礫から出てきたところを一気に肉薄し

「もう喋るな。……貴様はやりすぎた、還^かえすだけにしようと思っ
たがヤメだ。せめて最後は懺悔をして…逝け！」

「で、木偶共！俺を守れ！！」

一斉に襲いくる悪魔。

「小賢しい！暗黒魔闘術奥義・地獄破斬撃！！」

拳に圧縮させた魔力で地面を殴りつけ、魔力を爆発させ悪魔達を一掃する。

後に残るは決れた地面と悪魔の死体。奴は何処にいった！？

魔力を探り上空にて発見する。周りを見渡すと地面に突き刺さった石の大剣。

「そら、忘れ物だ…ぞ！！」

「ゲガアアアア！！！」

槍投げの要領で投げられた大剣はアザルの身体を貫く。

「お前は塵一つも残さん！アデアット、光よ！！」

光の刀身を出しさらに魔力を込める。

「ハアアアアツ！飛べ！！」

剣を振り下ろすと光のエネルギーがアザルを襲う。

「こ、こんなところで！待……」

光に吞まれアザルは消滅した。

「終わったのかの？」

「アベアット。……爺さんすまなかつたな、どうやら奴は俺を狙ってきたみたいだ。俺のせいで関係のない村の人達まで巻き添えにしてしまった。」

「お前さんが気に病むことではない。お前さんのおかげで助かったものも少なくない。しかし、あの下位悪魔の数、強力さ……相手は並みの術者ではあるまい。ウチの村の奴等が集まれば……本来は軍隊の一個大隊にも負けはせんハズじゃからな。」

「スタンさん！」

思案していると金色の髪の女性が慌ててやってきた。あれは……

「ネカネちゃん、どうしたんじゃそんなに慌てて？」

「ネギを、ネギを見ませんでしたか！？」

「何じゃと！一緒ではなかったのか！？」

「それが…『こんなことになったのはボクのせいだ…』とか言うてどこかへ…。」

ちっ、マズいな…。俺が関わったせいでイレギュラーが生じたのか！？

「爺さん、アンタ達はそのガキを探せ！」

「お前さんはどうするのじゃ？」

「俺か？どうやらまた団体さんがやってきたみたいでな…片付けてくる。」

あちこちで魔力の反応が増えてくる。どうやら複数の術者が近くに
いるらしいな。

ん？この魔力…ナギの奴か。だが急に現れたよな、しかも魔力には
揺らぎも感じる。まあいい、これでネギの位置も見当がつきそうだ。
魔力を探るとかなり強い力を秘めた反応を感じとる。

「爺さん、南西に向かえ。そちらの方角から大きい魔力を感じる。」

「わかったぞい。ネカネちゃん、ぼーずの所へ急ぐぞ！」

「ええ。…あの、村の人達のことお願いします。」

「任せとけ。さあ悪魔達よ、来て早々で悪いが還える準備は出来ているか？」

悪魔を還えした俺は術師のところへ向かった…が全員村人と同じく石化されていた。

「仕方ない、とりあえずナギに聞けることは聞いておこう。」

消えかかっているナギの魔力の元へと飛んだ。

「よお、久しぶりだなナギ。」

「翼、か。本当に久しぶりだな。」

ナギの存在自体が希薄になってきている。

「聞きたいことがある、答えられるものだけ答えてくれ。襲ってきた奴等に心当たりは？」

「…。」

ある、か。やはり元凶はメガロメセンブリアの元老院の奴等だろう。もう少し徹底的に潰しておくべきだったか？

「次に、今のお前のその状態だ。いったい何があった？」

「…。」

これも答えてはもらえないか。

「なら、最後だ。俺に出来ることはないか？」

「何？だがお前にそんな迷惑は…。」

「11年前のように殴られたいか？俺はまだお前を親友だと思っているんだ。迷惑の10や20くらいかけろってんだ！」

「…お前は10年以上経つても変わらないんだな。敵わんな、全くじゃあ息子の、ネギのことを頼む。死なないようにだけで十分だからサポートしてやってくれ。」

「分かった。道を踏み外しそうになったらお仕置きはするがそれでもいいな？」

「ありがとな。…もう一度お前に会えて、嬉しかったぜ。」

そっぴい残し、ナギの身体が光と共に消える。

馬鹿ナギが…、消える前にんなこというんじゃねえよ。

いつ以来だっただろう、涙が頬を流れていた……………。

【続く】

第九話「英雄の遺児と異世界のモノ」（後書き）

ようやく麻帆良にいける…。

自分の中では2話ほど前から麻帆良突入だと思っていたのでかなり横道にずれてしまったがするのですが、あの人との出会いがほしい、この人とも会っておきたいと書いているうちに話が膨れてしまいました。

呼んでくださった方に感謝をし、さらに意見や感想がいただけたら嬉しいです。

第十話「黒き翼が教師になる!？」

ウェールズが悪魔に襲撃された後、俺は魔法世界を訪れていた。勿論、メガロメセンブリアの元老院共が関わっていたであろう証拠を探すために。

その際、裏のほうにもいろいろと顔が利くラカンに頼った。情報屋を紹介してもらった際に50万D^{ドラクマ}p払えと言われ即決で払ったら真顔になって突っ返されてしまった。お前が払えって言ってきたんだろ
うが…。

「何があつたとは聞かねえが、助けがほしかったらいつでも言え。
…協力してやっからよ。」

ニツと笑って言う。

ラカンは紅き翼の中で一番優しいと俺は思う。いつもは面倒くせえとか言ったり、何かとバトルしたがりがりだが皆への気遣いなどは欠かしたことがない。

「ああ、その時はよろしく頼む。」

緊張の中にも余裕が少し出来た俺は感謝をし情報屋のところへ向かった。

5年と少し経ったがまだ手がかりがほとんど見つからない。そんなある日、ラカンの放った一言が俺を青くさせる。

「お前、あのじゃじゃ馬姫のところには行ったのか？」

「あゝっ！」

ヤバイ、前に会ったのは8年前。そのときもとてつもなく怒られ、かなり泣かれてしまった。その時は三日三晩一緒に過ごすことでようやく機嫌が直ったが何故か「鈍感が…」と言われてしまった。

「まあ急いでいくことをお勧めしておくぜ。」

「あ、ああ。サンキューな。」

脱兎のごとく走り去る。ヘラス国についたのは8時間後だった。

ヘラス国についた俺は早速テオに会うためヘラス国王に取り次いでもらった。そして国王に近況の報告などを済ませると

「ホッホッ、後は若いもん同士楽しむがええわい。テオよ、頑張るのじゃぞ。」

そっぴい残し国王が出て行く。頑張る？何を？と考えていると

「翼」

テオが抱きついてくる。ちょ、胸、胸当たってるっ／＼。そろそろこの抱きつき癖を何とかしないといつかヤバイことになりかねん。

「久しぶりだな、テオ。」

途端に頬を膨らませる。あ、地雷踏んだかも…。

「そうじゃ！妾を8年も放っておきおつて、いったい今まで何をしていたのじゃ！？」

「ここ数年は証拠探し、かな。」

とりあえず簡単にだがテオに知らせとく、勿論少し離れてもらつてナギの息子の村が襲われたこと、その背景には十中八九元老院が絡んでいること、だが証拠が見つからないこと……。俺を狙ったイレギュラーの存在ことは伏せておいた。

「そうじゃったのか。よし、妾達ヘラス国も手伝うぞ。」

「駄目だ。同盟国がそんな迂闊な行動をとれば同盟は解消、果ては戦争にまでなつてしまふんだぞ。その点、俺一人だったら基本的に狙われるのは俺だけだ。」

「それがイヤなのじゃ！妾の知らぬところでお前が死んでしまったら、妾は…妾は…！」

泣きじゃくるテオを抱き寄せる。

「わかったよ、じゃあ俺に新たな力を与えてくれ。」

「それって…／／／」

「ああ、仮契約^{バクティオー}をしてくれ。テオとの繋がりがもてるし、力も手に入る。」

「わ、わわ、わかった。」

「よし、じゃあ血の交か「キスじゃ!」…いや、血の「キスじゃ!」…。」

「キス以外じゃイヤじゃ!」

「わかった、じゃあいくぞ。」

唇と唇が触れ合う。周りは光に包まれ、収まると一枚のカードが手元に現れる。

どちらともなく唇を離す。

「仮契約完了…か。これからよろしく頼むぞ、マスター。」

「う、うむこちらこそ…じゃ。の、のう翼、カードを見せてくれぬか?」

手に持つカードを渡す。

「『意志を貫くもの』…か。翼にピッタリの冠じゃな。アーティファクトはどんなものが出るのじゃ?」

「試してみるか、アデアット。」

身につけられるは左右のバングル、ベルト、胸の装飾に飾られる4

つの宝玉。

「こ、こいつはまさか…デモン・ブラッド魔血玉…なのか!？」

「キレイじゃのゝ。翼、この宝玉は何なのじゃ？」

「タリスマンの一種で魔血玉という。だがタリスマンというにはありえないほどの力を有しているな。呪文を唱えることにより使用者の魔力を引き上げる代物だ。」

「おお、それは凄いのう。」

「しかもコイツはどうやら常時装備型のアーティファクトのようだ。その証拠にアーティファクトを出したというのにカードも消えていない。」

「お主はアーティファクトまでもがチートなのじゃのう。」

テオよ、お前までがそれを言うのか…。

「あまりチートとは言わないでくれ、ヘコむから…。」

「あう、スマナかったのじゃ。」

強く言ったわけではないがシュンとしてしまうテオ。

「まあそこまで深くは気にしないでくれ。で、テオ。俺はこれからまた旧世界に行こうと思っているのだが、いいだろうか？」

「ナギ・スプリングフィールドとの約束じゃな？条件が一つある。」

手紙を書き、一月に一回は必ず妾のところへ来ること！」

「止めないのか？」

てつきり止められると思っていたのだが…。

「翼が止めない事などそのカードを見れば一目瞭然じゃ。そういう翼だからこそ妾は好きになったのじゃ……ひ、人としての！／＼／」

「そ、そうか？」

あゝビックリした。テオが俺のことを好きなのかと勘違いするところだったよ。

「じゃあ、明日にでも発つよ。今日はゆっくりさせてもらっつ。」

「うむ、またいろいろな話を聞かせてくれるのか？」

「ああ。楽しみにしといてくれよ。」

その日は夜遅くまでテオにいろいろな話を聞かせてあげた。

ヘラス国を出て二週間後、俺は京都の詠春を訪れていた。麻帆良への口利きを頼むためだ。

「久しぶりですね、翼。今までどちらに？」

「こちらの世界や魔法世界を行ったり来たりとしていたな。今回は

お前に頼みがあつてな。」

「実はこちらにも三件ほど頼みがありましてね。」

「ではまずそちらの頼みとやらを聞こう。」

「では、一件目の頼みですが、埼玉に麻帆良学園というのがあるのは知っていますよね？」

「ああ、10数年前に一度だけだが訪れたことがある、あの馬鹿でかい樹がある学園のことだろう？」

「ええそうです。そのトップである学園長、私の養父にあたる人物なのですが学園に来て欲しいと言ってきたのです。」

なんと、学園長ぬりひょうんから直接来て欲しいといわれるとは、渡りに船とはこのことだな。

「なるほど、目的は？」

おそらく一番の目的は人手不足解消なのだろうが、よくもまあ俺のような不確定な存在を待っていたものだ。

「詳しくはなんとも…。そしてもう一件は私からなのですが、娘の木乃香の護衛をしていただけないでしょうか？」

「娘が居たのか。で、護衛というのは何故だ？」

「娘には巨大な魔力が眠ってしましてね…。ですが私は娘には平和に過ごして欲しいのです。」

「なるほど、長としては最低だな。…だが、親としては良い親だ。」

「…それでもありません。私は親としても最低といえるでしょう…。」

俺の言葉を否定し独白する。

「私は、娘の為と言って娘の親友、桜咲刹那というのですが、その子に護衛を任せています。彼女の娘を護りたいという想いを利用しているんです。その結果、彼女は娘や周りに対しても心を閉ざしがちになっています。三件目の頼みが彼女についてです。翼さん、彼女の心を救ってやってください。」

「どうやらそれが一番の頼みのようだな。」

「分かりますか？数年間の修行とこの2年の護衛任務、彼女にはどう償ってよいのか…。」

「二人が以前のような関係に戻れば即解決しそうだが、話の限りだと今は無理そうだな。」

「ええ、ですがあなたになら、いえあなたにしか癒すことが出来ない心の傷が彼女にはあります。」

「分かった、その頼みすべて引き受けよう。」

「ありがとうございます。あなたなら安心して任せられます。で、翼のほうの頼みというのは？」

「何、お前の一つ目の頼みで解消されたようだ。」

「では麻帆良学園へ行きたかったと？」

「ああ。6年前のイギリス、ウェールズの事件は知っているな？」

「ええ、ナギの故郷で彼の息子であるネギ君がいた村。そこで起きた悪魔の襲撃。」

「ああ。そのネギが近々麻帆良で修行の一環として教師になると聞いてな、ナギとの約束どおりサポートをするつもりでコネが欲しかったのだよ。」

「ナギ！？彼は生きていますか！！？」

驚きを隠せない詠春。そうか、確か原作では詠春はナギが生きていたということは知らなかったのだな。まあこれくらいは教えておいても良いだろう。

「ああ、だがあまりいい状態ではなさそうだったな。それにアイツの居場所も掴めなかったし…。」

「そうですか…。でもいいことを聞きました、ありがとうございます。麻帆良の件、こちらからも承りました。ではこちらの書状を持って養父にお渡しください。」

どうやら最初から用意していたらしい書状を俺に渡す。

「了解した。ああそうだ、詠春。さっき言っていた桜咲刹那って子には俺のことはまだ話さないでいてくれないか？」

「ですが、そんなことをしたら…あの子のことです。必ずあなたを探ってくるはずですよ?」

「そんなこと、あつちの魔法教師達に比べたら可愛らしいものさ。それに、実力を見るには敵対心を持つていたほうが計りやすいしな。」

「なるほど、そういうことですか。わかりました。では、木乃香と刹那君のことよろしくお願いします。」

「ああ、ではまたな。」

） SIDE 学園長 ）

婿殿から良いニュースが来たわい。拳神殿、翼君が麻帆良学園にきてくれるらしい。前々から確保しておきたかった人材じゃ。婿殿に感謝せねばの。

じゃが問題もある。

まず一つ目はこちらの魔法教師達じゃが…翼君を排除しようとする者達は何人が居そうじゃが…、これはタカミチ君と相談かの。

そして二つ目じゃが、住む場所はどうするか? まあそれも後で考えるかの。いざとなったら女子寮の寮監も兼任してもらえばいいじよろ。

最後に、これが一番の問題じゃが…。孫娘、木乃香との見合いじゃが、婿殿は許可せんじやろっし…内緒で進めてしまうかの。

フォウフォッフォッ、これから面白くなりそうじゃわい。

＼ SIDE OUT 〵

さてさて、やってきました麻帆良学園。

周りの人達は俺とすれ違うと驚いた顔をし、顔を赤くして去っていくが…。

不審者とも思われているのだろうか？と頭を悩ませていたら

「翼さん！」

タカミチがやってきた。

「タカミチか、久しぶりだな。フム、大分修練を積んだじゃないか。」

「そうですか？」

「ああ、今ならラカンの1/3の力となら互角の戦いが出来るはずだ。」

「さ、1/3って…。それってまだまだじゃないですか。翼さんと僕が戦った場合はどうなりますか？」

「状況次第だが…… 1 / 2 ｝ 1 / 5 ってところだろうな。まあそう悲観するな、少なくとも大戦中のガトウの力は超えていると思う。」

「師匠を、ですか？それが本当なら嬉しいですね。おっと、あまり学園長を待たせるわけにはいきかないですね。行きましょうか？」

「ああ。」

コンコン

「タカミチ君か？」

「はい、失礼します。」

中にいたのは10数年前とまったく同じ学園長がいた。

「爺さん、やっぱアンタ妖怪か？」

「久方ぶりに会っての最初の一言がそれかい！」

学園長が吼える。

「学園長、抑えて抑えて。翼さんも気をつけてください。学園長は人として見られることが少ないのを気にしていらっしゃるんですから。」

「タカミチ君、聞こえとるぞい。…まあよい。翼君、久方ぶりじゃの。」

「ああ、爺さんは本当に変わってないようで。」

「…。お主に担当してもらうつクラスじゃが、2・Aの副担任をしてもらうつ。教科は数学じゃったの?」

俺の言い回しにピクンと眉を動かしたが話を続けた。

「ああそれでいい。夜の仕事はどうなっている?」

「話が早くて助かるわい。夜は学園の警備をしてもらいたい。できるだけ魔法教師とは離しておくからそれでいいかの?」

「十分だ。ただし、俺に向かってきた奴等はそれ相応の覚悟をしてもらうつからそのつもりでいてくれ。」

「あ、あまり無茶なことはせんでくれよ。」

「何、ちよつとお仕置きするくらいだ、なあタカミチ?」

ピクン!

「翼さん…それは言わないでください…。」

「タ、タカミチ君?」

ガクガクブルブル

「まあタカミチのことは気にするな。で、住む場所はどこになる？」

「それじゃが…ある女生徒達と同部屋というのは「爺？」ヒイツ！？」

右手に魔力を込めて突き出す。

「何を考えてる爺？教師が生徒と、しかも女生徒と同部屋とは…狂っているのか？」

「じゃが、こうせぬとワシの命が！」

「どういうことだ？訳を話せ。納得できたら半殺しで勘弁しておく。」

「ヒョー！？わ、わかったから拳を下げてくださいんか。実は以前うっかりとある女生徒にキミが来ることがバレってしまったの。逆らったらワシ撃ち抜かれてしまうわい。」

「撃ち抜く？そんなことをしそうな知り合いは…一人しかいないな。」

「マナ・アルカナ…か？」

「知り合いじゃったのか？今は龍宮真名と名乗っているぞい。」

「わかった、マナは俺が説得しておく。だから別な場所を用意しておけ。」

「わ、わかったぞい。では翼君、これからよろしく頼むぞい。」

「ああ、「こちらこそよろしく頼む、学園長。」

【続く】

第十話「黒き翼が教師になる!？」（後書き）

ドタバタしましたが、ようやく麻帆良編に入れました。

今回テオドラとのパクティオーをしたので下にカードの内容を書いておきます。

主：テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア
従者：神風翼

【中央部】

名前表記：CAMINAGI TUBASA
称号：意志を貫くもの

【下部】

徳性：s p e s（希望）

方位：c e n t r u m（中央）

【左上角・右下角】

数字：15

【右上角】

色調：黒

【左下角】

星辰性：天狼星

【アーティファクト】
デモン・ブラッッド
魔血玉

第十一話「初授業　～午前の部～」(前書き)

PV50000超え、ユニーク8000超えになりました。
読んでくださった方、ありがとうございます。

第十一話「初授業　～午前の部～」

「さて、ここが2 - Aです。あとこれがクラス名簿になります。」

タカミチから名簿を受け取りザツと中を見る。想像通り原作メンバーがちゃんと揃っている。

「よし、覚えた。行くか、タカミチ。」

「覚えたって… あつ翼さん！」

ドアを開けると黒板消しが落ちてきた。左手でキャッチし、足元の縄を踏み越え黒板消しを黒板へ投げる。

次に落ちてくるのは水入りバケツ。バケツを蹴り上げて回転させ水がこぼれないように右手で底を掴み、空いている手で吸盤の矢を叩き落とす。

そして教壇へと辿り着く、バケツは足元へ置いて。

「手荒い歓迎ありがとう、俺の名前は神風翼。担当は数学でこのクラスの副担任になる。よろしくな。」

静寂が場を支配する。

あれ？何か変なこと言ったわけ？と考えていると

「キヤアアアッカコいいいいっ！！」

思わず耳を押さえる。あれ？何か聞き逃したような？？

叫びながら次々と質問を浴びせてくる一同。一度にそんなに言われ
ても答えられないっての。

チラッと周りを見ると軽く手を振るマナ、赤い顔をして驚いた顔で
こちらを見ているエヴァンジェリン、他に数名程若干殺気を出し『
勝負してみたい』的な雰囲気を纏う者達もいる。勘弁してほしいけ
ど。

「ほら君達、落ち着くんだ。あまりうるさくすると他のクラスに迷
惑だぞ。」

タカミチが入ってきて注意する。

「高畑先生、一時間目は先生の授業ですし、質問タイムにしてもい
いですか？」

聞いてくるのは麻帆良のパパラッチこと、報道部の朝倉和美。

「まあいいよ。気になっちゃあ授業どころじゃないだろうしね。」

「さっすが高畑先生。じゃあ皆！質問はこの朝倉和美に任せて！」

「じゃあまずは、名前は？」

「神風翼。神様の”神”に夕風の”風”、で翼と書く。」

「身長と体重、あと年は？」

「187cmの71kgで17歳。」

本当は75年+αの分だけ生きているんだけど。

『おおおっ!』

軽く歓声上がる。

「出身地は?」

「生まれは日本だ。」

「生まれはってことは他の国にも行ったことが?」

「ああ、いろいろな国を転々としていたな。」

「その髪の毛は地毛?目の色も?」

「かなり目立つがどちらも生まれつきだ。多分父親の血が色濃く出たんだろうな。」

「へえ、じゃあ趣味と特技は?」

「趣味は料理に鍛錬。特技は拳法に射撃ってところかな。」

「女性経験は?または付き合っている女性はいいますか?」

「…ノーコメントで。それと付き合っている女性は今の所いないな。」

『おおおおおつつ！！』

先ほどよりも大きい歓声上がる。

「では最後に、このクラスでの気になるのは誰ですか？三人程挙げて下さい。」

殺気が送られてくる。マナにエヴァンジェリン、二人ともそんなに睨んでくるなよ。

「フウ…。では龍宮にエヴァンジェリン、で拳法家として古、かな。」

『おおおおおつつ！！！！』

騒ぐ2 - Aと俺の答えに顔を真っ赤に染める2名、睨んでおいてその反応は無いだろ？そして戦^やる気を見せる1名、戦わないからな？

「質問はここまでだな。じゃあタカミ…高畑先生、俺は戻るから授業を始めてくれ。ではまた次の時間にな。」

そう言って教室を後にした。

そして二時間目

「さあ授業を開始しよう。では教科書54ページを開いて…」

カッカッと黒板に文字を書く音が響く。

「この問題を…今日は8日だから神楽坂、やってみる。」

「うええ。」

「気持ちのいい返事ありがとう。とりあえずそんなに難しい問題じゃないはずだ。」

「ハアイ…。」

- 1分経過 -

- 3分経過 -

- 5分経過 -

「あゝ、神楽坂？」

「…わかりません…。」

「明日菜さん、お分かりにならないのでしたらサッサと戻っていただけませんか？まったく、保健体育と美術以外は、ダメダメのおバ

カさんなんですから。」

ヒュン！コツツ！！

「イタツ！」

手に持つチョークを投げつける。

「雪広、人のコンプレックスを人前で言うのは感心せんぞ。他の者達もあまり笑ってやるな。」

「さて神楽坂、どこからが分からない？」

＼ SIDE アスナ ｝

今日新任教師がやってきた。どこか懐かしい感じのする青年だ。なんか高畑先生よりも渋みがあるのは何故だろう？

授業が開始され、問題が出される。ゲツ今日8日じゃない。

新任の先生の傾向どおり、案の定アタシが当てられ黒板の前まで行き、停止する。最初からサッパリ分からない…。

「明日菜さん、お分かりにならないのでしたらサッサと戻っていただけませんか？まったく、保健体育と美術以外は、ダメダメのおバカさんなんですから。」

またいいんちょにバカにされる。アタシだって好きでバカやってん

じゃないわよ！

ヒュン！コツツ！！

「イタツ！」

振り返るといいんちよが頭を抑えている。神風先生の手元にあった
チョコレートがないことからおそらく投げたんだろう。

「雪広、人のコンプレックスを人前で言うのは感心せんぞ。他の者
達もあまり笑ってやるな。」

ヤバっ、ちょっと…ていうかかなり嬉しい。こんな風に言ってくれ
る先生なんて高畑先生くらいしかいなかった。

「さて神楽坂、どこからが分からない？」

神風先生が近づいて聞いてくる。

「え？えっと、最初のこの部分から…。」

「なるほど、ここはな…こうすると…だな。」

丁寧に一つ一つを教えてくれる。あ、そうか！

「ああっ！で、ここにそれを入れて右のと比べると…。答えは5…
ですか？」

「正解だ。やれば出来るじゃないか、えらいぞ。」

ポンポンと頭を軽く撫でられ、席へと戻るように言われた。

なんだろう、本当に懐かしい感じ。問題が解けたことの嬉しさよりもそのわからない懐かしさでいっぱいだった。

お兄ちゃんがいたらこんな感じなのかな？

周囲が少しザワザワするがそれも気にならないことだった。

） SIDE OUT ）

「じゃあ次の問題だが……。」

キンコーンカーンコーン。こうして初授業は過ぎていった。

「つと、今日はここまでだな。今日の日直は…宮崎か。昼休みまでに宿題を用意するから運んでおいてくれ。明日はその範囲で10点満点の小テストをやるからな。満点を取ったものには褒美を用意しておく。だが5点未満だったら今日の宿題の倍は出すからな。では宮崎。」

「あつ、ハイ！きりーつ、きおつけえ、れえい！」

襟元に指を二本置き上を指す仕草をし、教室を出て廊下のタカミチに声をかける。

「なんだ、見ていたのか？」

「ええ。初授業、よかったじゃないですか。」

「そうか？なあタカミチ。神楽坂ってアスナだよな？良い子に育ったじゃないか。」

「そう思いますか？」

タカミチは嬉しそうに笑う。

「ただ、記憶を奪ったことだけは賛成できなかったがな。」

「そ、それは……。」

タカミチの顔が翳る。

「わかってる、ガトウからの頼みだったのだろう？お前自身、苦渋の決断をしたのも容易に想像できる。出来ればアスナ自身に決めてほしかったことだが……。」

「申し訳ありません……。」

「あまり気に病むな。これは俺の我俣でしかない。それに後悔ばかりしていると更に老けるぞ。」

俺の冗談に苦笑するタカミチ。

「それはあまり言わないでくださいよ、気にしているんですから。」

「ハハハッ。俺みたいに前向きに生きていれば若くいられるさ。」

「あなたは普通の人とは違うじゃないですか！…でも、少し気が楽になりました。ありがとうございます、翼さん。」

「おう。」

さて、それぞれ用の宿題でも作るか。

昼休みになり俺は屋上へ来ていた。忘れていなければ来るであろう人を待つて。

ガチャ

果たして彼女は現れた。

「よお、マナ。久しぶ『パン！』…危ないじゃないか。」

ゴム弾を避ける。

「フン、あのとき別れの挨拶すらしなかったんだ。それくらい当然だろ？」

さらに撃ってくるマナ。仕方ない、あのとき挨拶できなかったのは事実だ。罰がこれなら受けよう。

ドン！ドン！ドン！

全て受けると意識を手放してしまった。至近距離でのコロラド撃ちは俺も流石にキツイよ…。

意識が戻って最初に感じたのは頭の柔らかな感触とチョコレートのような甘い香り。

目を開くと柔らかな微笑を浮かべてこちらを見下ろすマナと目が合った。いわゆる膝枕状態だ。

「マナ、良い顔で笑うようになったな。」

「そうかい？ならそれは翼のおかげだな。それにしても、翼。何故避けなかったんだ？心配したじゃないか。」

「そう思うなら至近距離からのコロラド撃ちはやめてくれよ。で、避けなかった理由はお前が言った通り、どんな理由があるにしても、別れの挨拶をしなかった報いを受けただけさ。」

「フツ、翼は何年経っても翼なんだな。」

半眼になり苦笑しながら言う。

「それって褒めてるのか？貶してるのか？」

「勿論褒めているさ。変わっていなくて嬉しいよ。」

「そうか？マナは変わったな。さっきも言ったけど良い顔で笑うようになったし…うん、綺麗になった。」

途端にマナの顔が赤くなる。

「そ、そういうことをストレートに言うところも変わってないんだ

ね…。」

「何がだ？」

「（鈍いところも相変わらず、か。）まあいいか。で、私を呼び出して何の用だったんだ？」

マナの言葉に用件を思い出した。いい加減恥ずかしくなってきたので膝枕状態から脱し向き直る。

「マナ、学園長に同じ部屋にするよう言ったな？」

「…知らないね。」

思いつ切り目を逸らしながら言うセリフじゃないぞ…。

「バレバレだったの…。」

「そうか、バレていたか。だがこれは譲らないぞ！」

「『譲らないぞ！』じゃないだろ！俺のことを考えろ！」

「ではワシが妥協案を出してやるぞい。」

「学園長！いつからここに！？」

「なに、ついさっきじゃよ。認識障害の札が使われておったから何事かと思いい見にきたんじゃ。で、翼君や。女生徒と同部屋でなければかまわんのじゃの？」

「ああ…っ!？」

しまった!っと思ったときにはもう遅かった。

「よかるう。では女子寮に一部屋余りがあるからそこを使うといい。これでいいかの、龍宮君？」

「ご苦労様、学園長。しばらく依頼料は30%減で構わないよ。」

は、謀ったな!シ。ア!!じゃなかった、爺!!

プチン!

「!じゃあ学園長、私は授業があるからこれで。」

「フオッフオッフオッフ。勉強のほうもがんばるのじゃぞ。」

ゴゴゴゴゴゴゴ!…!!

「ん?なんじゃ…イツ…!!!？」

「爺さん、ちょっとOHANASHIしようか？」

「ヒョー!…!!」

放課後、見るも無残な格好で世界樹に吊るされている学園長が発見されるがそれはまた後のお話。

「ヤバッ！宮崎待たせてるんじゃない！」

職員室で途方にくれる宮崎であった。

【続く】

第十一話「初授業　～午前の部～」
（後書き）

感想にダメ出し、お待ちしております。

第十二話「初授業　く午後の部く」（前書き）

ユニークが10000を超えました！ありがとうございます。

第十二話「初授業　～午後の部～」

「すまなかつたな、宮崎。呼び出した本人が不在だなんて。」

「い、いえー、そ、そんなに待っていませんから…。」

む、やっぱり男が苦手ってことだけあってこの微妙な距離感。

ちょっと寂しい気もするが、彼女については主人公に任せよう。下手にフラグを叩き折るわけにもいかないしな。

「せ、先生？」

おっと、どうやら少し深く考え込んでいたようだな。

「ああ、すまない。これが今日の宿題だ。上が近衛、超、那波、葉加瀬、宮崎、雪広の分。下が綾瀬、神楽坂、古、佐々木、長瀬の分。そして真ん中が他の子達の分だ。」

「な、何で三つに分かれているんですか？」

「一番の理由は皆のレベルを上げるため、かな」

「レベル、ですか？」

「ほら、勉強することが好きな子がいれば嫌いだったり苦手な子もいるわけだろ？そんな子達に考えることの楽しさっていうのを知ってほしくてな。だからそれぞれ用の宿題を用意したって訳だ。」

「え？それぞれ用って…クラス全員のものを1個1個作ったんですか？」

「ああ、だから面倒だろうけど、全部出席順に配ってくれよな。俺の勘だが、明日の小テストでは良い結果が出ると思うからな、じゃあ頼んだぞ。」

ポンポン

「へうつ！？」

あ、しまった。テオやアスナのノリでつい…。

「ノノノし、しし、失礼します！」

プリントを抱え物凄い勢いで職員室から出て行く宮崎。

「マズったなあ。こりゃあ嫌われただろうな。」

） SIDE のどか ）

今日は新しい先生がきました。背が高く紫の髪を結わえた赤い瞳の人。

お昼休み、職員室に宿題を取りに着たけど先生はいなくてどうしようかと悩んでいたら先生が慌てて帰ってきた。

「スマン、宮崎！」

先生に宿題を渡された。先生が言うには皆のレベルを上げるためらしいけど、本当だったら凄いな。先生は勉強が苦手な子にも分かりやすく教えてくれるし。

ポンポン

気が付いたら頭を撫でられていた。そのときの先生の優しい目…はわわわっ！今思い出しても恥ずかしいです。

「／／し、しし、失礼します！」

咄嗟のことに顔が真っ赤になってしまい思わず逃げてしまいました。どうしよう、変な子って思われてないかな…。

…それにしても、さっきの優しい目に雰囲気…何だか頼れるお兄ちゃんって感じだったな。

「翼、お兄ちゃん…。何か良いかも。」

「どうしたです、のどか？こんなところでボーっとして。」

「／／ゆ、ゆえゆえ！？な、なんでもないよ。」

「？そうですか。次の授業まで時間も無いですし行くですよ。」

「う、うん。」

今の聞かれてなかったかな？あゝ恥ずかしいよ…。

） SIDE OUT ）

放課後、生徒の数が減ってきた頃に学校を出た。

「見られているな。一人…いや二人、か。」

片方は気の使い手、もう片方は魔力を感じた。どちらもクラスで感じたものだ。

「人の少ないところを選んだんだ。出てきたらどうだ？桜咲、それに絡繰。」

「気づいていましたか。」

「まさか感知されるとは思いませんでした。」

物陰から影が二つスツと姿を見せる。

身長程の長さの竹刀袋を担ぎ黒い髪をサイドテールにした少女と、耳にアンテナをつけ緑の髪を伸ばした少女だ。

「で、二人とも何のようだ？」

まあ刹那はおそらく木乃香のことだろうが黙っておくか。茶々丸は…何でだ？

「では、桜咲さんのほうからどうぞ。」

「すまぬ、…神風翼。あなたは何者で何が目的だ!？」

夕風を竹刀袋から出し構える刹那。

「何者か、か。お前もコチラ側の人間なら聞いたことがあるだろうが『赤眼の死呪』だ。」

「なっ!？」

刹那は夕風を抜き四方に呪符を放つ。それらは木に刺さり、辺りの空間が希薄になる。

「なるほど、認識阻害の呪符か。驚いているようで以外に冷静だな。…来るなら本気でこい!でないとお前の大事な者を失う羽目になるぞ。」

「なっ!?!貴様、お嬢様に手出しはさせんぞ!だあああっ!！」

俺の言葉に激昂し夕風を振り下ろす刹那。右手に魔力を軽く圧縮させ気で強化された夕風を掴み取る。

「気の練り方が甘い、本気でこいと言ったはずだ。それに自分よりも強者である相手に正面から攻めようなど愚の骨頂だ。」

「くっ!まだまだあ!!!！」

刹那はさらに夕風を振るう。

上下左右、更に背後、あらゆる角度から斬撃が襲い掛かる。既に峰は返されその一撃一撃は全て必殺のものとなっている。

その全てを防ぎ一つ一つに指摘をし、刹那の瞳を見抜く。その瞳には焦り、恐れ、更には危うさが見えた。

「桜咲、何をそんなに焦る必要がある？お前が他の子より強かろうが、まだ子供だ。周りを頼れ！そしてゆつくりと強くなっていけばいい。身体も、そして心もな。」

気驚きの表情を浮かべる刹那、だがその顔にはうつすらとだが笑みを浮かべていた。

その後数分間、刹那への助言は続いた。

「ハアツハアツ。ま、参りました…。」

「降参なんかしていいのか？俺がお前の大事な者を奪うかもしれんだぞ？」

座り込む刹那は言う。

「あなたには出来ませんよ。手合わせの途中に見たあなたの瞳は厳しいながらも暖かい優しさを感じました。」

刹那の瞳からは先ほど感じた危うさが消えていた。彼女はこれからまた強くなるだろう。

「あまり買いかぶるなよ。…さて、絡繰。君の用件だが、少し待ってくれ。」

「分かりました、では案内します。」

「助かる。桜咲、ちょっと我慢してくれ。」

ヒョイと抱き上げる。所謂お姫様抱っこというやつだ。

「ちょっ！降ろしてください！！」

腕の中で暴れる刹那。

「暴れるなって、落ちるぞ！」

「だったら降ろしてください！」

「ダメだ。足、怪我してるだろ。それにさっきも言っただろ？周りを頼れって。」

「それとこれとは話が…いえ、もういいです。／＼／」

おや？以外に素直だな。まあいいか、運びやすいし。

「そうか、じゃあ行くぞ。」

） SIDE 刹那 ）

神風翼、そう名乗った新任教師に私は身震いした。おそらくあれで
もかなり抑えているのだろうが、とてつもない力、そして邪気を感じ

じる。

奴の情報、目的を知るため気配を消し尾行をすることにした。幸いお嬢様は準備のために教室にいるから安心だ。

「人の少ないところを選んだんだ。出てきたらどうだ？桜咲、それに絡繰。」

！？

気配を消していたというのにバレていたのか？仕方ない、直接聞いて返答しだいでは…。

問いただした答えに私は驚く。『赤眼の死呪』、死を操る赤い瞳の悪魔のような男…。噂でしか聞いたこと無かったがまさか目の前の男が！？だとしたらコイツは危険すぎる。

夕風を鞘から抜き、懷から呪符を取り出し四方の木に投げつける。

「なるほど、認識阻害の呪符か。驚いているようで以外に冷静だな。…来るなら本気でこい！でないとお前の大事な者を失う羽目になるぞ。」

「なっ！？貴様、お嬢様に手出しはさせんぞ！だあああっ！！」

奴の言葉に激昂し襲い掛かるが片手で受け止められてしまう。バカなっ！気で強化した夕風を受け止めるだ！？

「気の練り方が甘い、本気でこいと言ったはずだ。それに自分よりも強者である相手に正面から攻めようなど愚の骨頂だ。」

「くっ！まだまだあ！！！」

気の練り、そして自分の未熟さを指摘された私は峰を返し本気で攻め立てる。

だが奴はその全てを。時には受け、時には捌き、そして時にはいなし、いきそのどれにも同様の指摘を入れる。

もっと、もっと私に力を！でないとお嬢様を…このちゃんを護れへん！！

もう護れんのは嫌や！夕風を振り下ろすとき奴と目が合い、その瞬間彼を理解した。

その瞳には最初に感じた威圧感はなく、厳しいが穏やかで暖かく優しさを感じた。

彼は私の心を読み、さらに優しい言葉をかけてくる。敵わないな、この人には…。

時間になると10数分の手合わせだったが、警備を数時間やったかのような疲労が身体に溜まっていた。

途中で痛めた足の痛みも段々と大きくなり。座りながら話を聞いていると突然抱き上げられた。

「ちよっ！降ろしてください！！」

あまりの恥ずかしさに思わず暴れてしまう。

「暴れるなって、落ちるぞ！」

「だったら降ろしてください！」

「ダメだ。足、怪我してるだろ。それにさっきも言っただろ？周りを頼れって。」

「それとこれとは話が…いえ、もういいです。／＼／」

あんな真剣な目で見られたら何も言えないですよ。

「そうか、じゃあ行くぞ。」

腕の中で感じる。優しく強く、そして暖かい人。そのとき胸の奥でトクンと音が響いた。

） SIDE OUT ）

「これでよし、爺には言っておくから、しばらくは夜の警備は休むように。あと、近衛の護衛も無理はするなよ。」

「神風先生、何故それを！？」

「おっと、余り暴れるなど言ってるだろ。ちゃんと話してやるから。」

「は、はいすみません…。」

まったく、木乃香のこととなるとすぐ動揺するんだから…。

「先ほどの桜咲の質問の答えになるが、俺がこの学園に来た目的は友との約束を果たすためだ。詠春ともう一人の友の、な。」

「長とお知り合いだったのですか！？そのような方に刃を向けるなんて…申し訳ありませんでした！」

「気にするな…ていうより俺が詠春に伝えないよう頼んだからこうなってしまったんだ。怪我までさせてごめんな、桜咲。」

「神風先生のほうこそ気にしないでください。これは私の未熟さが招いたものですから。」

「いや、そんなわけないって。俺が余計なことをしなければ桜咲の怪我はなかったかもしれないんだ。とにかく、俺の気がすまない。何か詫びをしたいところなんだが…今は絡繰も待たせているから、桜咲も何か考えておいてくれ。」

「ですが…ああもう分かりましたから、あまり真剣な目で見ないでください／＼／。」

赤い顔をしてズカズカと保健室から出る刹那。だからあまり無理するな…。

案の定廊下で足を押さえる刹那を発見し、問答無用でもう一度抱きかかえた。

教室に着くまで刹那の顔から朱が消えることはなかった。

【続く】

第十二話「初授業　　午後部」　（後書き）

折角出したというのに茶々丸の出番が全然なかったです。

ご意見ご感想があれば書いてくれたら励みになります。
勿論誤字脱字の報告もお待ち（？）しています。

第十三話「歓迎会、少女の想い」（前書き）

仕事の影響で更新が一月以上も遅れてしまいました。

呼んでくれている方、申し訳ないです。

さて今回はサーッと進めよう、と思ってたのですが話が全然進んでいません。

一日だけで何話分使う気だ！という突っ込みもあると思いますが、続きを読んでやってください。

第十三話「歓迎会、少女の想い」

2 - Aの教室からはクラスの皆とタカミチの気配を感じる。…はて、なぜこんな時間まで残っているんだろう？

「なあ桜咲、絡操。何で皆はこんな時間までいるんだ？」

「戸を開ければ分かりますよ、神風先生。」

「皆さんもお待ちですし、行きましょう。」

「それもそうだな。おい、入るぞー。」

一応一声掛けてから戸を開く。

パンパパンパパン！！！！

『ようこそ、2 - Aへ！！！』

「えっ？」

大音量のクラッカーの音と、それをも上回る2 - Aの皆の掛け声。

呆然とする俺にマナがサインをくれる。

【翼の歓迎会だよ。】

ああ、そういうことね。促されるままに教室の中央に行きコップを受け取る。

「じゃあ神風先生、乾杯の音頭ヨロシクね。」

朝倉がジュースを注いでくる。参ったな…前の人生でもそういうのは苦手だったんだが…。

「あゝ、俺のためにこんな会を開いてくれてその…嬉しく思う。楽しませてもらうから、これからもよろしく頼むな…乾杯。」

『乾杯！！』

乾杯の音頭が終わって少し経ったところで、端っこのほうでこちらを睨んでいるエヴァの所へ向かった。

「久しぶりだな、エヴァンジェリン。まさか学生をやっているとは、驚いたよ。」

勿論知っていたが、ここはこう言っておかないと不自然だしな…。あれ、エヴァの殺気が強くなっているけど…。

「貴様、三年の約束を十五年も放っておいてそんなことを言うのか！？」

何ですと？

「何のことだ？」

「惚けるつもりか！サウザンドマスターの奴がかけた呪いを、奴は

三年経つたら翼が解きに来ると!？」

「何だよそれ!？あのナギ^{バカ}…そんなこと一度も聞いた覚えがないつての。でも悪かったな、知らなかったとはいえそんな長い間待たせていたなんて。」

右手でエヴァの頭を撫でる。

「ノノガキ扱いするな!あつ、手を放すな馬鹿者っ!」

撫でていいのか嫌なんかどっちなんだよ…。

「闇の福音も翼さんの前では形無しだね。」

ジューズ片手にタカミチがやってくる。

「ハハハ、翼さんの驚く顔やあんなに困った顔は初めて見たよ。それにこんなエヴァも見れるなんてね。それだけでもこの歓迎会に来てよかったよ。」

「おい。」

「…タカミチ、この後の顔合わせのとき覚悟しておけよ?」

「えっ!？知ってたんですか?」

「もう少し回りの奴等に殺気や魔力を抑えるよう言っておけ。思わず攻撃しそうになったぞ。」

そつ、学園に来てから今の時間までいろいろな場所で敵意を向けて

くる者達がいた。一般生徒の前で襲いかかろうとした奴には殺気を込めて睨んだら腰を抜かしてたが…。

「あんな奴等が『立派な魔法使い』^{マギステル・マギ}だとはな。自らの正義も持たず、覚悟もない。こう言っては問題があるだろうがまるで元老院の犬だな。」

「翼さん、それはさすがに…。」

「おい！」

「わかっているさ、言い過ぎだってことも。…だがお前も経験したはずだ、あの戦争を。もう二度と、あんな戦争は起こしてはいけないうってことを。」

「そうですね…。」

「ダアアッ！いつまで私を無視して頭を撫で続けるつもりだ！」

「グアッ！」

顎にエヴァの右アッパーが炸裂する。的確に脳を揺らさないでくれ…。

「呪いの事については後で詳しく見てやるから少しは落ち着け、皆見ているぞ。」

「むっ、わかった。ではタカミチをボコボコにしたら一緒に来い。私は一足先に行ってるぞ。行くぞ、茶々丸。」

「はい、マスター。では高畑先生、神風様、後ほど。」

先に出ていった主に続き茶々丸も一礼して出ていく。

「翼さんはエヴァの呪いが解けるんですか？」

「それはじっくり見てみないと分からないが…呪いを解くのかとは聞いてこないんだな。」

「僕はエヴァと同級生をやったこともあったしね。彼女なりの優しさというのも理解できているつもりさ。だけど翼さん…。」

「学園長の爺には言っておくし、他の魔法教師にはエヴァンジェリオンを襲わないよう確約させるさ。…多少脅しを入れるがな。」

「程々においてくださいよ？それじゃあ翼さん、僕達もそろそろ行こうか。」

「そうだな、お前等も来るんだろ？桜咲、マナ。なら一緒に行くか？」

「ああ、翼の力を見せてもらおうとするよ。高畑先生、翼は連れていきますから先に向かっていてください。」

「そ、そうかい？それじゃあ任せるよ。じゃあ翼さん、また後で。」

足早に教室から立ち去るタカミチ。…何をそんなに慌てていたのやら？

「タカミチの奴どうしたんだ？あんなに慌てて…。」

「さあ？ 大方向か用事でも思い出したんじゃないかい？」

「そうか、タカミチも忙しいんだな。じゃあ案内は頼んだぞマナ、桜咲行くぞ。」

「…あの、神風先生は龍宮と親しげですが、どういった関係なのですか？」

あれ…刹那？ さっきの手合わせよりも殺気がキツいんですけど…。

「パートナーだよ。」

マナは俺の腕にしな垂れ掛かりながらトンデモ発言をしてくれた！

「なっ！！？」

「フフフ。」

「それじゃあ言葉足らずでお前が勘違いされるだろうが…。桜咲、マナとは以前とある地域で数ヶ月ほどコンビを組んだことがあってな、そういうった意味でのパートナーだったってことさ。後はマナの短銃の指導をしてやったってことかな。」

「チツ…。」

「そ、そうだったのですか…。ということは龍宮、あのいつも念入りに磨いていて警備のときにも使わなかった銃は神風先生からもらったものだったのか？」

「せ、刹那!？」

マナにやった銃?もしかして指導も終わりに近い頃、マナと実戦形式で模擬戦をやって初めて俺に傷をつけた褒美に欲しいって言われてあげたアレか?

「お前まだあんな物持っていたのか。あの頃にも言ったがあの銃はお前には向いてないぞ?」

「そんなことは分かっているさ。だが、あれは私の少ない思い出の中の大切な一つだ。大事にだってするさ。」

「そうか、そいつは嬉しいな。よし、今度久しぶりにどれだけ力をつけたか見てやるよ。」

「また何か褒美でも用意しておいてくれるかい?」

「ああ、いいぞ。と言っても今は大したものはないが…。」

「ああそれについては問題ないよ。私が欲しいのは買える物じゃないから。」

「?」

買える物でなかったら何を褒美として欲しいんだ?まあいいか、負ければ問題ないことだし。

それに負けたとしてもマナの成長が見れるわけだから褒美の一つや二つあげてもいいだろう。

「あの…神風先生…。」

「ん？どうした桜咲。足が痛むのか？」

「いえそうではなくて、先ほどのお詫びの件ですが…私を弟子にしてください！」

「断る。…ってそんな泣きそうな顔しないでくれ。何も嫌だからって訳じゃないんだ。剣にしろ銃にしろ一応は使いこなすことは出来るが、俺のメインの戦闘スタイルは拳だ。だから剣を主な戦闘スタイルとするお前には剣に関しては教えられることは少ないと思う、これが理由だ。」

「そうですか…無理を言って「だが手合わせならしてやるぞ。」えっ？」

伏し目がちだった顔が呆けたものになる。

「手合わせや試合という形でなら時間が空いてるときなら付き合うぞ。俺の鍛錬にもなるしな。」

「あ…ありがとうございます！そ、それですね…私のことはその…せ、刹那と呼んでください／＼／」

「わかった刹那、俺のことはマナみたいに翼と呼んでくれて構わない。これからよろしくな。」

右手を差し出し刹那もそれに答えてくれる。

「はい！こちらこそよろしくお願いします…っ、翼さん。」

重なる手と手。新たな絆が生まれるのであった。

＼ SIDE エヴァ ｝

学園長の爺からまた新しい魔法教師を雇ったからよろしく頼むと言われたが正直面倒くさい。真祖にして最強の魔法使いであるこの私が『立派な魔法使い』を目指しているような馬鹿共を見るわけがないだろう。

『立派な魔法使い』か…。そういえば昔そう呼ばれていたが悪を成すことも躊躇わない奴がいたな。…約束を無視するバカが。

あの忌々しいサウンドマスターから呪いを受けて十五年、最初は三年で奴に会えるということから数年の休養も悪くはないかと思ひ、屈辱的ではあったが我慢した。時折感じる『立派な魔法使い』を名乗る馬鹿教師共の視線が鬱陶しかったが悪くない時間が過ぎたと思う。

だが約束の三年が過ぎてからは怒りが込み上げてきた。

二年前に完成した新しい従者・絡操茶々丸の情報によると奴はここ数年間は魔法世界で活動しているらしい。

いい気なものだな、私をこんな所に縛り付けておいて自分は飛び回っているなどは…。

あゝ、考えれば考えるほど苛立たしい。これは新任の名法教師とや

らをいびりたおしてしまおうか？

むっ？どうやらおいでなすったか……。タカミチより先に教室に入るか、ではトラップに引つかかる様を楽しませてもらうとするか。

扉が開き、次々とトラップをクリアしていく。教壇にあがったソイツは背格好がかなり変わっていたが紛れもなく奴だった。

思わぬ再会に見惚……。違う違う！／／／

「茶々丸…何を見ているのだ？」

「いえ、別に…。それよりもいいのですかマスター？ようやく会えたのでしょうか？」

「なに、時間はたっぷりあるのだ。放課後になればコイツ等は歓迎会だ何だとやるだろうしその時にでも今までの怨みつらみを言うてやるさ。」

表面上は繕えたが、あんなことを言われては恥ずかしくて行けんわ。

そして放課後、奴は教室にやってきた。

早速十五年も放っておいたことを問いただしたが、どうやら知らなかったようだ。

サウザンドマスターの奴め…生きていたのなら氷漬けにしてやりたいわ…。だが、まあいい。今はこの手の温もりを感じていよう。

） SIDE OUT ）

） SIDE タカミチ ）

授業の終わりにクラスの皆から、放課後に翼さんの歓迎会をやるってことが決まり準備の手伝いをしに来た。

ガラララッ

「やあ、なにか手伝えることはあるかい？」

「あ、高畑先生。丁度良いところに来てくださいました。龍宮と一緒に高い所の飾り付けをやっていただけませんか？」

「分かったよ、雪広君。」

ええっと、これが。机の上に置かれている飾りを持ち龍宮君のところへ向かう。

「手伝うよ、龍宮君。」

「ああ、助かるよ高畑先生。」

それからしばらくは黙々と飾り付けをしていた。そして終わりに近づいた頃、

「夜の翼の顔見せのときの対戦相手は高畑先生かい？」

「多分そうなるだろうね。翼さんを敵視している魔法先生達も多い

し、彼等では…まあ僕もだけど、翼さんの足元にも及ばないだろうしね。」

翼さんはもつと強くなっていると言ってくれたが、僕自身はそれでもさらに力の差が開いたと思っている。

「へえ、翼ってそんなに強かったんだ。」

「そういえば、龍宮君は翼さんのこと知ってたんだね。翼さんが教えてくれたよ。」

「そう…高畑先生、翼からどんなことを聞いたかは知らないけど、あまり不用意な発言をすると…」

カチャッ

「学園長と同じ目にあってもらうよ?」

「アハハッ…以後気をつけるよ。」

戦場でもなかなか感じるこの出来ない殺気に背筋がゾクリとした。…ていうか学園長、あなたは彼女に何をしたんですか…。

龍宮君の新たな一面を知った僕は彼女に翼さんを敵視している人達を襲わないよう頼み込んだ。

） SIDE OUT ）

〕 SIDE マナ 〕

飾り付けが終わり準備が出来てしばらく経つと廊下に複数の気配を感じた。

さて、刹那は翼に一太刀でも入れられたかな？

朝倉に呼ばれ中央に行く翼、それをじつと見つめる刹那。…これはちよつと聞き出さなくてはならんな。

教室の隅で近衛を見守っている刹那、だがその視線はチラチラと翼の方向に向けられている。

「どうしたんだ、刹那。そんなに彼のことが気になるかい？」

「た、龍宮！？な、何を馬鹿なことを言っているんだ。」

その反応バレバレだよ、刹那…。

「馬鹿なこと…ねえ、ならいいんだが…。それよりも、彼の力は分かったかい？」

「軽くあしらわれてしまったから詳しくは分かんが、あの人と戦えそうなのは高畑先生くらいだと思う。」

当の本人から足元にも及ばないと言われたのは黙っておこう、その方が楽しめそうだしね。

そんなことより刹那の翼に対する気持ちは本物なのだろうな。本人が自覚していない分だけエヴァンジェリンよりはマシだろうが。

…いつそのこと襲ってしまつか？いや、だが…。

「…宮、龍宮！」

「…いきなり大声を出さないでくれ、刹那。」

「それでも何度も呼びかけていたのだがな。それより私達もそろそろ行こう。」

もうそんな時間なのか、翼のこととなるとどうも深く考え込んでしまふな。つとめは高畑先生。余計な真似はしないでもらおうか？
「…行くぞ、刹那。」

「あ、ああ…。」

フツ、忠告を無視するとなくなるか高畑先生にも教えなくちゃね。

＼ SIDE OUT ｝

＼ SIDE 刹那 ｝

隣の龍宮がぶつぶつと何かを考え込んでいる。以前にも何度かこの光景を見たことがあったが、こうなった龍宮はなかなか戻ってはいない。

一度考え中の龍宮に声をかけたところ魔法教師はその瞬間に撃ち抜かれていた。ゴム弾であつたためそれほど大事には至らなかったが

それ以来、龍宮が考え中のときは誰も口を挟まないことになった。

だが、今日はあの人の顔見せという名の模擬戦がある。

仕方ない。時間もないことだし声をかけるしかないな。

「龍宮。…龍宮、龍宮！」

「……いきなり大声を出さないでくれ、刹那。」

ホッ。今日はまだ考えが浅かったか多少の殺気を浴びせるだけか。

「これでも何度も呼びかけていたのだから。それより私達もそろそろ行こう。」

「…行くぞ、刹那。」

「あ、ああ…。」

龍宮の視線の先にはあの人がいた。

彼は私達に気づくと一緒に行こうと言ってくれた。

龍宮がいるが、頼みたいこともあったし丁度よかった。だが彼の言葉が気になった。

龍宮のことを真名と、それに龍宮のほうも彼を翼と。

疑問と共に動悸が早くなる。知らず語気が強くなる。

「…あの、神風先生は龍宮と親しげですが、どういった関係なのですか？」

「パートナーだよ。」

龍宮の言葉と行動に愕然とした。だが、すかさず彼が訂正を入れて安堵した。…何なのだろう、この心の動揺は？

つとそれよりも龍宮に便乗して私も頼まねば。

『弟子にしてください。』、即答で断られたときはショックだった。でも泣きそうな顔なんかしてません…少ししか…。

落ち込む私に彼は、手合わせや試合ならしてくれると言ってくれた…あの全てを包んでくれるような暖かい笑みを浮かべて。

瞬間心はねる。そのとき自分の心の揺れの原因が分かってしまった、同時に龍宮の心も。

彼女もまた彼に惹かれている、ということ。

ルームメイトで仕事も一緒にこなしてきたが、私も譲る気はないぞ。

） SIDE OUT ）

【続く】

第十三話「歓迎会、少女の想い」(後書き)

ようやく投稿できました。

話が全然進んでいないのですが…。

次回は

- ・ 模擬戦
- ・ 解呪
- ・ テスト
- ・ +
α

という感じで進めていこうと思います。

では次の更新をお待ちください。

第十四話「深夜の会合」(前書き)

更新がかなり遅れました。

約二ヶ月ぶりの更新です。

毎日数行ずつ書いていては修正し、とにかく難産でした。

では続きをどうぞ。

第十四話「深夜の会合」

世界樹の前には沢山の魔法教師、生徒が集まっていた。

「遅れて悪かったな、爺さん。」

「なに、気にすることはないぞい。さて皆よ、彼が今日から学園の警備に加わってもらおう神風翼君じゃ。」

一歩前に出て皆の視線を浴びる。敵意6割、友好的な視線4割といったところか。思ったよりも敵意を向けてくる割合が少ないな。

「今紹介に与った神風翼だ。詳しい説明は…いらないだろう?…ということでだ爺さん、俺の相手はタカミチでいいのだろう?。」

「うむ、タカミチ君もよいかの?。」

「準備は出来ています。いつでもいいですよ。」

闘志剥き出しにして構えをとるタカミチ。

「タカミチ、本気で来い。お前の力を見てみたい。」

「…一応これは翼さんの力を見るためなんだけど。まあ僕自身もどこまであなた達に近づけたか知りたいし。学園長、そろそろ…。」

「よかるう、では…始めいっ!。」

月明かりの下、いくつもの衝撃音が響いては消えていく。

「居合い拳の速度、威力はまあまあだな。だが単調すぎるし、俺は本気で来いと言ったはずだ。」

居合い拳を居合い拳で打ち落とす。見えない攻撃は乾いた音だけを残す。

「はははっ。翼さん相手に居こ合い拳で様子見をしようってこと自体が間違っているかな。それじゃあ今度こそ本気で行かせてもらっよ。」

タカミチはポケットから手を出し両手をダラリと下げる。その両手からは異なる二種の力が集束している。

「左手に魔力、右手に気……合成、咸卦法！！」

その二つを合わせた途端、力の奔流が爆風と共に外に流れる。

二種の力を融合して身の内外に纏い強大な力が得られる技法。

力の融合と簡単に言うが気と魔力は相反する力。

下手に融合させようとすればエネルギーの爆発により最悪、死に至る可能性すらある高難度の技法。

故に究極アルテマ・アートの技法と呼ばれるものの一つだ。

「ようやく出したか。今度こそお前の本気見せてもらっよ！」

地を蹴り両腕に魔力を集束しタカミチに襲い掛かる。

タカミチはバックステップと共に手加減抜きの居合い拳、豪殺居合い拳を放つ。

それを左の掌より放った魔力砲で相殺し、返す刀として右の掌から魔力砲を放った。

それを見たタカミチも右手から魔力砲を放つ。

ズバアアアツ!!!!

「むっ、今を防いだか。ちゃんと魔力操作の訓練も欠かさずにやっていたようだな。」

「当たり前ですよ、あなたに教わったコレが僕にとっての唯一の魔法と呼べるものですから。今度は僕のほうから…いきますよ!」

タカミチは両手から魔力砲を放ち、更に時折混ぜる居合い拳で俺の足を止めさせた。

妙だな…俺相手に敢えて 中・遠距離戦で挑んでくるとは…。

誘いか？

いいだろう、その誘い乗ってやろう。お前のこれまでの成果、存分に見せてみる！

魔力砲を両腕で弾きながら接敵する。そして魔力砲を放つ際に生じる僅かな魔力の溜め時間の隙を突き瞬動で一気に近づく。

「もらった！」

「来てくれると思ってたよ。これが僕の成果だ！ハアアアツツ！
！！」

咸卦で練られた力がタカミチの右手に凝縮されその性質を変化させる。

コイツ、こんなことまで！？

「暗黒魔闘術奥義・魔人烈光殺！！」

ズガアアアツ！！

強大なエネルギーが衝撃と突風を巻き起こす。

「…僕にとつての最高の一撃だったんだけどね…。」

バチバチ！バチ、バチ！！

その強大なエネルギーがこめられた拳を

「片手で防がれると自信がなくなっちゃうよ。」

右手一つで押さえ込んでいた。

「十分に自信を持ってい、それほどの一撃だったぞ。」

実際、かなりの魔力を集中させて止めたのだからな。

「それにしてもいつの間に暗黒魔闘術を使えるようになったんだ？」

「咸卦法をエヴァの元で修行する際に、翼さんの話を条件にいろいろと教えてもらってね。」

「…なるほど、マギア・エレベア闇の魔法の知識を使ったのか。」

「翼さん？」

「いや、何でもない。それより俺の話を条件についてどういう意味だ？」

意味が分からないといった俺の言葉にタカミチは苦笑する。

「それはまあ…エヴァにもいろいろあるんだよ。」

「そうなのか？…まあいいか。じゃあ今の一撃のお返しに久しぶりに見せてやる、本物の暗黒魔闘術を！」

体全体の魔力を圧縮し両の拳に纏わせる。

「今のお前なら分かるだろう、タカミチ？俺とお前との違いというやつが。」

「ええ、翼さんのに比べたら僕のは咸卦の強大な力を振り回しているだけですな。」

「そう、それでは真の暗黒魔闘術は使いこなすことは出来ない。だから直接身体で感じとるんだ！」

両足に纏った魔力を爆発させ地を蹴り、こめた魔力と共に右手を叩き付ける。

「暗黒魔闘術奥義・地獄破斬撃！！」

ズガガアアアン！！！！！！

「ぐうあああつ！」

地面が抉れ、衝撃と共にタカミチが吹き飛ぶ。

「それまでじゃ！この勝負、翼君の勝ちじゃ。」

学園長の声が響き渡る。

「フウ、タカミチの奴かなり力をつけてきたな。」

纏っていた魔力を解除し、タカミチが吹っ飛んだ方へと歩いていき瓦礫をどけ手を差し出す。

「ほら、立てるか？」

「ありがとう。衝撃で吹き飛ばされたただだからね、問題ないよ。」
起こしたタカミチを連れて皆の元へと戻る。

「これで彼の實力の程も多少は分かったじゃろう。では今日の所は解散とするかのう。」

「解散の前に、一つ報告しておく。エヴァンジェリンの呪いを解いてやるのだが、文句はないよな？」

「フム………3年のはずがここまで延びたんじゃ、よかろう。」

「なっ！？闇の福音の呪いを解くだど！！？」

食いかかってくるは色黒の男性教師と数人の白いローブを着込んだ教師。はて…色黒のは記憶の片隅にあるが…誰だっけ？

「アンタは？」

「ガンドルフィーニだ。何故危険な存在である闇の福音を解き放とうとする！」

ああ、他の魔法教師よりも一際正義正義とうるさい奴か。まあ嫌いではないがキャラ的に正直鬱陶しい。

「それが約束だからだ。危険な存在？彼女がお前達に何かをしたというのか？それに正義だ悪だというが、そんなものは立場や見方によって逆の意味を持つものだ。そんな曖昧なものだけで判断するな。」

」

先程タカミチに放った一撃近くの魔力を纏い殺気を浴びせる。

「そしてこれは通告しておくぞ、特に後ろの連中！俺の今の言葉を聞いて今日の俺にしたような闇討ちを彼女にしようと思えるなよ。今度はその命、ないものと思え。」

その言葉にガンドルフィーニを除く魔法教師達は腰を抜かした。

「…通告はしたからな。」

踵を返しエヴァの元へ向かう。

「話は済んだか。なら私の家に行くぞ。」

そつぽを向いて足早に歩いていく。顔が赤いが、怒っているのか？

「待てよ、エヴァンジェリン。何を怒っているんだ？」

「別に怒ってなど…」

「照れているんです。」

「へっ？」

横を歩いていた茶々丸がありえないことを言ってきた。

「な、なな、何を言うか、このボケロボー！！！」

キリキリキリキリキリキリ

「ああそんなに巻かないでくださ、あああつ。」

ポケットから取り出したゼンマイを茶々丸の頭に取り付け思い切り巻いていくエヴァ。どうでもいいが照れているとは？何に？

「ハアハアハアハア。」

ようやく終わったか。

「…見ていて飽きないが早く行くぞ。女の子があまり遅くまで起きているのは感心できんからな。」

「阿呆か、キサマ。私を人間の小娘と一緒にするな。」

「別に一緒にしているつもりもないが、それでもお前が女の子であるのは間違いないだろう？」

「キサマは…／＼私は先に行くからな！！」

ものすごい勢いで走り去るエヴァ。あとには俺と茶々丸が残された。

「じゃあ行こうか、絡操。」

「はい、神風様。」

「なあ絡操、その『神風様』ってのは止めてくれないか？堅苦しくてなんかムズムズするんだ。」

「そうですか…では翼様。」

「それじゃあまり変わらないな。出来れば『さん』付けで、最悪『先生』にしてくれ。出来れば俺のほうも茶々丸と呼びたいしな。」

「了解しました、では翼先生と呼びますね。」

「ああ、それで構わない。じゃあ、改めてこれからよろしくな茶々丸。」

「はい、翼先生。」

「キサマ等、早く来んかあ！」

先に言ったエヴァが戻ってくる。そんなことなら先に行くなよ…。

「さあ、この忌々しい呪いを解いてもらおうか。」

家に着いて早々エヴァは言う。茶々丸はお茶を用意してくれている、やっぱりこの子いい子だ。

「その前に頼みがある。対価としてナギに関する情報と、俺の血と、何でもというわけにはいかんが何か一つお前の願いを聞こう。」

この言葉にエヴァの口がニヤリとあがる。

「ほう、この私に頼みごととは。…願いを聞くと聞いたな、いいだろう。その言葉に二言はないな？」

「…何でもは無理だぞ？」

「そんなに難しいことを頼もうという訳じゃあないさ。それとだな、サウザンドマスターの情報は別にいらん。先ずはその頼みとやらを聞こうか？」

エヴァの笑みが少し怖いがそんなに変な願いを頼むわけじゃないだろうな…？ていうか、ナギの情報が要らないだと？

「どうした、早く言え。」

「あ、ああ。ナギには息子がいてな、ネギ・スプリングフィールドというんだが、その子が3学期に来るということは知っているだろう？。」

「勿論だ。お前が来なかったらそいつの血でこの呪いを解くつもりでいたからな。尤も、その必要もなくなりそうだが。」

「必要がなくなったのに申し訳ないが、その子と戦って欲しい。」

眉がピクリと動く。これだけで気づくか、やはり頭の回転も速いな。

「ほう、キサマこの私をそいつの踏み台とさせる気か？」

「なかなか察しがいいが、それは爺さんの考えだ。俺は逆にコテンパンにして欲しいと思っている。」

「なるほど、今の言葉で分かるが一応お前の考えを聞こうか。」

「…その子が目指そうとしているのは英雄と言われているナギと同じ道だ。だがその道に進むには強さと覚悟が必要だ。そのどちらも鍛えるのには格上との実戦が一番だ。ただの格上との実戦だけならタカミチや他の魔法教師でもいいが、アイツ等はなんだかんだで甘い上に英雄の息子ということではしかその子を見ないだろう。下手をしたら、中途半端な自信をつけてしまう恐れもある。」

「だから、私に頼むということか。いいだろう、なんなら私自ら鍛えてやってもいいぞ？」

「それは本人次第だが、その時がくれば頼めるか。じゃあ今から呪いを解くぞ。不快に思つかもしれんが、少し我慢してくれ……瞬視。」

瞳が赤い輝きを放ちエヴァを見抜く。

「おい、キサマその眼は!？」

「俺の持つ魔眼で瞬視といってな、この眼に入る物事の正しい姿を見極める直観力が働くんだ。」

浮かぶ直観に頭が痛くなる。

「ありえないだろ、あの馬鹿ナギ……。こんな滅茶苦茶な術をかけて……。」

知ってはいたが実際に目の当たりにすることで馬鹿さ加減に嫌気が差す。

呪いはまるで癌細胞のようにエヴァの身体の至る所に纏わりついて

いた。これでは解説しようとしても一気に解説しなければ再生される意味がなくなる。実際調べてみたが登校地獄インフェルスマス・スコラスティクスはこんな呪いではないはずだが…。

「はあああ…OK、理解した。やはりあいつは馬鹿だ。エヴァンジェリン、今から俺の魔力をお前に流し、出鱈目になっている魔力の流れを正す。かなり不快だろうがしばらく我慢してくれ。」

頭に手を置き自身の魔力を流し込む。

「んっ／＼／」

魔力を流し込まれて悶えるエヴァ。そういえば他人からの魔力供給で感じてしまುತ್ತていう設定があったようななかったような…。

つと、今は集中集中。

「エヴァンジェリン、少し強めにして一気に呪いを破壊する。」

「あ、ああ。や、やってくれ。」

エヴァの返事をもらい流す魔力を一気に増やす。程なくしてエヴァの身体に纏わりついてた呪いは音を立てて崩れ去った。

自分の身体をペタペタと触り、状態を確かめるエヴァ。そして全身に満ちていく魔力を確認するとその魔力を解放した。

「ちょ、お前こんな所で!？」

「アハハハッ 見ろ、この魔力を。これが私の力だ!」

.....

呪いから解放されて嬉しかったんだよね？自分の力が思い切り出せて嬉しかったんだよね？

「…………でもさ、部屋の中ではやめてくれよ。今ので家が滅茶苦茶だぞ。」

「エヴァンジェリン、場所を考えてくれよ。」

「自重してください、マスター。」

「ちょ、茶々丸お前まで！？ぐぐぐつ、すまなかった。嬉しくてつ

い力が入ってしまったみたいだ。」

「やけに素直に謝るな、エヴァンジェリン。」

「エヴァだ、これからはそう呼べ。」

「いいのか？」

「呪いを解いてもらったしな。断じて茶々丸のことを名前で呼んでいるから気に食わないとかそんな理由じゃないぞ！」

「ケケケツ、相変ワラズナ御主人ダゼ。」

「んだとコラッ！」

「そういう君も変わっていないな。その物騒なものは仕舞ってくれないか、チャチャゼロ。」

「固イコト言ウナヨ、久シブリニ娑婆デ動ケルンダ。ソレニ以前ノ借りモ返シテエシナ。」

「また今度にでもちゃんと相手してやるから今は片付けを手伝ってくれ。」

「オ、テツキリ断ルカト思ツタゼ。ナラ仕方ネエケド手伝ツテヤルトスルカ。」

一度はちゃんと戦ってみたかったし、でもこれ以上時間をかけては明日に影響がでてくるから正直早く終わらせなかった。

「それじゃあエヴァに茶々丸にチャチャゼロは人形や本の片付けをしてくれ。窓には近づかず、重いものは俺に任せとけ。」

「翼先生、マスターと姉さんはそれでいいですが私は手伝えます。」

「男がいるときは女の子はそんなことなくていいんだ。それに怪我でもしたらどうするんだ？」

「女の子と言っても私はガイノイドです。ですので傷つくことはあっても怪我はしません。」

「ガイノイドだからなんだ？それに傷つくことがあるなら尚更駄目だ。」

俺の言葉にエヴァが続けて言う。

「茶々丸、コイツはこういう奴だ。それでも気がすまないのならお礼でも言っておけ。コイツはそれだけで満足する。」

一度しか会っていない俺のことをそこまで理解しているんだ。それにさっきのナギの情報が要らないってのも気になるな…。

まあ時間が経てばいろいろとハッキリするだろう。

「では翼先生、申し訳ありませんがお願いいたします。それと…お気遣いいただきありがとうございます。」

「おう。それと茶々丸、もっと周りを頼ってもいいんだぞ？」

言いながら茶々丸の頭を撫でる。茶々丸はキョトンとした顔でその

手を見上げる。

「…頭を撫でられたのは初めてです……………温かい。」

そんなこんなで30分ほどで片付けは終わった。

「そういえば血と願いはどうするんだ？」

「血については魔力が戻ったから必要ないと思ったが、サウザンドマスターの奴め…どこまで私を縛り付ければ気が済むんだ!!」

そう、先程解放された魔力だが今ではかなりの力が流出している状況にある。魔力流出の原因を探ってみたところ、学園結界によりエヴァの魔力がマナへと変換されていたのであった。しかもこの結界にもナギが関わっていたのだからエヴァは更に不機嫌になる。

「さすがに学園結界まで破壊することは危ういからな。」

あの狸爺さんのことだ。この結界があつたから呪いを解くのを了承したのかもな。

「エヴァ、学園結界のほうはまた考えておくから今日はその辺にしておけ。」

「むっ、そうか？ならすまないがまた力を貸してくれ。今日は呪いを解いてもらったからそれで十分だ。願いについてはもう少し落착着いてから言うから今日は帰っていいぞ。」

「わかった。じゃあエヴァ、茶々丸また明日な。チャチャゼロも、またな。」

「おやすみなさい、翼さん」

「マタナ、旦那。」

あれ？茶々丸からの呼び方が変わったような……？まあいいか。さて、気乗りしないが寮に行くとするか……ハア……。

女子寮の前で待っていたのはマナだった。

「随分と遅かったじゃないか、翼。」

「まさかずっと待っていたわけじゃないだろうな？」

マナの手に触れる。その手は多少ではあるが冷えていた。

「まったく…部屋に來い。何か暖かいものと晩飯は用意してやる。どうせ食べてないんだろ？」

「じゃあお邪魔しようかな。（フフツ作戦通りだね！…でも何か忘れている気がするな。）」

女子寮の中をマナと共に進んでいく。爺さんが予め寮長を兼任するということ伝えていたため不審者扱いされずにすんでいるが、生徒とすれ違う度にマナがその生徒を睨んでいくため正直少し怖い。

おっ、あれに見えるは刹那じゃないか。おっと、こっちに気づいたか。

「翼さん、と龍宮も一緒だったか。二人は何を…というか龍宮、用事はどうした？」

「ああ、少し前に終わって翼が戻ってないって聞いたから外で待ってたんだ。（食事当番であることを忘れていたな。どうする………抱きこんで誤魔化すか。）それより刹那、もうご飯は食べたかい？」

「いや、これから食べに行こうと思っていたところだ。」

「なら俺の部屋に來い。今からマナの分も含めて作ろうと思っていたところだ。一人増えた所で問題ないからな。」

「じゃあ、お邪魔させてもらいます。」

部屋に着いたらすぐにホットミルクを用意しマナに飲ませ、食事の用意に取り掛かった。

それから30分後出来た食事を皆で食べた。おいしいと言ってきれいに食べてくれるのはやはり嬉しいもんだ。

「さて、明日の仕込みをするか。」

食事の片づけが終わり、台所で準備を始める。

「翼、私の分は羊羹にしてくれよ。」

「なら、満点を取れるように勉強しておけよ。」

そのやり取りで気づいた刹那も言う。

「あの、私の分も龍宮と同じにしてください。」

「大丈夫なのかい、刹那？普段は私よりも順位が低いのに。」

「ムツ…翼さん、今日のところはこれで。ご飯おいしかったです…出来ればまた…失礼します！」

マナに言われて勉強するのだろう。あまり遅くまではやって欲しくないが…。

「刹那らしいというか…じゃあ翼、私も帰るとするよ。刹那を呼ぶときは私も呼んでくれよ？」

「ああ、お前もそうだが刹那にもあまり遅くまでするなよって伝えておいてくれ。じゃあ、おやすみ。」

「おやすみ、翼。」

マナは少し嬉しそうな顔をしてドアを閉める。さて、問題も作らないといけないことだしサツサと作るか。

「さあ昨日言ったとおり、今日はまず小テストを行う。時間は…そうだな、15分もあればいいだろう。問題は配り終わったか？じゃあ、始め。」

- 15分経過 -

「よし、終わりだ。後ろから集めてきてくれ。今から採点するから少し待っていてくれ。…あまり騒がしくするなよ?」

簡単なテストとはいえそこはやはりテスト効果。あちらこちらで『どうだった?』とか『〵問目がちよつと…』とかの声が聞こえてくる。

採点をして少し驚きを感じた。まさか彼女がこの点を取れるとは…。

「よし、採点終わり。」

『早っ!?!?』

「静かに、じゃあまずは5点未満だが……なしだ。皆、ちゃんと昨日の宿題をこなしてきたんだな。」

まずはホツとしているな。だけど満点の発表をすれば間違いなく驚くだろうな。

「そして、満点は…超、雪広、近衛、葉加瀬、宮崎、那波、龍宮、桜咲、そして神楽坂。」

「えっ？」

アスナ自身が驚く。数瞬後、

『ええええええっ!!?』

クラスの殆どが叫ぶ。

「静かにしような？」

「だって明日菜だよ!?!学年でも最下位に近いバカレンジャーの中のバカレツd『コツツ!!』『イタツ!!』」

言い終わる前に朝倉に向かってチョークを投げる。

「朝倉、昨日言ったことを忘れたのか?…次は少し痛いぞ?」

「そやえ。それに昨日のアスナの分の宿題のプリント見せてもろたけど全部解けとったよ。」

「それに、だ。きちんと細く計算してあるし、検算の後もある。満点取れなかった者の殆どが計算ミスや、そもそも計算を書いていなかったりしている。これはかなり勿体無いから、きちんと計算をするように。」

注意もしたし、これでいいだろう。

「じゃあ満点をとった9人にはご褒美としてこれをやる、といったもそんなに大した物じゃないんだけどな。」

マナと刹那を除いた七人には小さな袋を渡し、二人には小さな箱を渡す。

「神風先生、なんで龍宮さんと桜咲さんのは違うんですか？」

「昨日二人に晩飯作ったときにバレてな、和菓子がいいというから変えたんだ。」

「ってことはこれ全部先生の手作りなん？」

「ってそんなことより『新任教師いきなり教え子に手を出す!?!』って良いネ、朝倉?」ごめんなさい。」

少し怒気を込めてチョークを振りかぶる。それだけで朝倉は引込んだ。

「ったく、あまりそういう噂を立てるなよ。相手の子が迷惑するだろうが。」

そのとき数名を除いたクラスの皆が思った。『駄目だ、この人超鈍

感だ…。
」

「？（何を呆れているんだ？）」

自分のことについてはかなり鈍感な翼であった。

その後、思ったよりも多めに余ったお菓子は職員室で配られたという。

【続く】

第十四話「深夜の会合」(後書き)

あとがきですがまずは一言。

更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

時間も確かになかったのですがそれよりも案がなかなか出てこなくて時間がかかってしまいました。

次回からは出来るだけ早く投稿したいと思いますが正直亀更新になるかもしれません。

そんな小説であります、できれば続きをお待ちください。

第十四話その1「主人公設定（原作開始時）」（前書き）

戦争を経て月日を重ねた主人公のステータス更新です。

第十四話その1「主人公設定（原作開始時）」

名前：神凧翼 かみなぎ つばさ

性別：男

年齢：17歳（肉体年齢）

人種：半魔（人と悪魔のハーフ）

身長／体重：187cm／71kg

容姿：デビデビのシバ・ガールント

髪色 紫、腰までの長さ、首元で結っている

悪魔の翼をもつ

二つ名：殲滅円舞、拳神、アウトブレイクフルツ赤眼の死呪、せきがん しじゅ1000の射手 サウザンド・シューター

能力（Fate風）

属性：混沌・善

筋力：A（A++）

魔力：EX

耐久：B+（A+）

俊敏：C+（B+）

幸運：D

宝具：I

（ ）は気で強化したときの能力

特技：家事全般、早撃ち、魔力操作、気

使用技：暗黒魔闘術、裏・暗黒魔闘術、魔力砲、デス・クリムゾン、

Live Aliveの技（功夫編、西部編、中世編、幕末編）

【保有スキル】

瞬視の魔眼：魔眼ランクB

外から、一瞬、眼に飛び込んでくるものを受容するなら、物事の本当の姿が見きわめられる直観力が働く眼。

その直観力による判断は、百万の知識、理屈よりも正しいものである。

使用している間は瞳の色が赤水晶に光る。

魔力操作A+

魔力放出、圧縮、変換などの魔力運用を効率よく行うための能力

瞬視の魔眼使用時、相手の放った魔法をも圧縮して使用することができる。

心眼（真）B（A+）

- 功夫編 心山拳師範より -

修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。

ランクが高くなれば自らの最適な動きと相手の隙を看破できるようになる

（○）は瞬視の魔眼使用時のランク。

早撃ちB

- 西部編 サンダウン・キッドより -

純粹な射撃能力。

クイックドローはお手の物。

千里眼C（B）

純粹な視力の良さ。

遠距離や動体視力の向上。

（○）は気で強化したときの能力

気 B

- 現代編 高原日勝より -
- 身体能力を1ランクアップさせる。
また、相手の強さを肌で感じ取れる。

精神力 A

単純な心の強さ、想像力。

ランクが上がるほど詳細なイメージを練ることができ、屈しづらくなる。

隠密 A +

- 幕末編 おぼろ丸より -
- 気配遮断能力。魔力が感知されない限り発見されなくなる。
また、魔力操作 B によりよほどの使い手でない限り魔力が感知されない。

ラーニング

- 現代編 高原日勝より -
- 瞬視の魔眼使用時、数度見た技は完璧に自分のものと出来る。

【魔法始動キー】

アル・テム・ラ・テム・ルーテック

【使用魔法】

サギタ・マギカ
魔法の射手 全属性

収束することにより威力が変化

【アーティファクト】

光の剣

魔血玉（デモン・ブラッド

第十四話その1「主人公設定（原作開始時）」（後書き）

Live A Live の知力25のスキルは半端ないですね。

うまい具合に技を食らえば「エヤァー！」て敵の技を覚えることが出来るんですから。

第十五話「幕間　く黒き翼に関わりし者達」　（前書き）

約一月ぶりの投稿です。

今回はきりもいいということとで幕間ということとで書きました。
それではどうぞお読みください。

第十五話「幕間　く黒き翼に関わりし者達」

2 - Aの副担任兼女子寮の寮長となつて2週間が過ぎた日の朝、いつもどおりの時間に起き、寮内の一仕事を終え外へ出た。

「おはよう、翼にい。」

「おはよう、アスナ。相変わらず早いな。」

「翼にいほどじゃないけどね。っとあんまりゆっくりしてられないんだつた、じゃあね。」

「気をつけるんだぞ！」

『はい』という返事を残しアスナはかなりのスピードで走り去っていく。

やれやれ、返事だけはいいいんだから。それにしてもアスナからの呼ばれ方が『翼にい』で固定化されているな…。

授業や他の教師達がいるとき以外では好きに呼ぶように伝えてあるからなのだが…。

そのおかげで一部の生徒を除き、気さくに接してくれるようになった。

だがそのせいでアスナ、そしてこのかからは『翼にい』と呼ばれるようになった。

アスナ曰く、『なんか分からないんだけど、すごく懐かしい感じがして。お兄ちゃんって感じがするんだ。』

このか曰く、『ウチも兄さまが欲しかったんや。アスナがそう呼ぶならウチも呼びたいなあ。』

…だそうだ。接し方が兄妹のように接しているため知らぬ人から見れば本当の兄妹に見えるかもしれないが、最初の頃はいらぬ疑惑がかけられた。発信源は魔帆良のパパラツチこと朝倉と悪乗りが好き
な早乙女だ。

「っと、のんびりもしていられんな。」

体を温めるためのランニングも兼ねて目的の場所まで走っていった。

） SIDE アスナ ）

翼にいが魔帆良に来て2週間。もうすっかり学園に馴染んだと思う。

翼にいは他の先生たちと違い『先生』という肩書きがあまり好きじゃないみたい。好きに呼ぶようにと言われたから『翼にい』と呼んでみたがあっさりと受け入れられた。家族ができたみたいで凄く嬉しいな。

そんな翼にいにも一つ困ったところがある。

他人の心の機微にはよく気付くのに、自分のことについてはさっぱりなのよね。

ここ2週間で翼にいに想いを寄せている子の数が三桁を超えたそう
だ。実際に行動を起こそうとした子達もいたらしいけど翼にいは気
づかなかったみたい。翼にいつてかなり鈍感なのね。

昨日パルと朝倉が言っただけ、龍宮さんとエヴァちゃん、あ
とは桜咲さんが怪しいらしい。よく一緒にいる所を目撃されていた
り、その三人が普段私達には見せないような顔を翼にいに見せてい
るかららしい。

この話を一緒に聞いたこのかが授業のあと翼にいの元へ駆け寄って
いった。もしかしてこのかも翼にいのことを？

もしそうだったなら親友として応援するよ！

そうね、先ずはクリスマスね！！そうと決まったらいろいろと準備
しなくちゃ！！！！

＼ SIDE END ｝

＼ SIDE このか ｝

アスナを見送って窓から外を見下ろした。そこには翼にいがおった。

翼にいはアスナと少し話した後、どこかへと走っていった。

翼にい…か。昨日言っただことホントなら嬉しいな。せつちゃんが
ウチのこと嫌っているわけじゃないって。

『刹那は今臆病になっているんだ。けど、お前がお前のままでいれば必ず元の関係に戻るさ。だから、今は少し淋しい思いをさせるだろうけど刹那を信じて待っていてくれ。』

ウチがウチのままでいれば…か。それやったら大丈夫や。せつちゃん、ウチ待っとるえ。

） SIDE END ）

森の中の広場には数人が待っていた。

「おはよう、マナ、刹那、楓、古。」

「おはよう、翼。」

「おはようございます、翼さん。」

「おはようござる、翼殿。」

「翼師父、おはようネ。」

初日以降、この四人にはそれぞれの訓練を行っている。

マナには基本的なことは昔に一通り教えてあり、自己流でそれを昇華しているので、隙が出来てしまうような癖がある部分を修正させ覚えこませている。

対人向けの実践が不足している刹那には、動きを模倣し無駄を省いた動きにした上での戦闘を行い、自分の欠点を認識することから始め、今では刹那はその動きを自分のものに昇華していた。

今の時点で、修学旅行では遅れをとることはない程にまではなった。もつとも、それは月詠が様子見程度の力で戦った場合だが…。

楓は刹那との手合わせをしている際に見つかってしまった。あとから聞いた話によると今いるこの場所も彼女の修行場のひとつだという。そして、一度だけの手合わせのつもりが、なし崩しに相手をすることに今に至る。

古についても似たような感じだ。古にとってはいつものことであるう朝の野良試合。だが、薄れてしまった知識としてしか知らなかった俺には1対多の構図にしか見えず、間に割り込みそれぞれにデコピンをお見舞いした。振り返りざま抱拳礼をされ、つい反射で返してしまった。

どちらにも普通に相手していれば問題なかったのだが、どうせならということと楓には炎魔忍軍の技、古には心山拳の技で手合わせしたのが拙かった。二人から聞き、後に図書館島で調べて分かったのだが両方とも今は失われし流派だったらしく、俺がその使い手と知るや、師事を頼んできた。

刹那とマナが何故か嫌な顔をしたが条件付きで許可すると言ったらOKを出してきた。その条件とは、今後小テストを含めたテストで数学のの赤点を出さないこと。

因みにこの条件は刹那とマナにも出してある。やっぱり勉強が出来た上での強さでしょう。

「じゃあ今日も始めるぞ。先ずは刹那からだ、来い！」

「では、いきますー！」

.....

「今日はここまで。早く汗や汚れを落としてこい。朝食にするぞ。」

「（ああーはい（アルーでござる））。」

楓と古には朝の修行のあと、刹那とマナにはプラスで警備で一緒だった場合のあとにご飯を食べる習慣がついた。

偶に茶々丸とレシピの交換も行っているので料理が充実していく。惜しむらくは彼女自身には味覚が無いということだ。

また迷惑をかけるかもしれないが、一度あの人に頼んでみるか？

「翼、どうしたんだい？今日は職員会議って言ってなかったかい？」

「っとそうだった。刹那、皿は流しに置いてくれていいからな。あとマナ、悪いが戸締り頼んだ。」

ポイと鍵をマナに投げ渡す。刹那は皆の食器を集めて流しへ運ぶ。楓と古は食べたら自分の分を片付けてサッと出ていく。楓は修行の続きを、古は朝の野良試合をするために。

「さて、今日も頑張るか。」

） SIDE マナ ）

久しぶりに翼と手合わせしたけど、銃についてもあれから更に強くなっていたなんてね。これじゃあ勝つどころか一撃入れることすら苦勞しそうだよ。

そんなことを考え軽く落ち込んだが、翼からは『よくここまで自分の動きに昇華したな。』と褒められ頭を撫でられた。

頭を撫でられて嬉しいと感じるなんて、私にもまだ子供っぽい所が残っていたのだなと苦笑する。

大概の事をこなせる翼に対して文句があるとすれば、鈍すぎるというのと無自覚すぎるということだ。

その証拠に近衛一筋（？）だった刹那を落としたし、この2週間で翼が受け持つクラスの半数近くが翼に明らかな好意を持っている。さらに、噂も広まって現在もその数は上昇中と朝倉が言っていたな。

一般生徒に翼が靡くとも思えないけど……いや、うちのクラスに限っては別だな。

これはそろそろ本格的に既成事実の一つや二つでも作ってしまおうかな？

でもいい切欠がありません……。

さつきも思っただけど、今の私の実力だと翼に一撃入れることも苦勞しそうだし……刹那も抱き込もうかな？

翼を独占することは出来なくなるだろうけど戦力は多いほうがいいしね。

エヴァンジェリンは………止めておこう。彼女がいるとまとまるものもまとまらなくなるだろうし。ああ、茶々丸だけは借りていくでしょう、彼女も戦力になりえるだろうし。

とりあえずの目標はクリスマスだね。まずは刹那と相談して対策でも練ろうかな。

＼ SIDE END ｝

＼ SIDE 刹那 ｝

翼さんに師事してから、伸び悩んでいた力がかなり上がったのを感じた。

これなら前よりもこのかお嬢様をお護りすることが出来る。

私は自分自身が傷ついてでもいいからと更なる力を求めたが、翼さんは首を縦に振ってはくれなかった。

何故、と問い詰めると

『お前にはまだ見えていないものがある。お前は自分の力を大切な人を護るために使うのだろうか？』

と言われた。

私の力はお嬢様を護るためにある。私は頷く。

『護るというのは危険からだけじゃあない。心も護れないと本当に護ったとはいえない。』

心を護る、か。私は逃げているのだろうか？

だが…私の秘密を知られればお嬢様も、そして翼さんも…。

まだ答えは出せそうにないな…………。

） SIDE END ）

昼休み、包みを持って屋上へ上がる。そこには先客がいた。

「翼、血が切れた。また貰うぞ。」

「こんにちは、翼さん。」

「エヴァ、来て早々にかける言葉がそれか？昼食はいらないと見えるな。」

茶々丸に包みを渡し、踵を返し戻ろうとする。

「すまん、悪かった、謝る！だから帰ろうとするな！！」

「……………よろしい。」

持っていた包みをエヴァに渡して茶々丸が敷いてくれたシートに座る。

「にしても、前から思ったんだが一日の量が多いんじゃないか？また暴走はご免だぞ？」

初っ端に血をあげたときはどうなることかと思ったよ。

） 回想IN ）

「で、どれだけの血が必要なんだ？」

「お前の魔力容量なら少しの量で当分の魔力の補充が出来るだろうな。」

「そうなのか？まあ多少血を抜かれても問題ないから多めに吸っても構わんが。」

「では早速頂くぞ。あーっ、ん。」

ちゅっつうう……

「首筋かよ……。傷は直せるからいいけど。」

ちゅっつうう……

「にしても、学園結界を何とかしないと……。ったくあの馬鹿ナギめ……。」

ちゅっつうう……

「……ちょっと吸いすぎじゃないか、エヴァ？」

ちゅっつうう……

「エヴァ？エヴァ！！？ちょ、おま、どこに手を伸ばしてんの！！？
？ちゃ、茶々丸ー助けてくれー！！！」

「……どうしました、翼さ……失礼しました。」

「茶々丸ー！！帰らないでー！！！」

（ 回想OUT ）

茶々丸のおかげで結果的にやられることはなかったので事なきを得たが、こんな事があったので血の量を制限するようになった。

「茶々丸、一日の量はどうなっている？」

「私がマスターにお出ししているのは翼さんに言われた通りお猪口一杯分だけです。」

「デモ御主人が夜二飲ンデイルノヲ見タコトアルゼ。」

いつの間に来たのだろう、チャチャゼロが酒瓶をもって手摺に座っていた。

「チャチャゼロ、どうしてここにいる！？それと黙っていると云ったはずだろ！！？」

「悪いナ御主人。旦那カラハ正直ニ報告スレバ殺^ヤリアツテヤルト言ワレテイルカラヨ、マア俺ヲ恨ムナヨ？」

凄く物騒な言葉に聞こえた気がするが、気にしたらすぐにでも襲いかかれそうだからつつこまないでおこう。

「まあそんな感じた。因みに茶々丸にも気づいたことがあったら言うように頼んで了承も得た。」

「茶々丸にもだと！？しかも了承しただと！！？」

「すみませんマスター。ですが、これも翼さんとの……………マスターの為ですから。」

「コラ待て茶々丸。お前今明らかに嘘をついたよな？」

「…。翼さん、お茶です。」

「お、ありがとな茶々丸。」

自分でも淹れることもあるが、茶々丸の淹れるお茶はそれより格段に美味い。

「無視するなあああっ！！！！」

「エヴァ、五月蠅い。」

「マスター、五月蠅いです。」

「グスッ。」

エヴァのライフはもうゼロだ。

茶々丸は何時の間にかそんなエヴァを記録している。

一応フォローを入れておくか。

「エヴァ、卵焼きやるから機嫌直せつて。」

「グスッ、あとデザートゼリーも。」

「はいはい、それもやるから。だから機嫌直して血の量を減らすんだぞ？」

「…わかった。」

弁当箱から卵焼きと脇に置いておいたゼリーを差し出し昼食を再開する。その間も茶々丸はエヴァを撮っていた。

「モグモグ…ッン。ところで翼、新…く覚えた魔法の調子はどうだ？」

「そうだな…別荘でいろいろと試させてもらったが、覚えることの出来たものはどれも途轍もない威力だったな。」

使用するための条件と魔力の消耗が厳しいが、これなら魔法使いとしての役割も十二分に果たせるな。とはいっても大概の相手なら【デス・クリムゾン】で十分だけどな。

「ほう、そうか。ならば後で見せてもらうとするか。それにしても私との仮契約も含めてだが、お前のアーティファクトはどれも規格外の能力を持ったものだな？」

「そうだな。（まあ俺の存在自体がイレギュラーだからだろうが…。）」

でもまさかエヴァの願いが仮契約だったとは…しかもその方法が何故かキスで。

一応キスが主流になっているのは知っているが他の方法だってあるだろうに…。テオもエヴァもそうだが何でキスに拘るんだろう？

キーンコーンカーンコーン

「っと、もう時間か。じゃあ今夜にでもまた別荘借りに行くからその時な。ちゃんと授業に出るんだぞ、エヴァ。」

「余計なお世話だ！」

包みを受け取り屋上を後にする。

「…俺ノ出番コレダケカヨ？」

あとにはチャチャゼロだけが取り残された…。

〈 SIDE エヴァ 〉

去っていく翼の後姿を見る。

まったく…私も長い間いろいろな変わった人間を見てきたがあんなに変わった人間を見るのは初めてだな。

従者に出来ないのが惜しいと思うが仮契約とはいえ繋がりができたのは先ずは一步という所だな。

にしても、最近茶々丸の私に対する態度が雑になっているというか、翼と一緒にだと妙に絡んでくるな。

まさか茶々丸も！？

あり得る、茶々丸は基本的に私に付きっ切りだし、あれでもまだ2

歳だし……それに何より相手が翼だ。

まあ茶々丸は私の従者だし私を一番に考えるなら問題ない。

となると当面の敵はヘラス国の第三皇女だな。

くつくつく貴様のアドバンテージは既に無いも同然！いや、毎日会えるという点で私のほうが有利なはず！！

今一番近いイベントは…クリスマス、か。去年までは他と変わらな
い一日に感じたが今年は良い日になりそうだ。

） SIDE END ）

） SIDE 茶々丸 ）

翼さんは不思議な人です。

あの人のお蔭でレシピも増えてマスターにも喜んで頂けましたし、
それにあの人と一緒だとマスターの新しい一面が見れます。

あの人に初めて会った日以降、あの人と話をするともーターの回転
数があがっているのを感じます。

それにこの奇妙な感覚は何なのでしょう…。

どう言語化すればいいのでしょうか…。今度調べてみましょう。

） S I D E E N D ）

授業が終わり放課後になった学園長室に翼は訪れていた。

「学園長、以前言ったが今日の夜から明後日まで休みを貰う。」

「ウム、皇女殿にヨロシクの。」

「分かった。」

.....

「で、これからどこへ行くのじゃ?」

「見晴らしのいい丘があると城の者に聞いたのだがそこへ行こうと思う。」

今はテオと二人でヘラス国城下町をブラリ歩いている。

一月ぶりに会ったテオは外に出たいと言いお忍びで出てきたという次第だ。無論ヘラス国王には先に許可は貰ってはおいたが…。

「妾としてはパァーツとしたい気分なのじゃが。」

「政務などで疲れているだろう？ 偶にはのんびりするのもいいと思う。それに明日の夕方まではこっちに居れるから、疲れを取った上でパァーツとすればいいさ。」

「お前がそう言うならそうしようかの。」

テオが腕をとり、寄り添う形で歩いていく。

） S I D E テオドラ ）

一月ぶりに翼に会えるということでスケジュール調整をして休みをゲットできた。

この機会にいろいろな話を聞いておかねば…。

翌日に翼が来て丘の上で翼と一緒に作った昼食を食べた。

その際翼がいろいろと話してくれた。

麻帆良の学園長を10数年経っても容姿が変化しない妖怪『ぬらりひょん』に『ばる。ん爺』と言ったり、600万\$の賞金首にして闇の福音を『吸血幼女』と言ったりと、妾が今まで持っていたイメ

ージが崩れて思わず笑ってしまったぞ。

その後もいろいろな話を聞いた、勿論翼が受け持つクラスの話も。

聞いていてとても面白そうなクラスだと思った。

一度でいいから旧世界に行つてそのクラスを見てみたいの。

まあ旧世界に行けるだけの時間はとても取れんのじゃが…。それにそのような時間があるのなら翼と二人で過ごす時間に当ててしまいたいじゃが…。

出来ることならお主にもつと妾の所に来て欲しいと思うがあまり我が俤を言つてお主を困らせたくは無い。

だから翼、このひとときだけでよいから妾にお主の時間をくれ。

） SIDE END ）

「じゃあな、テオ。」

「今度はいつ来れそうなんじゃ？」

「そうだな…期末試験があったり大掃除があったり、あと年末に向けて侵入者が増えると学園長も言っていたからな…。」

まあシフト制だしどこかの休日を返上すれば休みは貰えるだろう。タカミチや葛葉さん、シスターシャークティ辺りに打診してみるか。

しかし葛葉さんやシスターシャークティまでファンクラブに入っていたのは驚かされたな…。

「年末か年明けにでもまとまった休みを取らせてもらおうとするよ。」

「そうか、1ヶ月以上先になるのか…。」

スマナイな、あまり時間をとることが出来なくて…。

くしゃりと頭を撫で、反対の手で目に浮かぶ涙を拭う。

「また来るから。」

「…待つておるぞ。」

ヘラス国を後にし、麻帆良へと帰る。その途中の飛行機で久しぶりの夢を見た。

） IN DREAM ）

まどろみの中目を開くと懐かしい景色が視界に入ってきた。

ここに来るのも懐かしいな。前来たのは何年前になるだろうか…。

『11年と4ヶ月前ですよ。』

いつの間にやってきたのだろう、以前は【見習い】と書いてあった

が今は【女神秘書補佐補佐】にランクUP（？）された札を付けた少女がいた。

身長などから以前よりも幾分成長しているようだ。

『お久しぶりです、神風さん。』

「本当に久しぶりだね、アテナちゃん。いつ昇進したの？」

『4年前からですね。でもこれって昇進って言えるのかな？』

補佐の補佐だからね…正直微妙かもしれないね。

『神風さんにも微妙って言われた…。』

いつの間にこの子まで心を読めるようになったのでしょうか…。アテナ…恐ろしい子！

『神族は【見習い】から位が変わると表層心理までなら読めるようになるんです。と、そんな事よりあの方がお待ちですから行きましよう。』

そうだね、あまり待たせるのも悪いし。

『…神風さん、ボク泣きますよ？』

「ごめんごめん、じゃあ行こうか。」

真っ暗な空間をアテナちゃんを先導に進んでいく。

「なあ、アテナちゃん。前から気になっていたんだけどさ、何でこっつて真っ暗なの？」

神様とかだったら絵画でありそんな樂園のようなイメージだったり、せめて白い空間だと思うんだけど…。

『ああ、そういえば言っていないませんでしたよね。ボクも神風さんと初めて会ったときは知らなかったんで後から聞いたんですけど、この空間はその人の魂の空間で色は魂の色になるんです。そしてその色によって死後の行く先が決められるんです。』

「ってことは俺の魂真っ黒？真っ黒ってことは最低でも地獄行き？…マジへこむんですけど（つω・、。）」

『それが神風さんの場合、前の神様に半ば呪いの様な形で殺されてしまったので本来の色が黒に塗り潰されてしまったんです。そして塗り潰される前の色はもう誰にも分からないでしょう。』

「あ・の・じ・じ・いゝゝ！！！」

今度会ったら一発分だけでいいから殺されたときの恨みを含めて思い切り殴ってやる。

本当だったらもつと恨みを持つはずだがそこはあの人に免じて一発でおいておく。その代わり今の力で思い切り殴ってやるから。

『神風さん、着きましたよ。』

周りの空間に合っていないドアをコンコンとノックし中の声を確認しドアを開ける。

「久しぶりだね、へ『翼』」んむ!？」

いきなりのことに頭がついていかない。よし、整理しよう。

1・抱きつかれた。

2・キスされた。

3・今もその状態が続いている。

……………何ですと!?!?

「むうう!ぷはっ…。へラさん…／＼／」

『接吻くらいで赤くなるとはまだまだ初心じゃの。(これなら心配することも無いかの?)とりあえずそこに座ってくれ。』

彼女が指を鳴らすとテーブルとティーセットが出てきた。へラさんとアテナちゃんが座り、俺もそれに続けて座る。

『先ずはお主の疑問について答えよう。』

「助かります。」

聞きたいことは多き分けて二点。

『先ずひとつ、本来【ネギま!】の世界には存在しない者、つまり

イレギュラーについてじゃが…間違いなく妾に近い神格をもつ者の介入によるものじゃな。これについてはその数も少ないことじゃしアテナが調査をしておる。アテナの位もいろいろと動きやすくするために変更したのじゃ。」

それが【補佐補佐】ってわけか。

『うう…この位のせいで同期の子からは笑われるんですよ？』

『でも主は自分で決めたじやろう？高い位を得られるという欲に駆られてのう。』

『あああつ！あるとき領いたボクを殴りに行きたい！！！！』

頭を抱えてテーブルに突っ伏すアテナちゃん。

『まあ此奴の事は放っておけ。それより二つ目の件じゃが、これも一つ目に関わってくる事なのじゃが…。』

ヘラさんは少し間を取って一度お茶を飲む。

『お主のアーティファクトを通常あちらの世界で現れない物に変えたのはイレギュラーに対抗するためじゃ。無論、存在しない物であるためそれぞれに制約があるがの。』

「だからあんな風になっちゃうんですね。初めて使用したときはかなり驚きましたよ？」

『妾もあんな制約になるとは思ってもみなんだわ。（暫くあの翼が頭から離れなかったからの／＼／＼）』

「へらさん？」

『神風さん、ああなつたへら様は暫く戻ってきません。ですからボクから事後承諾の形になりますけど一つお話があります。』

アテナちゃんがファイルから一枚の紙を取り出し俺の元に置く。

「……………ハイ？」

目の前に出された紙をもう一度見直す。つ、疲れているのかな？（つ４）ゴシゴシ（；。４）

「なあアテナちゃん……………これ嘘だろ？」

渡されたのは新聞のＴＶ欄だった。そこには【転生者・神風翼の異世界譚】と書かれていた。

『本当です。神風さんの転生ライフですが、神界にて絶賛放送中です♪あ、因みに最高視聴率は第１００話の【紅き翼の最終決戦！友よ、後は任せたぞ！】で３１．３％を記録しました。いやぁ実際ボクも手に汗握る思いで見ましたよ。』

止めてくれー！！！！は、は、恥ずかしすぎる！！！！

「まさかとは思うが…俺の考えも『勿論流れていますよ。』……………グッッ！」

駄目だ、もう俺の精神力はゼロだ…。

『ということで神風さん、貴方の転生ライフをこれからも放送させてもらいます。よろしくお願いしますね。』

「どうせ断れないんだろ………だったらある程度のプライバシーだけは守ってくれよ？」

『ハイ、その点は大丈夫です。先程貴方の考えも流れていると言いましたが大概のものはボクとヘラ様でカットしてありますから安心してください。』

「そっか、ヘラさんとアテナちゃんなら安心して任せられる。すごく恥ずかしいけど頼むな。」

『ハイ！』

それから暫くしてヘラさんが戻ってきて談笑が続いた。

.....

『む、そろそろ限界か。お主から頼まれた件じゃが目を覚ました時に術式を記憶させておく。』

「ありがとう、ヘラさん。」

『それといつ出来るかは分かんが、お主のサポートとして一人送ろうと思う。その者と一緒にイレギュラーにも対処してくれ。』

「分かりました。」

そろそろ目が覚めそうなのか世界が薄くなっていく。

『そして最後に…翼よ、聞いておきたいことがある。正直に答えてくれぬか?』

「何ですか?」

『お主は…平凡とは程遠い異世界に転生させた妾を恨んでおらぬか?』

「いいや。どうして恨まなくちゃならないんだ?」

本心を言う。

『お主の夢じゃ。今でも夢に魘されることがあるじやろつ。それにお主を狙うイレギュラーの存在もある。妾はお主を転生させるべきではなかったのではないかと思う。』

目を伏せるヘラさんを抱き寄せる。

「ありがとうヘラさん、気にかけてくれて。でも転生は俺これが選択した結果だ。だから貴女が気に病むことじゃない。というより…」

一度区切り、ニツと笑う。

「全部を引つ括めてやっぱり ” ありがとう ” だよ。」

『翼……………妾のほうこそ ” ありがとう ” なのじゃ。』

意識が薄れる中、その言葉はしっかりと聞こえ、その顔はハッキリと映ったのであった。

〈 OUT DREAM 〉

【続く】

第十五話「幕間　く黒き翼に関わりし者達」　（後書き）

次回、野菜少年が出てきます。

第十六話「英雄の子との初会合」(前書き)

大分間が開いてしまいましたが、ようやくネギ襲来です。

この作品ではアンチネギではないので彼もゆっくりと成長させていきたいと思っています。

第十六話「英雄の子との初会合」

麻帆良学園学園長室、そこには二人の男が居た。

「翼君、予定通り明日にナギ・スプリングフィールドの息子のネギ君がやってくる。」

「ああそれは聞いた。それで俺に何の用だ？」

どうせネギの裏を含めたサポートを頼むつもりだろう。

「うむ、お主にはネギ君の補佐をお願いしたい。」

やはりきたか。補佐をするのは別に構わないがタダじゃあやらないぞ？

「それは裏の事も含めてか？」

「うむ。」

爺さんは頷く。

「条件がいくつかある。それが呑めない場合は引き受けない。」

「…言うてみい。」

「一つ、エヴァンジェリンの枷となっている学園結界の構築の変換許可。」

ようやく学園結界をどうにかする方法が出来上がったのだ。これを機にエヴァを解放してやらねばな。

「それは結界の強度的には問題ないのかのう？」

「その点はちゃんと考慮してあるさ。」

そうでなければ条件に挙げる訳にはいかないしな。

「続けるぞ？二つ、それに伴う魔法教師・生徒の武力行使に対する迎撃許可…極力怪我だけにしておくがこれは相手次第だな。」

今でこそ襲われる回数は減ったがいい加減に鬱陶しい。そろそろ手加減つてのを忘れなくなってきたくらいだ。

「…一度招集をかけて徹底させるよう伝えておこう。じゃが出来るだけ殺さぬようにしてくれんかの？」

「相手の行動、考え方次第だ。善処はするが殺されたくなければよく徹底させておくことだ。続きだ。三つ、サポートはするがあくまで俺の方法でやらせてもらう。」

ナギとの約束があるから面倒は見るともりだが、あまり甘やかす気はないからな？

「一人前の魔法使いには導いてやってくれるかの？」

「マジステル・マジ【立派な魔法使い】にしろとは言わないんだな。それならばOKだ。」

俺個人としてはそういうつもりであつたからこれはありがたいと思う。

まあネギ自身は【立派な魔法使い】^{マギステル・マギ}を目指すだろうが、それもちやんと考えてのことならそれに文句をつける気はない。あくまでも一つの答えとして【立派な魔法使い】^{マギステル・マギ}の歪みも知っていて欲しいだけだからな。

てつきりこの爺さんのことだから【立派な魔法使い】^{マギステル・マギ}にしてくれとか言つと思つたのだが…。少しは爺さんの評価を戻してもいいか？

「条件とやらはそれで全部かの？」

「いや、もう一つある。これは条件というより願いになるが、俺が【紅き翼】の一員であるということはバレるまではネギに伏せておいてほしい。」

「ホッ？まあそのくらいならよかろう。では早速招集をかけるとしようかの。」

「じゃあ俺は結界の構築を変更してくる。ついでには図書館島の深部に潜る許可をくれ。」

「高畑君、明石君と一緒になら許可しよう。」

まあ今まで張っていた結界を変えるんだ、監視くらいは仕方ないだろう。人選も悪くはないしな。

「その二人なら構わない。こちらから呼んでさっきの条件についても話しておく。」

じゃあな、と残し学園長室を去る。

「やれやれ、また波紋を呼びそうじゃわい…。」

残された学園長はため息を吐き内線電話で召集を指示した。

翌日、異常な魔力の高まりに気づき駆けつけてみればアスナの服が脱がされ呆然としている状況だった。

「なあタカミチ……………この状況を詳しく説明してくれないか？」

「ハハハツ…。ちよつとそれは…。」

とりあえずまずはアスナに着ていたコートをかけこのかを見る。その視線に気づいたこのかは近くに寄ってくる。

「あんなあ翼にい、あの子がアスナに『あなた失恋の相が出てますよ』って言うたんや。それにアスナが怒ってもうてな。」

初めて会った人にそれはないだろう…。そんでもってくしゃみで魔力が暴走して武装解除された、と。

「状況は分かった（あまり分かりたくは無かったが…）。アスナ、ボタン縫っておくから服を貸せ、それとその職員用の更衣室でジャージにでも着替えておけ。」

「うう…分かった、お願い翼にい。」

「ほならちよつと待つとつてな。」

二人は小走りで向かう。

「スプリングフィールド先生、二人が戻ったら学園長室に案内する。」

「は、はい!」

ボタンを手早く縫いながらタカミチを呼びつける。

「タカミチよ、あちらの学校はどういう教育をしているんだ?常識にしろアレ(・・)にしろちゃんと学ばせているのか?」

「僕はこの体質ですからあっちの学校にはネギ君の様子を見るくらいでしか行っていないんで教育内容とかは分かりませんが、多分彼の境遇を考えてあまり口を出さなかったのでは?」

おそらくそんな感じなんだろうな。つたく、親が不在となれば教師が教えないと駄目だというのに…。

「はあっ…。」

「ため息ばかりだと老けますよ、翼さん。」

「いや、その台詞はお前には言われたくないな、タカミチ。」

「それは言わないでください…。」

「「はあっ…。」」

男二人それぞれの思いでため息をつくのであった。

二人が戻り、学園長質についたところで、タカミチは麻帆良大学工

学部で起こったと連絡を受け、肩を落としながらいざこざを治めに行った。

当のネギはといえば、

「なるほど、修行のために日本で学校の先生を…そりゃまた大変な修行をもうったのー。」

爺さんと話をしていた。爺さん、修行言っな。魔法の秘匿はどうした？アスナやこのかが訝しんでいるぞ。

「は、はい、よろしくお願いします」

「修行は大変なものになると思うが覚悟はあるかの？」

だから修行って言うなって。ほらアスナ、ボタン縫い終わったぞ。

「はい!!」

「よろしい。ではまずは教育実習とゆーことで2・Aの担任として3月まで頑張ってもらおうかの。」

「えええええっ!!?」

「はい!!」

アスナは予想外だったらしく大声を上げ、片やネギはといえばまたもや元気な返事をする。

ていうかアスナ、お前達が迎えに行かされた時点で多少の予想は出

来るだろうに…。

「うむ、それではお主に紹介しよう。そこにおけるのは神風翼君、彼は2-Aの副担任をしており。彼はいろいろと知っておるからよく学ぶとよいぞ。」

含みを持たせた言葉に一同が？を浮かべる。駄目だ、この爺さん…本当に魔法を秘匿する気が無いんじゃないか？

まあいい、爺さんは今度一度シメるとしてまずはネギに魔法関係者だと知ってもらうか。

右手に少量の魔力を込めを差し出しネギの反応を待つ。数瞬戸惑ったネギだがすぐに笑顔になり握り返してきた。

「っ！？翼先生！？」

反対の手を口元にやり黙るようジェスチャーする。

立ち位置の関係上アスナとこのかを背にしているため、声さえ上げなければバレる心配も無い。

「神風翼だ、翼と気軽に呼んでも構わない。よろしく頼むよ、スプリングフィールド先生。」

「こ、こちらこそよろしく申し上げます、翼先生。翼先生、僕のもとネギと気軽に呼んでください。」

「分かった、では行こうかネギ先生。アスナ、このか、お前達も行くぞ。特にアスナ、お前は早く着替えて来い。」

俺は立ち上がり皆を連れて学園長室を出ようとするが、そのときに爺さんが爆弾発言をする。

「ああ、そうじゃ。実はの、ネギ君には悪いが今住む所が無いんじゃないよ。じゃからこのかにアスナちゃん、悪いんじゃないがしばらくお前達の部屋にネギ君を泊めてやってくれんかの？」

「「えゝ！？」」

「うちはええよ。この子かわええし。」

「アタシは嫌よ！何でこんなガキの面倒見なきゃいけないんですか
！！」

アスナは爺さんに詰め寄る。まあ初対面であんなことがあった訳だし、それに普通だったら問題になるはずだしな…。

「今ワシが頼れるのはお主等しかおらんのじゃ。じゃからアスナちゃんや、頼まれてくれんかの？」

「うぐっ…。」

言い負かされたか。まあこの爺さんに口で勝てる奴なんてほとんど居ないだろうがな、狸爺め…。

「仲良くするんじゃないぞ？」

「わかったで、おじいちゃん。ほなアスナ、はよ行こう？翼にい、ネギ君教室で待つとるえゝ。」

「あつ、このか待つてよ！翼にい、服ありがとね。…ふんっ！」

アスナはネギを一睨みした後走っていった。

「何ですかあの人は？」

ネギは何故自分に敵意を向けられているのか分かっていないようだ。仕方ない、いきなりになるが軽く説教するか。

「ネギ先生、おおよそのあらましはこのかから聞いたがアスナの暴力的な行為を差し引いても君が悪い。」

「え…何ですか？僕は親切であの人に…。」

「いくら親切だからといっても、相手を傷つけてしまうようなことを口にするのはよくない。ましてや初対面の人なら尚更な。君が逆の立場だったらどうだ？」

「…それはっ！？ば、僕あの人に失礼なことを言ったんじゃない？」

あたふたとキョドるネギ。見ていて面白いが、そろそろ時間もヤバいし正気に戻ってもらうか。

「後でちゃんと謝ればアスナも許してくれるはずさ。それよりホラ、これがウチのクラス名簿だ。まずはクラスの名前を覚えることだ。」

「ありがとうございます。…こ、こんないっぱい…。あ、さっきの神楽坂明日菜さんに近衛木乃香さん。」

名簿を受け取ったネギは早速中を確かめる。

「あれ、そういえばさっき二人とも翼先生のことをお兄さんって呼んでましたけど二人の親戚なんですか？あと翼先生も魔法のことを？」

「あゝその辺の事情はまた今度話すよ。それと、あまり軽々しく【魔法】なんて口にするんじゃない。ほら、着いたぞ。」

廊下の窓から中の様子を伺うネギ。若干震えているがどうやら大丈夫なようだな。

「じゃあ俺が呼んだら入ってきなさい。」

やれやれ、あいつらも懲りないな。新任の教師が来る度にこんな事をするわけじゃないだろうな？

左手にチョークを4本用意し、扉を開ける。同時に落ちてきた黒板消しを右手で受け止め黒板に投げ返す。

その隙を狙うがごとく数本の玩具の矢が飛んでき、同時に数個のパチンコ玉が飛んでくる。

その全てを足で払い、足を捕らえようとしていた縄を跳躍し避ける。

そして本来立つはずである教壇を素通りし、落ちてきた水入りバケツを掴み取り地面に置き、持っていたチョークを投げつける。

「……いったー」

「風香・史伽に春日にハルナ、お前らは加減というものを覚えろ。」

「横暴だよ翼先生、ボクらがそんなことをするはずないじゃないですか。」

チヨークが当たった所をさすりながら鳴滝姉・風香は言う。

「ほう、ならばクラスの皆に聞くが今回の罨は誰が仕掛けた？正直に答えたら好きな菓子を作ってきてやるぞ。」

『翼先生の言ったとおり鳴滝姉妹に美空にハルナです！』

「「「「ちよ、ちよつとおお！？」」「」」」

「聞いての通りだ。よし皆、放課後までに何を作って欲しいかのリストを用意しておけ。で、4人にはいつもの3倍の宿題をプレゼントしよう。」

「「「「イヤーーーーッ！！！！」」「」」」

4人は泣きながら叫ぶ。これに懲りたら罨なんか張らないでくれよ、避けるの面倒だから…。

「まあコイツ等自業自得組の事は放っておくとして、皆も気になっている新任の教師を紹介する。ネギ先生、入ってきなさい。」

「し、失礼します…。」

怖ず怖ずとドアを開けぎこちない歩き方で教壇へとあがる。

「今日から教育実習でこのクラスの担任をしてもらうネギ・スプリングフィールド先生だ。ネギ先生、挨拶をお願いする。」

教壇の真ん中に立ったネギはまだ緊張しているようだが覚悟が決まったのか生徒達に向き合い告げる。

「きよ、今日からこの学校でまほ、…英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間皆さんの担任にもなりましたので短い間でですけどよろしくお願いします。」

頭を下げ反応を待つネギ。そして静まり返る教室。…これはくるか？耳を塞ぎ教壇から降りる。

次の瞬間…

「……キヤー……、かわいいー！！！！」

歓声と共に教壇へ雪崩れ込んでくる生徒達。そしてみくちゃんにされるネギを見ている俺の元に一人の生徒が寄ってくる。

「おい先生、嘘だろ？」

「嘘だと思いたいのは分かるが事実だ、千雨。…どうしても我慢できなくなったら俺の所に愚痴を言いに来い。話や愚痴くらいなら聞いてやれるから。」

「…アンタは無自覚に女に優しくしたり笑顔をふりまかないほうがいいぞ、いつか刺されそうな気がする。」

「？よく分からんが、とにかくあまり一人で溜め込むなよ。」

頭をばんぼんとすると千雨の顔が若干赤くなる。

「止めるつての／＼。ハアツ…鈍いアンタに言っても仕方ないか。…まあアンタも規格外だが考え方は常識的だから、一応頼りにはさせてもらうよ、先生。」

手を振り自分の席に戻っていく千雨。ところでエヴァにマナに刹那、お前らのその殺気は何だ？茶々丸も若干不満そうな顔をしているし…。

つとそろそろHRが終わるな。

「ほら、そこまでにして授業の準備をしろ。ネギ先生も準備をするんだ。」

皆が授業の準備をする中教室の後ろに移動する。暫くは授業を観察していたがエヴァの視線を感じ、胸にしまっているカードに意識を向ける。

『どうだ、ナギの息子の感想は？』

『正直ガツカリだ、お前に聞いていたから多少は予想していたがあの坊やはその予想より悪い…。というか本当に魔法学校の主席卒業者なのか？確かに奴譲りの魔力はたいしたものだがそれだけじゃないか。』

『返す言葉も見つからんよ。』

『で、あの坊やにお前のことは話したのか？』

『魔法関係者だということだけはな、【紅き翼】であるということ
は伝えると面倒だし、それに約束もあるから伏せてある。で、いつ
頃襲うつもりだ?』

『具体的にはまだ決めてない。それに暫くは様子を見させてもらう
つもりだ。決まったら知らせてやるからそれまでガキ共のお守りで
もやってろ。ほら、早速何かやらかしてるぞ?』

いつの間にやらアスナと雪広がいつものごとく取っ組み合いをして
いる。ネギはあわあわと慌てふためいているだけだ。

キンコーンカーンコーン

授業が終わった。黒板の内容からほぼ進んでいないことが伺える。

『クククツお前も大変だな。』

『ハアツ…そう思うなら代わってくれ…。』

その言葉に了承の意を示すはずもなくこちらも見ずに手を振り休憩
を取るのであった。

そして未だにあわあわしているネギを連れ、教室を出ようとする際
声をかけられる。

「ねえ、翼先生。ちよつといいかな?」

「朝倉か。どうした?」

「ん、ちよつとね。」

チラリと後ろのネギを伺う朝倉。なるほどな。

「ネギ先生、先に職員室に戻ってくれ。」

「あ、はい。」

言われたままに出て行くネギ。

「で、朝倉。教室の使用許可ならもらってきてやるから皆には準備のほうをよろしくと言っておいてくれ。」

「相変わらず先生には説明を殆どしなくてもお見通しなんだね。準備のほうは任しといて。」

「俺も寮の仕事が終わったら来させてもらっから頼んだぞ。」

オッケーと言い残し皆のほうへ向かい許可が下りたと伝える朝倉。
『おおおっ』と歓声を上げやる気を見せるクラスの皆、そのやる気を勉強にも使えば最下位脱出なんて簡単なものにな…そんなことを思いながら職員室に戻るのであった。

【続く】

第十六話「英雄の子との初会合」(後書き)

誤字脱字、感想もお待ちしております。

第十七話「英雄の子の夢と黒き翼の考え」(前書き)

連投に近い形になります。が、まだネギ襲来初日です。

第十七話「英雄の子の夢と黒き翼の考え」

放課後、寮の仕事を終え歓迎会の手伝いをしようと2・Aの教室へ向かう途中、この時間では感知されないはずの魔力の高まりを感じ広場へと向かう。

すると物語の始まりともいえる場面に出くわした。

途中で合流したタカミチには去っていったネギとアスナのほうを任せ俺はのどかの方へと寄る。

「前にも注意しただろ、あまり無理して一気に本を運ぶなって。今回はネギ先生がいたからよかったが、次はハルナや夕映、もしくは俺を頼れよ、分かったな？」

「は、はい……。」「

「んじゃ、とつとと運ぶか。じゃないと歓迎会に遅れるぞ?」「

散らばっていた本を拾い集めその内の3冊ほどをのどかに手渡す。

「あ、ありがとうございます、翼先生。」「

「気にするなって。それよりお礼なら後でネギ先生にしとくんだな。」「

「は、はい／＼。」「

先程の自分の状況を思い出したのか顔を赤くして歩を進めるのどか。

「惚れたか、のどか？」

「ひゃい！？／＼／」

持ってた本を放り投げるのどか。それを全て持っていた本の上に乗せる。

「はははっ、可愛い反応するじゃないか。」

「からかわないでください。」

真っ赤に顔を染めながら反論するのどかだが

「そういう仕草も可愛いもんだ。お世辞じゃないぞ？のどかはもう少し自分をアピールするべきなんだからハルナや夕映に相談してみな。アイツ等ならお前の力になってくれるから。」

のどかはその言葉に更に顔を赤くし、反応が無くなる。

ハルナは若干冷やかしそうな気がするが二人とも協力してくれるはずだろう。

そんなことをしばらく考えていたがのどかはまだ戻ってこない。そろそろ時間が拙いんじゃないか？

「のどか、早く行くぞ！歓迎会に遅れたらアピールの機会が減るぞ。」

「は、はい。／＼／」

本を図書館島に運び急いで教室に向かう二人。そのおかげで歓迎会が始まる15分前には着いたのだった。

扉を開けると今日の主役を今か今かと待つクラスのほとんどの少女達。そして離れた所にはいつものメンバーであるエヴァ、茶々丸、刹那、マナ、そして壁際にタカミチが居た。

ハルナと夕映にのどから相談があると伝えのどかを二人に預け、壁際のタカミチの方へと寄っていった。

「さっきのアレはやっぱネギが原因か？」

「ええ、まさか初日からバレるとは思いませんでしたよ。それもアスナ君に…。」

少し顔を顰めるタカミチ。まあアスナのことを考えたら無理もないが…。

「お前もいずれはこうなると思っていたんだろ？それが少し早まっただけさ。」

というかその考えを持っていなかったわけじゃないだろうな？と聞いたら冷や汗を流し口元がひくついていた。

「皆ー！ネギ君来たよー準備してー！！」

朝倉の声にバタバタと扉のほうに集まる皆。

ガラッ

「早速実行よ！荷物取ってくるからちよつとそこで…」

パンパンパン！！！！

『ようこそ、ネギ先生ーッ！！！』

「「えっ！？」」

入り口で固まるネギとアスナ。どうやらアスナは魔法を知ったショックで歓迎会のことを忘れてしまってたようだ。

「そうだ、アンタの歓迎会するんだっただ…忘れてた！」

「ほらほら、主役は真ん中」

「さっどうぞ、ネギ先生。」

朝倉と雪広がネギを教室の中央に案内する。そして代わる代わるネギの元へ生徒達が押し寄せる。

俺達はというとタカミチを除いて端のほうでちびちびとやっている。

「しかし、お前ら…新しい先生とは仲良くしとくべきだと思っぞ？」

「憎きサウザンドマスターの息子、それも未熟な餓鬼に興味など湧かんわ。」

「私が興味を抱く男は翼だけだよ。」

「わ、私も…その…／／／」

「モグモグ…翼さん、これもおいしいです。」

エヴァ、マナ、刹那、茶々丸の順に答えていく。

エヴァはナギへの恨みとネギの駄目さ加減から拒否。マナはおそらくいつもの冗談だろうが興味なし、と。刹那は顔を赤くし声は小さくて聞こえないがネギには興味を示していないようだ。そして茶々丸は昼休みに五月と合作で作った料理を食べ続けている。

茶々丸の味覚は、昨晚学園結界を構築しなおした後で麻帆良大学工学部に行き、葉加瀬と超に協力してもらい機能を追加した。

その際に当然の如く技術や理論についてしつこく聞かれたが、正直に話せるないようでもなかったので今度実験に協力することを条件に追及を逃れた。

「翼先生。」

ようやく生徒達から解放されたネギがやってくる。

「ネギ先生、まずは一日目お疲れ様。それと授業中や他の先生が居る場合を除いて俺には”先生”とつけないで気軽に呼んでくれないか？」

「分かりました、じゃあ翼さんと呼びますね。翼さん、ちょっと話があるのですがいいですか？」

チラリと俺の周りに居たエヴァ達を見る。なるほど、魔法系そっちの話か。

「廊下で話そうか？みんな、ちょっとネギを借りるぞ。10分くらいで戻るからあまり騒ぎすぎるなよ？」

興味深そうにこちらを見る視線がちらほらと見える。…コイツ等、隠れてついてくる気か…。

廊下に出て教室の扉を閉め、すぐさまネギのスーツの首の部分を持ち上げダッシュで屋上へと向かう。ネギが何か言っている気がするが無視だ。

「ちいつ、逃げられたか…。流石は翼じゃん。」

朝倉を筆頭に覗き見をしようとした数人は暫く辺りを探すのであった。

屋上に着き鍵を閉めてようやくネギをおろした。

「さて、ここなら皆に聞かれることも無い。で、話とは何だ？」

「はい…その、実は……ある生徒に魔法のことがバレてしまいました！どうすればいいですか、翼さん！？」

「ネギ……。」

「は、はい！」

俺の答えを期待しているのだろう、だがお前にはまずこのセリフを送ろう。

「短い付き合いだったな。」

「み、見捨てられた！？」

あまりの答えにショックが大きすぎたのか、その目には涙が溜まっている。

「とまあ冗談はおいといて真面目に質問するぞ。ネギ、魔法でのご…宮崎を救ったことを後悔しているか？」

ネギの目を真つ直ぐに見据えて問う。

命よりも魔法の秘匿を優先するべきであるかどうか。

「僕は…見習いの身ですけど、魔法使いとして間違っていないと思います。だから、宮崎さんを救ったことは後悔していません！」

その答えに満足し、ネギの頭を撫でる。

「それでいい。ならばはバレたつていう生徒に話を広げないように頼むんだな。自分の誠意をきちんと相手に示せばその生徒もきっと分かってくれるはずさ。」

アスナなら面倒くさがるだろうが面倒見もいいし、やってくれるだろう。

なら最後にこれを伝えるか。

「ネギ、今から言うのは俺の考えであつてキミに押し付ける気は無いが覚えておいてくれ。魔法とは力だ。そんな力を持っているなら万人を救いたいと思うだろうが、一人の力で出来ることは限られているのだからその考えは間違いだと思う。だからただ闇雲に立派マギな魔法使いを目指すというのならキミの夢は応援できない。」

「立派な魔法使いを目指すことの何がいけないんですか!？」
マギステル・マギ

ネギは声を荒げ食って掛かってくる。

まあそれも当然か。自分の目標を否定されたのだからな。

だが勘違いはしないでほしいな。

「あくまで闇雲に目指すなと言っているだけだ。自分の中で答えを見つけ、その上で目指すことには反対する理由が無い。それに結局はお前の人生だ、俺なんかとやかく言うべきことじゃないのは分かっている。だがアドバイスはさせてもらっし、お前にはそれも一つの答えであるものとして聞いてほしい。それを踏まえた上で答えを見つけてほしいからだ。」

「翼さん…。」

「これで納得できないなら学園長に言って魔法の指導教員を変えてもらえ、俺は寮の仕事があるから帰らせてもらう。お前もそろそろ戻るといい。」

これでネギが俺を否定したらこれからのサポートがやり辛くなるな…。だがいずれは話すことだ、早いほうがいいだろう。

ポケットから携帯電話を取り出し番号を押す。数回の呼び出し音の後に目的の人物が出る。

「俺だ、そっちはどうだった？…そうか、爺さんはちゃんと説得させたか。だがまだ納得していない奴等が数人いるのか…分かった、なら明日からはこっちの手伝いをしてもらう。何、人使いが荒いだとか？お前は人じゃないだろうが。ツ電話で騒ぐな！耳がキンキンする！…仕方ない、三日間休みをやる。学園の中でなら好きにしているが、ちゃんと認識阻害の符は付けていけよ。仕事の内容についてはまたメールする、頼んだぞ。」

携帯電話を閉じ、寮へと向かう。どうなるかはネギの答え次第だ。

） SIDE ??? ）

「よいな、翼君やエヴァンジェリン達にこれ以上手を出すことはまかりならんぞ。どうしてもやるといふのなら相応の覚悟をしておくことじゃな。」

「学園長！あなたは悪をのさばらすつもりですか！？」

数人の男が学園長に食って掛かるが学園長は一睨みでそれを押さえ込んだ。

「彼がここでお主達に何かしたことがあったか？エヴァンジェリンが封印を解かれてから問題となるような悪事を働いたか？何も無いだろう。お主達は一度自分自身を見つめ直すがいい。以上じゃ、皆それぞれの仕事に戻るのじゃ。」

集まった者の中で、ある者は考え、またある者は不満をあらわにし学園長室を去る。

「やれやれ…まだ納得できない者達がおるのか…む？」

窓の外から視線を感じた学園長が目を向けると、そこには猫が一匹いるだけだった。猫はトコトコと歩きその場を離れていった

「はて、気のせいかなのう？」

.....

.....

.....

.....

胸に猫のアプリケがついているパーカーを着込み、フードをかぶった少女が森の中を歩いている。

「フニヤー、さっきは危なかったニヤ。もう少しでバレるところだったのニヤ。」

後に学園長は語ることになる。

あれからは何の力も感じられなかった、まさか……だったとはのう……と。

『ピリリリリリッ』

突然の電子音に少女は驚きながらもポケットからその音を発している物を取り出す。

「相変わらずこの音には慣れないニヤ……。ムー……確かこのボタンだったニヤ。なんニヤ？あ、おまいか。あのお爺さんちゃんと説得してたニヤ、でも何人か不満を言ったりしてたみたいニヤ。………ニヤ！？（明日は教会でアンテナつけた人間が美味しいご飯をくれる日ニヤ。）いやニヤ、おまいは人使いが荒いニヤ！横暴ニヤ！横暴ニヤ！！横暴ニヤ！！……ニヤ、ニヤ♪、分かったニヤ♪、じゃあニヤ。」

慣れない手つきでボタンを押し電話を切る。

「やったニヤ、思わぬ休みがもらえたニヤ♪そうと決まったら風香と史伽と遊ぶニヤ。」

{
SIDE
END
}

【続く】

第十七話「英雄の子の夢と黒き翼の考え」(後書き)

最後の SIDE は一体誰なのでしょう？

まあ特徴のあるキャラなので態々???と書かなくてもよかったの
かもしれないのですが…；

第十八話「学園生活」その1 惚れ薬編」（前書き）

今回の話は短めです。なのに難産でした。

今、2作品手がけているのですが、どちらも終わっていないというのに3作品目のネタとか考えてしまう事実。

載せるとしてもまだ先なのに手が止められない現状ですが、この小説をメインとして頑張って作成したいと思います。

第十八話「学園生活　～その1　惚れ薬編～」

森の中を魔力と気配を極力絶ちながら駆け抜ける。

「どうして俺が巻き込まれる…。」

少し離れた所から数人の魔力と気配を感じ取り、近くの木に登り魔力を断ち気配を消す。

「まさかこんな形でおぼろ丸のスキルを使用することになるとはな。

」

話は1時間ほど遡る。

「翼さん、今日はコレを飲んでもらっネ。」

超が差し出すのはフラスコに入った透明な液体。どうみても怪しさ満点です。

「実験には協力するといった手前拒否はしないが、せめて何の実験なのか教えてもらえんかな？」

「飲んだら教えるネ。安心するネ、体に害はないことは証明するヨ。」

超の笑みから嫌な予感がプンプンするが害はないと言っているんだ、飲むしかないだろう。

……

「特に変な味がするってわけでもないな。（この魔力残滓が気になるが…。）で、これは何なんだ？」

超の笑みが一層増す。どうでもいいがその笑い方、悪役っぽいぞ。

「私もよく分からなかつたがネギ坊主から拝借した物とだけ言っておくヨ。惚れ薬がどうか言てたが本当かどうか怪しいネ。」

その言葉に戦慄する。

「な、んだと！？超、図つたな！」

「何のことだか分からないが、私に構ててよいの力？」

超は笑みを浮かべたまま後ろを指差す。

ダダダダダダダッ！！！！

後方からこちらに走ってくる音が聞こえる、それも複数……というより大勢と表現したほうがいいのかもしれない。

『翼先生！？』

聞こえてくる声に後ろを振り向かず勢いよく駆け出した。

「超！後で覚えておけよ！！」

捨て台詞のようなものを残しその場を後にする。

「……師父、自分への想いには気づかないと駄目ネ。これがその一歩となればヨイのだガ……。」

その言葉が翼に届くことはなかった。

学園内を走りながら翼は考える、この状況をから逃げ切る策を。

「とは言ってもどこかに隠れるしかないのだが。さて、どこがある？」

このまま学園内…ここは女子校、それに刀子さんやシャークティさんに見つかったら危険な予感がするため却下。

寮…同上の理由と逃げ場がないこと、そして嫌な予感がするため却下。

………

………

…

「そつだエヴァの家！」

封印が解けた今のエヴァなら魔力に対する抵抗力も高いだらうし、茶々丸もガイノイドだから大丈夫だらう。

行き先も決まつたところで一気に追つ手を引き離す。そして森の中へ入りかなりの距離をとつたところで気配を忍ばせる。

「ふう、どうやら撒けたようだな。早いところエヴァの家に行ったほうがよさそうだな。」

エヴァの家は森の奥にあるため殆どの生徒は立ち寄らない。

が、稀に魔法先生、生徒がエヴァの様子を伺つてくるため今の状態が見つかったら面倒なことになりかねない。

その為多少遠回りをしてエヴァの家へと向かつた。

「つ・ば・さ・さん？」

「なあエヴァ、茶々丸の様子が少し、いや明らかにおかしいんだが……。」

茶々丸に迎えられてエヴァの家に入ったのだが、いきなり抱きつかれてさあ大変……。離そうとすると涙（後で聞いたらレンズ洗浄液だったのだが……。）を浮かべてくるので離すことができない。

ソファに座っているエヴァに話しかけるが

「お前ら、玄関で一体何やって……ん？翼、魅了チャームの魔法なんぞかけてどうしたんだ？」

冷静に返されてしまった。

翼にとって茶々丸のことは予想外だったが、エヴァについては予想通りだったので自分の身に起こったことを話す。

「坊やめ、おもし…要らんことをしてくれたな。」

「コラ待て。お前今なんて言いかけた？『面白い』って言おうとしただろ！？」

「それにしても茶々丸の心がここまで成長していたとはな。嬉しい誤算というか何というか。ん…待てよ？」

エヴァの目が怪しく光り、口の端がニヤリとあがる。肉食獣のようなそれに思わず後ずさってしまう。

「構わん茶々丸、一気にやってしまえ！私も続く！！」

「やっぱりか！茶々丸、ズマン！！」

翼は茶々丸の腕を振り解き玄関から飛び出る。その際、この事態を招いたエヴァには報復として、予めお仕置き用に用意しておいたニンニクと葱のエキスをたっぷりと搾り出して作ったゼリーを口へと放り込んだ。

「○ □ ♀ # Σ！？！？」

エヴァは声にならない悲鳴を上げ卒倒した。

エヴァが倒れたので茶々丸もどうにかなるかと思ったのだが

「早々上手くはいかんか…。」

今の茶々丸にとって翼はエヴァよりも優先度が高くされてしまっているらしく、茶々丸はエヴァをガン無視して追ってきた。

このまま薬の効果が切れるまで森の中で逃げ回るか、と考えた翼だったが彼に更なる女難が降りかかる。

「翼、こんな所で何を…お前のハートを撃ち抜こう！」

出会いがしらに両足と胸に向かってゴム弾が飛んでくる。寸でのところで回避することが出来たが急激な回避のせいで軸足を軽く捻ってしまった。

「マナ！ゴム弾とはいえこの距離だったら軽い怪我じゃすまないぞ！！それにハートと言っておきながら足まで狙うな！」

避けた先で今度は気の籠った一撃が振り下ろされる。身を振って避けると予想通りというべきか、そこには刹那がいた。

「翼さん、私の全てを貰ってください！！」

「貰ってって斬撃まで貰えと！？」

いつの間にか追いついてきた茶々丸も含めて、翼は三方から囲まれてしまった。

三人は少しずつ囲いを狭めてくる。

「（この足では効果が切れるまで逃げ切るのは難しいな。）なら、

この場をどうにかして脱し、身を潜めるしかないな。」

『翼^{さん}！（お）覚悟^を！！』

三者三様にそれぞれが同時に襲い掛かる。

マナは機動力を封じようと足を狙い撃ち、茶々丸は動きを封じようとロケットパンチで腕を取ろうとし、刹那は意識を断とうと夕凧を振り下ろす。

一瞬早く接近した刹那の腕を掴み茶々丸の伸ばした腕へと押しやり、マナの目の前で魔力を小規模に破裂させ、そのままマナの上を飛び越え走り去る。

すぐに体勢を立て直した3人はまた追ってくるがその距離は少し離れていた。

ここで冒頭へと繋がる。距離を離れた隙に木に登り魔力と気配を断ち周囲に溶け込ませる。

おぼろ丸が隠れ蓑を使ったとき、敵に発見されることはない。

翼は隠れ蓑を使っているわけではないが（というかどんな背景にで

もなれる隠れ蓑なんてありえないだろう…）、それとほぼ同等のスキルとして使用しているので発見されることは殆どない。

これは大戦の頃から続いていて、唯一見つかったのはナギだけだ。

そのナギも勘でしか発見できていなかったなので正確にはちゃんと発見されたことは無いのだが、その的中率はバグキャラであると思うわせるほどの高さだった。

程なくして3人がやってくる。

翼自身、今までの経験から自分が発見されることは無いだろうとタカをくくっていたが、一人の存在によって呆気なく崩れてしまうのであった。

「サーモ熱量捕捉。ターゲット標的確認。」

声とともに飛んできた腕に足をつかまれる。

眼下を覗くと茶々丸と目が合った。

「何故バレた！ハッ！？忍者のスキルも科学の前には形無しだったというわけか！！？」

冷静に解析している暇があれば逃げればいいのだがあまりにもあっさりで見つけられてしまったために翼の頭からはそのことが抜け落ちてしまっていた。

そのせいで木から引きずり落とされ、瞬く間に周りを3人に囲まれてしまった。

マナが右、茶々丸が左、そして刹那が正面からそれぞれ翼に抱きつく形になった。

引き剥がそうにも三方から抱きつかれては身動きもとれず暫く理性と戦う羽目になってしまった翼であった。

とはいっても数分で薬の効果が切れたため何事もなかったが、後日ネギにはしっかりと説教をしておいた。

あと、ついでに朝倉も今回の事故を新聞部のネタとして大々的に報じたことで個人的な宿題をいつもより多めに与えておいた。

余談として、正氣に戻ってすぐに刹那は顔を真つ赤にして逃げ出した。マナはそのままの体制で抱きつき続け、茶々丸は腕からは離れたものの手を離すことはなかった。

その数日後、今回の事故の詫びとして3人とはそれぞれ出かけることにし、また朝倉に報じられることになるのだがそれはまた後の話になる。

【続く】

第十八話「学園生活」その1 惚れ薬編」(後書き)

惚れ薬の影響で翼に心境の変化はあったのか？

感想、誤字・脱字報告、アドバイス、要望などお待ちします。

第十九話「子供先生の最終課題」（前書き）

タイトルの縛りが思いつかないため、タイトルに自由度をあげることにしました。

以前の話のタイトルも順次入れ替えていく予定です。

第十九話「子供先生の最終課題」

「…それはアンタの仕事だろう？それで、ネギの課題には何をさせる予定なんだ？」

仕事も終わり、寮へと戻ろうとしたところで学園長に放送で呼ばれて何事かと来てみれば、何故俺がネギの課題を考えなければならぬんだ？

「そりゃあお主がワシの考えておった課題をクリアしてしまうからじゃ。」

爺さんの言う課題とはおそらく2-Aの試験最下位脱出のことだろうが…。

「阿呆か、爺さん。そんなんでよく学園長の職についているな。教師という以上、生徒の学力向上も果たさなきゃならないだろうが。他の魔法教師どもに問いたいな、ちゃんと教員試験を通ってきたのかを。…まさかな、爺さん…。」

言葉を切り、裏暗黒魔闘術で創り出した抜き身の夕風を相応の殺気を込めて学園長の首にあてがう。

「…まさかとは思うが教員免許を持っていない奴を教師にしているんだらうな？」

「HA HA HA。そ、そんなわけないじゃろうが…。（本当は雇うべきか迷っているものがいたんじゃが、教職では無理っぽい。）」

そのとき何か思いついたのだろう、口を『オッ』と開けて手をポンと叩く。

「そうじゃ、ネギ君への課題は教員の中での学力テストの四十位以内と2・Aの試験順位七位以内、この二つをしてもらおうかの。これならお主の言ったネギ君の指導能力と彼を含めた教職員の能力、どちらもはつきりするからのう。」

学園長の言葉に夕凧を魔力へと戻し少し考え込む。学園長の首に軽く血が滲んでいるのはご愛敬だ。

そして、納得がいったのかその顔には笑みを浮かべる。

「なかなか良い課題じゃないか。確かにそれなら両方を一度に確認できる。」

まあ魔法使いとしての課題としてはどうかと思うがそこはこれから次第らしい。

「翼君も納得したところで「ただ…評価が甘い。」ヒョッ、どういうことじゃ?」

「ネギへの評価が甘いと言ったんだ。教員のテスト二十位以内、試験順位五位以内、これくらいはやってもらわないとな。」

「そ、それは少し厳しすぎんかのう?せめて教員のテストのほうをもう少し大目に見てもらわんと彼はまだ数えて十歳じゃし…。」

「そんなのを教師として修行させるのが問題だろうに…。ならば教

員のテストは爺さんの言うとおりにする代わりに試験順位三位以内と上げさせてもらう。」

学園長は汗を流しながらどちらがネギにとって有利になるかを考え込む。

麻帆良女子中の教員のうちの二割ほどは魔法教師、ここからネギが二十位以内を取る確率はかなり低い。

それならば多少問題があるが現実味のある後の案を選んだほうがマシであるといえる。

尤も、後の案の問題点も多少といったがそこそこに大きな問題だ。

その問題に対応するためにも、まずは目の前の男を説得させないとならない。

「のう翼君、お主は2・Aの副担任じゃから生徒への試験勉強は手伝ってくれるかの？」

「それは勿論手伝うさ。だが同時に数学は俺の受け持つクラス全部に対して手伝いをするぞ？」

受け持ちのクラスと質問に来た生徒についてはきちんと対応しないとな。

「それは構わんぞい。ワシが危惧しておったのは、お主が試験だからといってネギ君のサポートを全くしないということじゃったからのう。」

「何を言っているんだか爺さん。最初に約束しただろう、俺なりのやり方ではあるがネギのサポートはやる…と。余程のことでない限り例外はない。」

翼の言葉にホッと一安心する学園長、だがそれもつかの間で

「そんなことを心配するより、自分のことを心配したらどうだ？」

翼の言葉を理解したのか学園長は冷や汗をダラダラと流す。

「……………ま、まさかとは思うが、ワシも？」

「当然。こんな巨大な学園の長を務めるんだ、最低でも十五位以内には入ってもらわないとな。まあありえないとは思うが、達成できない場合は…。」

手を首のところに持っていき、切るように横に振る。

「つ、翼君、悪いがネギ君にこれを渡してくれんかの。ワシは用事を思い出したからしばらく留守にするぞい。」

逃げるように立ち去る学園長。その手にはノートと筆ペンがしっかりと握られていた。

「ネギ、学園長からの最終課題だ。」

「さ、最終課題、ですか…。」

余程のことを想像しているのだろう、かなりアタフタと挙動不審になり手紙を持つ手が小刻みに震えている。

封を開け中身を確認するネギ。

「……………な、なーんだ、思ったよりも簡単そうじゃないですか！。てつきり龍退治とかかと…。」

「ほう、思ったよりも簡単か。本当にそうなるか楽しみだ。」

「こ、怖いこと言わないでくださいよ翼さん。」

「まあとりあえず、これでも見て現状を認識しておくことだ。俺は寮の仕事があるから先に戻るからHRは任せたぞ。」

2 - Aの前回の成績表と他クラスの平均の成績をグラフにしたものを手渡す。それを見てネギは若干青い顔をしているが、そんなことは無視して翼は寮へと向かっていった。

〕 SIDE ネギ 〕

翼さんから渡された成績表を見て顔からは嫌な汗がダラダラと流れ

てくるのを感じた。

「ウチのクラスって前々回まで再下位だったんですか!？」

「そうやえ〜。」

「うわっ!このかさん、びっくりさせないで下さい。」

「ごめんな〜ネギ君。そんな驚くとは思わなかったわ。」

このかさんは手を合わせコロコロ笑いながら謝ってくる。

「ほんでネギ君、何見とるん？」

「な、なんでもないですよ。『キンコーンカーンコーン』あ、鐘が鳴りましたし教室に入ってください。」

は〜、助かった。それにしても前々回までは最下位だったのか…よし、今日のHRは大・勉強会をしよう!

「えーつと皆さん、聞いてください!期末テストがすぐそこに迫ってきているので、今日のHRは大・勉強会を行いたいと思います
!」

ガヤガヤと騒ぎ出す生徒の皆さん。

「あのっそのっ、今回はいつも以上に頑張ってもらわないと大変なことになるのでー（僕がですが…）、皆さん頑張って勉強してくださいー。」

「ネギ先生、提案提案」

「何でしょう、桜子さん？」

「では！お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！ー！」

英単語野球拳…^{ベースボール}か。野球を取り入れた勉強法なのかな？それなら大人数でやれるだろうし、皆さんも積極的に賛同してくれているみたいだし……。

「やりましょうー！」

「ちょ、アンタ意味わかってないでしょー！ー！」

「アスナ、アンタも早くこっち来なって。」

「いーやー！ー！ー！」

アスナさんは朝倉さんに連れていかれた。

皆さんが離れたことでもう一度翼さんから渡された成績表を見る。

学年トップ級の三人や数人を除いて、他の人達もそんなに平均点は

良くないみたいだけど…。アスナさん、綾瀬さん、古菲さん、佐々木さん、長瀬さんはその中でも悪い方だな。

翼さんが来てからの点数の伸びが一番いいのもこの五人だけどそれでもまだ点数は高くない。

どうやればもつと点数がとれるか出来れば一度翼さんと相談して方針を決めよう。よし、頑張るぞ！

ポフッ

「ん？」

なんだろこの布…！？！？こ、これって！？

振り向いて見た光景は正に力オスだった。少し目を離していただけでアスナさん達五人があられもない格好をしている。

「な、何やってるんですかー！？」

「何ってホラ、答えられなかった人が脱いでいくんだよ。野球拳なんだから当然じゃん。」

桜子さんが問題の書かれた紙を持って楽しげに言う。

周りの人達も数人を除き、楽しげにアスナさん達に更に問題を出している。

「（な、なんてのんきな人達なんだーっ！）」

僕の頭に『強制帰国』、『ダメ先生』、『落ちこぼれ魔法使い』という単語が次々と思い浮かぶ。

「ハッ…そうだ、三日間だけだけど、とても頭がよくなる禁断の魔法があつたんだ。それを使えば…。」

メルディアナ魔法学校の禁書に載っていた魔法のひとつだ。

「副作用で一カ月ほどパーになるけど…仕方がない！ラス・テルマ・スキル…」

「待たんかーい！！」

スナップの利いたハリセンで頭を叩かれた。ア、アスナさん、いつの間にそんなものを…ワツ引つ張らないでください。」

教室からかなり離れた廊下でようやくアスナさんは手を離してくれた。

「いきなり何するんですかアスナさん…。」

「それはこっちのセリフよ！アンタねえ、惚れ薬は作るわ、ドツジでも無茶するわ…いい加減魔法に頼るのやめなさいよっ！そもそも魔法がばれたら即帰国なんでしょ！？無闇に使いすぎよこのへボ魔法使いー！」

アスナさんが次々とまくし立ててくる。でも…このままだったら僕、マギステル・マギ先生になれないかもしれないし…そうしたら立派な魔法使いにも…。

「それにね、そのマギ…何とかを目指すために修行しているとかな

つていたけど、そんな中途半端な気持ちで先生やってる奴が担任だなんて教えられる生徒だって迷惑だと思うよ。」

「!」

アスナさんは教室に戻っていったけど、僕は暫くその場を動けなかった。

そうだ、タカミチも翼さんも魔法使いだけど、魔法を使わずにちゃんと先生の仕事をやっている。

なら僕だってちゃんとやらないと。僕だって先生なんだから!

） SIDE END ）

「!どうやらネギは魔力を封印したようだな。」

「へえ、思い切ったことをやったようだねネギ先生は。それにしても翼はよく分かったね。」

マナは問題を全て解いたのか、ペンを回しながら答える。

「でも、一時はどうなることかと思いましたよ。副作用で一ヶ月もパーになるなんて...」

刹那は教科書と睨めっこしながら答えてくるが、鉛筆を持つその手は動いていない。

「刹那はかけてもらったほうがよかったんじゃないかな。確か前回の小テストはあまりよくなかったよね？」

マナはククツと笑いながら刹那を見る。同居人ということもありその原因も分かっているようだ。

前回の小テスト、それは奇しくも惚れ薬騒動の翌日のことだった。

「確かに…刹那ならもう少し点を取れたと思ったんだがな。何があったか知っているんだろう、マナ。」

「まあ、ね。刹那からは口止めされてるし、翼にも関係することなんだから自分で考えてよね。」

あの日から数日間、刹那に近づく度に顔を赤くし脱兎の如く逃げられた。話そうとする度に逃げられる、少し落ち込んだぞ？

「関係するとすれば惚れ薬騒動なんだが、…怒っていたのか？」

「いい線いくようだから期待したけど、私の期待を返してくれ。」

マナの溜め息の理由が分からず夜は更けていくのだった。

その頃、風呂場にいた不名誉な称号を持つ五人組はこのかから聞いた噂を回避すべく、夕映から聞いた魔法の本を手に入れようという

話になっていた。

「問題は翼にいな…。夜の内にパツと本を取ってきて戻らないと…」

「そやなあ。翼にいいついうこと嫌いやからなあ…」

「今回は時間も無いことですし、一度目の見回りが終わる夜十時に決行します。」

『いざ、図書館島へッ！…！』

） S I D E ??? ）

「（翼にいが見回りに行ったわ、行くわよみんな！）」

『（おおおおっ！）』

アスナを筆頭に静かに一致団結し、アスナ達は寮をあとにする。

静まり返った寮の中、

ガチャリ

翼の部屋が開く。中から頭をヒョコツと出したのは以前森で誰かと電話をしていたフードの少女だった。

「まんまと引つかかったのニヤ」

ポケットの中をゴソゴソと探し携帯電話とメモ帳を取り出す。

「やっぱり…この、携帯電話ってやつは、使いにくいニヤ！」

手が肉球である少女はかなり手こずって携帯のボタンを押していく。

最後に通話ボタンを押し数回の電子音の後、目的の人物が出た。

＼ SIDE OUT 〉

「もしもし。」

『ツバサ、ターゲットは予定通りそっちに向かったニヤ。』

「電話の場合は要件を言う前に名乗れと言っただろう…。まあいい、ご苦労だった。明日はお前の好きなおかず一品増やしてやる。今日はもう遅いから早めに寝ておけよ。」

電話を切る前にやったニヤと聞こえる。

「さて、先に潜るとするか。」

翼は図書館島の扉を開けその中へと入っていった。

） SIDE アスナ ）

図書館らしからぬトラップや難所を潜り抜けて、漸く魔法の本が置かれていた部屋に着いた。

「着いたです、ここが魔法の本の安置室です。」

「ラスボスの間アルー！」

「ここまで来る途中でもありえなかったけど、ここって本当に学校の図書館なの!?」

トラップとか本棚の崖とか滝とか、ありえないでしょ!?

「あ、あの本は……………で、伝説の『メルキセデクの書』っ!?!ど
うしてこんな島国に!?!?」

ネギが驚き大声を出す。

「え?て、てことは何?それじゃあの本、本当に魔法の本ってこと
!?!」

アタシは事態が飲み込めず、目を白黒させながらネギに問い掛ける。

「ほ、ホンモノも何もっ、あれはボクの知る中でも最高位の魔法書
です!た、確かにあの本なら、一時的に頭を良くするくらい簡単
かも……………」

「本当に!?!だったら早く取りに行くわよ!」

やったーっ。これで赤点を取って小学生からやり直したなんて
ことにはならないわ!!

本に向かって駆け出す。

「何を取りに行くって?」

ちよつと、何話の腰をおろうとしてんのよ……………あれ?この声、ど
こかで…?

「決まってるじゃない。あの本、を……………」

いつの間に横にいたのだろうか、そこには今このときには一番会い

たくない人物がいた。

「つ、つつ、つ、翼にい!?!?!?」

「こんな時間のこんな場所に何の用だ?」

「え、えゝつと…そ、そう、図書館探検部の図書館島探s「嘘をつくとボーダーを80点にするぞ?」魔法の本を取りに来ました、サ
ー!」

姿勢を正し敬礼をして答える。しょうがないじゃない!八十点なんて今からじゃ絶対に不可能なんだからっ!!

「魔法の本、ね。こんな図書館があるくらいだからそんな本があつてもおかしくないが、何故普通に勉強しない?ネギに泣きつかれたか?」

「えっ…なんでネギが関係するの?アタシ達はただ、今度の期末テストで平均点五十点をきる場合小学生からやり直させるっていう噂をこのかから聞いたから…。」

「このか、その噂の発生源はもしかして?」

「ウン、おじいちゃんやえ。」

「そんな噂を信じるな。いくらここが常識外れな学園でその長が常識外れで人外だとしても、そんなことは出来ないしさせない。」

そう言った翼には今まで見た中で一番怒っていた。

「だからお前ら、その直送エレベータで上に戻って今日はもう寝る。説教と勉強は明日からだ。」

噂はデマだったの！？だったらこんな事しなきゃよかった！あー
ーっもう、やっぱりこのガキンちよが来てからふんだりけったりよ。

この後に待ち受けている翼にいの説教に頭を痛めながらアタシ達はエレベータで戻っていった。

） SIDE OUT ）

） SIDE 翼 ）

「このか、その噂の発生源はもしかして？」

「ウン、おじいちゃんやえ。」

そうか、そんな手でくるのか…。

魔法書の横に立っている二体の石像を睨む。魔法書の魔力のせいで感知しにくいがよく知る人物の魔力を感じる。

「そんな噂を信じるな。いくらここが常識外れな学園でその長が人外だとしても、そんなことは出来ないしさせない。」

本気でそんなことをするようなら辞任させてやる。

「だからお前ら、その直送エレベータで上に戻って今日はもう寝

る。説教と勉強は明日からだ。」

特にネギ、お前がな。

俺の言葉にアスナ達はエレベータへと向かっていく。綾瀬と佐々木は若干不満げだったがアスナとこのかの説得により渋々とだが引き上げていった。

さてこれで一応魔法の秘匿という名目は守ったわけだし、こっちのOHANASHIという名のお仕置きを始めるとするか。

石像へと向き直り、怒気をこめて口を開く。

「さて、と…その石像、何か弁明はあるか？」

ギクウツと石像が震える。ごく丁寧に冷や汗まで流している。

「……………」

そこまで大きなアクションをとったのに石像は何も答えない。

いい度胸しているじゃないか…。

「あくまで石像の振りを決め込むつもりか。……………ボーダーを五位以内にして詠春に今回の件を伝えるぞ？」

「スマンかったー！！！！じゃからそれだけは勘弁してくれんかー！！！！」

二体の内の一体の石像が持っていた武器を投げ捨て土下座する、か

なりシユールな絵だ。

「よし、なら理由を話せ。嘘偽りがあつた場合は勿論だが、あまりにも納得できないような理由だった場合も覚悟しておけよ。そしてそのもう一体！お前の魔力も覚えているぞ、アルビレオ・イマ。」

「…やれやれ。学園長、だから止めておいたほうがいいと私は言っただしょう？」

石像からローブを着た男が出てくる。

「京都旅行以来だなアル、いや、クウネル・サンダースのほうがいいのか？」

「大体十余年ぶりになりますね翼。今はクウネルと呼んでください。」

やれやれ、コイツも相変わらずのようだな。

「お前には色々と聞きたいことがあるが…どうせまともに答える気はないんだろ？」

「よくお分かりで。ですが偶のお茶会ならご招待しましょう。」

そう言うとき懐から取り出した紙に何やら書いて手渡してきた。

「私が居る部屋に来るための通行証のようなものです。部屋の前にいる子に見せてください。」

「分かった、手土産はケ。タツキーでいいか？」

「とある番組でやったランキングのものをお願いしますよ?」

それでは、と言いきり残しクウネルは消えた。

「さて爺さん、OHANASHIしようか?」

「嫌じゃ~~~~~っ!!!」

） SIDE OUT ）

翌日、図書館島へ侵入した者達 + ネギを放課後残らせた。

「深夜徘徊、そして禁止区域への侵入でそれぞれ反省文十枚、ネギに関しては反省文二十枚。期末試験が終わってから提出するように。」

そう露骨に嫌な顔をするな、アスナ。これでもかなり減らしたほうだぞ?

ちなみに爺さんにはしっかりと反省してもらったために百枚 + 試験順位十位に繰上げをしておいた。

「さてアスナ、あんなズルをしようと思わなくなるくらい勉強しようか?」

「お、お手柔らかに...。」

アスナは引きつつた笑みを浮かべている。

「勿論お前らもだぞ?」

『は、はい…。』

「このかと宮崎はもうそろそろ追加で二人が来て手が足りなくなるだろうからその分の補助をやってくれ。」

「わかったえ〜。」

コンコン、ガチャ

「失礼します、翼さ…失礼しました。」

ドアを開けた途端引き返そうとする刹那、だがそんなことは予想済みだ。

「何をしてるんだ刹那。早く入ったらどうだい?」

マナが刹那の背中を押し部屋へと入れる。

「ナイスだマナ。と、いうことで二人が来たことだし始めるか。」

それからの二日という時間はあっという間に過ぎた。

学校にいる間はネギは英語を中心に空いた時間を利用して翼の個人授業を受け、寮に戻ってからはアスナ達五人を集中的に教え深夜にまで及んだ。

刹那は終始困惑していたが、少しは肩の力を抜けと説得しても多少の硬さは残っていたが、若干嬉しそうに見えた。

そして試験の結果は2 - Aは堂々の一位、教員テストのほうは十位、文句なしの合格だった。

因みにネギと一点差で規定の順位を満たせなかった学園長は翼から更なる折檻を受けることになるのだがそれは本筋とは関係の無い話である。

第十九話「子供先生の最終課題」(後書き)

次回から新学期に突入したいと思います。

第二十話「とある春休みの災難」(前書き)

感想にて不定期更新過ぎると指摘がありましたので、メインであるこっちの小説を重点的に書いていく予定です。

なので、これからはできるだけ早めに更新していきたいと思います。

第二十話「とある春休みの災難」

春休み某日、本日の警備の仕事を終えた褐色肌の少女　龍宮マナは、ルームメートでよくコンビを組む桜咲刹那と帰宅途中だった。

「なあ龍宮、翼さんだが一月に一回必ず2、3日居なくなるときがあるんだが知ってるか？」

「ああ、それならさつき学園長を問いただしたよ。外交にも関わっているからと詳しくは教えてくれなかったが、脅s…頼み込んだら快く教えてくれたよ。」

マナはいい笑顔で答える。その頃学園長室では一人の老人が机に伏していた。

「魔法世界あっちのでの用事なんだとさ。何でも麻帆良こゝに来たときの最初の契約で翼から言われていたことらしい。けど、今更どうしてそんなことを聞くんだ、刹那？」

刹那は制服のポケットから便箋を取り出す。

「一昨日、翼さんの部屋を掃除していたときに見つけたもので、勝手に見るのは少し躊躇ったのだが…。」

そう言っ中から手紙を出す。

魔法世界からの手紙だったらしく映像つきで再生される。

『久しぶりじゃな翼、息災であるか？妾のほうは元気じゃ。またお

主に仕事の依頼があるのじゃが、旧オスティアの地方で龍樹が原因不明の暴走をしておつてな、調査と万一の場合は鎮圧をしてもらいたいのじゃ。そっちは今春休みという休み期間なんじゃろ？なら早めに来て解決したらまたお忍びで街を散策するのじゃ。おおそうじや、今度は簪というものが欲しいのじゃ。では待っておるからの」

「刹那…誰だい、翼に妙に馴れ馴れしい女は？」

「さあ？でも学園長を脅は…聞けば教えてくれるんじゃないか？」

各々の武器を取り出し踵を返し学園長をシメてこようと思ったそのとき、マナの鞆から着信音が鳴り響いた。

この一本の電話により学園長は救われることになるのだった。

「はい龍宮だが、どうした茶々丸？」

『夜分遅くすみません龍宮さん。貴女が若しくは桜咲さんに一つ頼みがあるのですがよろしいでしょうか？』

「仕事の依頼かい？それなら多少の割引はさせてもらうが…？」

『いえ、私のことではなく、翼さんのことです。』

「翼の？詳しく話を聞こうか。」

「茶々丸さんが言っていたのはこのボストンバッグだよな。」

「ああ、そうだろうな。他にそれらしい物も見つからなかったし…。ああやっぱり美味しいな、このあんみつは♪」

「って龍宮！お前はどこを探しているんだ！！」

マナの手にはあんみつの皿が握られていた。

「どこって色々だよ。刹那の羊羹も冷えていたよ。食べるだろ？」

「……………食べる。」

言いたい事が沢山あったのだが、自分のために用意されているものを前にするとそれもどこかへ吹っ飛んでしまった刹那であった。

「で、刹那。お前も来るのか？荷物運びくらい私一人でも十分だと

思うか？」

「お嬢様もご実家に帰られたから警護は長から連絡があり次第復帰することになっているし、お前と翼さんと二人きりなんてそんなことをさせると思うか。」

「刹那も随分と乙女な事を言うようになったものだね。」

「…悪いか。」

頬を染めボソツと呟く刹那、そんな刹那を見てククツとまた笑うマナ。

「いや、いいことだと思うよ（まだ本人を目の前にしたときは消極的だけど）。じゃあそろそろ準備をして行こう。茶々丸曰く、相当の危険があるそうだからね。金属探知機への偽装も含めて準備はちゃんとしておくんだぞ？」

「それくらい分かっている。」

「明後日中にはこの国を出ないといけないというのに……ハアッ、どうしたものか。」

ホテルの一室のベッドの上で、翼は物思いにふけていた。

「正直、今回の仕事はキツかった。龍樹相手じゃ、やたらに光の剣も使えなかったし、複数体が同時に攻撃してきたりとアレまで使う羽目になるとは……。こんなことになるならちゃんと準備しておけばよかったな。」

部屋に置いてきたボストンバッグのことを思う。

「まあ茶々丸にも頼んだんだ、じきに、到着するだろう……ふあつ、やっぱり、駄目だな……この身体だと……ただの、こ……すう……すう……。」

.....

.....

.....

何か音が聞こえる、それが備え付けの電話の音と認識した翼は、寝ぼけた頭を覚醒させ受話器をとる。

『神風様、言伝されていたお客様がお見えになられたのですが、いかが致しましょうか？』

「ありがとう、それじゃあ部屋まで案内してくれ。」

『かしこまりました。』

と受話器を置きベッドから降りてスーツケースの中に荷物を詰め込む。

と、そこにコンコンとノックの音がする。

「鍵は開いているから入ってくれ。」

ガチャツとドアが開き、翼は来訪者へと顔を向ける。

「よく来てくれ、た…な…マナ？刹那？何故ここに？？」」

そこには荷物を落とし呆然と立ち尽くす二人の姿があった。

） S I D E マナ ）

「そうか、つまりお前達は茶々丸の代わりに来てくれたというわけか。悪かったな、手間を取らせて。」

「いや、それは別に構わないんだが……なあ、本当に翼なのか？」

視線を下げ目の前の少年というより幼児か？を見る。

「信じられないのか？まあこんな見た目じゃ疑うのも当然だが、何ならお前たちの今までのテストの点数でも当ててやろうか？」

言っていることから間違いなく目の前の人物が翼だと思う。

私達が持ってきたボストンバッグから取り出した子供用の服に身を包み、用意したコーヒーに砂糖とクリームを入れている。

いつもブラックを飲むのにどうしてだと問えば、味覚までが幼児化してしまい、ブラックが苦くて飲めなくなるのだそうだ。

しかも猫舌らしくカップを冷ますさまはいつもの翼と全く違って保護欲まで湧き上がってくる。

そのギャップが何という破壊力だろうか、茶々丸が相当の危険があるといっていたのはこのことだったのか。

刹那のほうを見ると頬を赤く染めモジモジと体を動かしている。

気持ちは分かるぞ、刹那。

刹那も私の視線に気づき互いに頷きあう。

「…で、そのアーティファクトの副作用でこうなったんだ。この副作用が大きくてだな…聞いているのか二人とも？ってウアッ!？」

我慢の限界を迎えた私は翼を抱きかかえた。

いつもの男を感じさせる感触ではなくとても柔らかく、満たされるような甘い匂いがした。

「ちよっ、マナ！離れろ！！」

何か翼が言っているような気がするが気にしないことにしよう。

今しばらくはこの感触と匂いを満喫していよう。

） SIDE OUT ）

） SIDE 刹那 ）

ドアを開けたとき、私は安心してしまった。

そして今、私は目の前で起きていることにドキドキしている。

頬が熱い、間違いなく真っ赤になっているのだろう。

部屋へと私達を招いた翼さんはトテトテと擬音がつきそうな歩き方で部屋の隅においてあったコーヒーマーカーからコーヒを運んでくる。

自分のカップを両手で持ってフウフウと冷まし飲んだ後、ほおっと息をつく翼さんはいつもと違って愛らしいと思ってしまった。

「で、何でこうなったかというとな、俺のアーティファクトに魔血玉という魔力増強のタリスマンがあるんだが、こいつが曲者だな。」

翼さんが何か説明しているが正直頭に殆ど入ってこない。

ふとマナの視線に気づく。マナも褐色の頬を赤くし、うずうずと翼さんのほうへ手を伸ばそうとしている。

と、急にマナが翼さんを抱きかかえた。

「ちょっ、マナ！離れろ！！」

そう翼さんが言ってもマナは離れようとはしない。それどころか逃すまいと更にギュッと抱きかかえる。

はつきり言おう、あんなマナを見るのは初めてだ。

「刹那！ボーツとしてないで助けてくれ！！」

その声に意識が正気へと戻され、マナから翼さんをもぎ取る。

翼さんはようやく解放されたからか安堵の笑みを向けてくる。

「／／／」

ああ、なるほど。いつもの翼さんも反則だが、この笑みは凶器だ。

「スマン刹那、助かった「失礼します／／／」ってない！？」

私は正面から翼さんを抱きしめた。

） SIDE OUT ）

そのあと二人は代わる代わるに翼を抱きしめ、脱出を諦めた翼はいつの間にかまた眠ってしまった。

翌日翼の目が覚めて二人が自分を抱きしめるようにベッドで寝ていたのに頭を痛めることになった。

【続く】

第二十話「とある春休みの災難」(後書き)

魔血玉の効果

魔力を増幅させる代償として、使用後に段階的に使用者の肉体・精神を退行させる。

段階は宝玉の光が失われていく数で変化する。

段階1：宝玉4つ→宝玉3つまで ↓ 肉体年齢12歳程度になる

段階2：宝玉3つ→宝玉2つまで ↓ 肉体年齢9歳、魔力・気

の使用不可能

段階3：宝玉2つ→宝玉1つまで ↓ 肉体年齢6歳、身体能力

の低下、感覚の退行

段階4：宝玉1つ→宝玉0個まで ↓ 肉体年齢3歳、精神の退行

使用者の年齢が12歳以下の場合は-2歳される。

【注意】これは独自設定です。

第二十一話「ケー・アイ・エス・エス」(前書き)

二十話を過ぎてようやくのメインヒロインの登場です。
では続きをお楽しみください。

第二十一話「ケー・アイ・エス・エス」

春休みが終わり、2 - Aが3 - Aへと変わった新たな始まりのとき。

ネギにとって激動の物語が始まるとき。

新年度の全体朝礼の最中、翼は考え事をしていた。

「（ついにこの時が来たか。まずはネギとエヴァの戦い。ここではよほどのイレギュラーがない限り、今のエヴァにネギが太刀打ちすることはできないだろうが、心が折れることになる場合は……。）」
思わず右手をギュツと強く握る。

『今度、保険の………になった………先生じゃ。………をしれくれんかの？』

「（その戦いでエヴァが認めてくれた場合はネギの魔法の修行をつけてほしいところだが、何故かエヴァの奴、ナギのことをどうでもいいと思っている節があるからな……。正直エヴァ以上の師はここにはいないだろうからな。まあ、そこはエヴァ次第だろうな。）」

「（それが終わったら修学旅行だな。恐らくそこでまた俺を狙う奴の介入があるだろう。順当にいくとソドム・バース辺りか？）」

『今、学園長から………です。怪我をしたり何か悩んだり………来てね。』

「（アザルのように強化されているとみて間違いないだろう。奴の

強化……暗黒魔闘術はおそらく効かないだろうな。」

ならどうするかと考えたところで、自己紹介が終わったのか拍手の音が聞こえる。所々しか聞こえなかったが声からするに若い女性のようだ。

そのまま考え事の続きをしながら拍手をしていると、壇上から降りてきた新任の先生が翼の前で止まる。

どうしたんだと注意を向け、その顔を見て思わず固まってしまった。

「なっ!?!」

「ようやく私を見てくれたわね。」

女性は翼の首に手を回し、身長差のため首を引き寄せて唇を重ねた。

「むうっ!?!?!」

生徒・教師の誰もが呆然とする中、数秒間続けられた。

「フフツ、会いたかったわ、ツバサ。」

「（何故ここにいる、ガーベラ!?!）」

唇を離れた彼女は何事もなかったかのようにその場を後にした。

『キャアアアーーーーッ』

全生徒の黄色い声が学園中を覆いつくした。

さて、あんなことがあったんだ。 3 - Aなら…
このクラス

「ねえ翼先生。新任の阿相先生とはどういった関係なの？」

朝倉を筆頭に質問攻めを受けるのは当然といえるだろう。

若干名ほど普段出さないほどの殺気をぶつけてくるのが心配だ。これは後で説明しておかないとヒドイ目にあいそうだ…。

「昔の知り合い、とだけ言っておく。後はちょっと込み入ったことだから俺から話すことはない。」

「あら、つれないじゃない、昔のパートナーに対して。」

「ガ…阿相先生、何故ここに？」

そこには白衣を着たガーベラが居た。

「あら聞いてなかったの？今日は身体測定でしょ。で、私の担当は三年生。」

「なるほどな。ネギ、俺達が出るぞ。」

「えっ、何ですか？」

「…理由が分からないのなら一度常識を学び直してこい。」

「?。」

何のことだか本当に分からないのかネギは出席簿を持ちながら『???』と考えている。

「本当に分かんのか…。身体測定で、俺達は男。イコールどういふことが考えなくとも分かるだろうに。」

落ち着いて翼の言葉を理解したネギはハッと気づき

「そ、そそ、そうでしたー!!!」

と慌てて廊下へと出るのであった。

「ハアッ、もう少し何とかならんのかな。」

そして続けて翼も退出していった。

SIDE 朝倉・早乙女

「ありやりや、翼先生行っちゃったね。」

ピシヤリと閉められたドアを全員が見る。

「朝倉、アンタがしつこく聞くからじゃないの？」

「そうは言ってもさハルナ。中・高・大の生徒、一部の先生からの競争率激高の翼先生の浮いた話だよ？まあウチのクラスの一部生徒とは比較的親しいみたいだけど…。」

朝倉はそう言つてその人物達を見る。

龍宮真名、出席番号18番で褐色の肌とストレートロングの黒髪が特徴の女の子。つかアンタ本当に中学生！？

桜咲刹那、出席番号15番で髪をサイドテールにまとめた無口な女の子。背中の竹刀袋と剣道部の一番の猛者らしい。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、出席番号26番で金髪で我がクラスの幼女の一人。っと、ヤバッ何か睨んでるし。

絡繰茶々丸、出席番号10番で緑色の長髪で耳飾りをしているこれまた無口な女の子。

「まあここら辺は鉄板かな？」

「まあそうよね。んでもってパール様が何気に怪しいと思うのはアス

ナに木乃香に千雨ちゃんね。くーちゃんに楓ちゃんもよく一緒に居る所を見ているけどあの二人は…多分無いでしょ。」

「翼も大分人気のようなね。」

「あ、阿相先生。そうだ、さっき言ってた『昔のパートナー』ってどういう意味か教えてくれませんか？」

「たいした意味はないわよ？昔仕事で一緒に組んだことがあるってくらいよ。」

「昔って…翼先生もだけど阿相先生も本当は何歳なのよ。」

「自己紹介で答えたとおりよ。（肉体年齢は、だけどね。）それよりあなた達、早くなさいな。」

「「はい。」」

（ SIDE OFF ）

廊下に出た翼とネギだったが、翼は学園長に用事があると学園長室へ来ていた。

「爺さん、新学期も始まったし、ネギも多少は先生として出来るようにはなった。そろそろいいだろ？」

「ウム、本当に危険はないのかの？ワシはそれが心配でのお…。」

「多少の怪我はするだろうが、アイツだって鬼じゃない。寧ろ今経験しておくべきだと思うぞ、本当の戦闘というものを。なんたってネギはナギの息子^{アイツ}なんだから。それに、アンタは断れる立場じゃないだろう?」

どこに持っていたのか額縁を取り出す。その中には前回行われた試験の結果が入っていた。

「これを公表しない、という条件で今回の取引は成立したはずだ。」

「うぐっそ、そうじゃが…ネギ君が潰れてしまったらどうするつもりじゃ?」

「そのときはその程度だったってことさ。残念だがナギのことは忘れてもらうことにする。」

そう言ってポケットから天秤のような物を取り出し机に置く。

「つ、翼君、それは!?!」

「爺さんの想像通りさ。ネギに『父親のことは追うな』という制約^{ギアス}を課させてもらう、MM元老院が望んでいるような偶像の英雄にはさせん。爺さんには悪いが場合によっては爺さんとの約束を破ることになるかもしれんな。……討つか、俺を?」

敵対されることも覚悟の上で翼は学園長に自分の意を伝える。

だが、返ってきた言葉は翼にとって思ってもみなかったことだった。

「ネギ君への補佐はお主に一任しておる。そのお主がそう判断した

んじゃ、ワシはお主に任せるつもりじゃ。じゃがタカミチ君を含め、他の魔法教師は納得しないじゃろう、どうするつもりじゃ？」

「タカミチにはもう説明済みさ。本気で2、3発殴られたが、一応納得してくれたよ。それとコレを出しておく。」

懷から今度は辞表と書かれた封筒を取り出す。

「ネギが潰れたときは俺は麻帆良^{マホウ}を去る。」

「…そして一人でナギを追う、とでも言うつもりかの？」

学園長の言葉に翼は驚きの顔をする。

「お主も大概人が好すぎるのう。まあ、じゃからこそワシも力を貸したくなるわけじゃが。」

学園長は出された辞表を破り捨てる。

「ワシはお主を手放すつもりはないぞい。他の魔法教師の説得はワシに任せておくんじゃ。」

「爺さん……感謝する。」

「その代わりといつては何じゃがのう翼君、やはり木乃香と見合いしてみんか？あの子もお主のことは好いておるみたいじゃしの。」

その言葉を聞き翼は手を顔に当てため息をつく。

「…爺さん、人が折角本気で感謝してるってのに、ぶち壊しだよ。」

あまりこのか本人が望んでいない見合いばつかやっていると嫌われるぞ爺さん。じゃあ俺は行くからな。」

翼が去った後、学園長は一人笑みを浮かべる。

「フオツフオツフオツ、翼君はやはり面白いわい。おっと、一つ伝え忘れておったが………まあいいじやろ。さて、今度の見合い相手は誰にするかのう。」

学園長の送られてきた写真を見て某宇忍者星人の如く笑い声をあげるのであった。

昼休み、翼は屋上へとある人物を呼び出した。

「ヤッホー、翼。」

扉を開けて手をヒラヒラと振ってやってきたのはたのは白衣を着た
新任の保険の先生、阿相魔夜だった。

「待ってたぞ、ガーベラ。」

「ガーベラ、何でお前が麻帆^{マホ}良にいる？」

「久しぶりに会ったのに本当につれないわね。まあいいわ、この言葉覚えてる？『お主のサポートとして一人送る』って。」

翼は夢の中のヘラとの話を思い出した。

「ヘラさんの言葉だったな。俺に対するイレギュラー要因の対処のために一人サポート要員を送ってくれるって。」

「そつ、私とそのサポート要員ってわけ、わかった？」

「はい？俺はてつきり『ナナ』がそうだと思ったんだが？」

時期的にも夢の一週間後ということもあり、翼はいつの間にか部屋に居座っていたネコを思い浮かべる。

「ナナってソードの家で家ネコしてたコウモリネコのこと？ないない、それはないわ。あの子は存在的にはイレギュラー要因よ。…全くその役目を果たしていないけど。あなたの敵もなんであんなのを送ってきたのかさっぱりわからないわ。」

「なるほど、お前が来た理由は分かった。…だが、何故あんな所でキスなんかしたんだ！！！」

全教師・生徒が見ている中での先ほどの出来事に憤慨する。

「あーあれ！まあ…挨拶のようなものよ。」

軽く答えながらガーベラは投げキッスをしてくる。

「挨拶ってお前、どういうことになるか分かった上でやっただろう？まず間違いなく色々と噂されるぞ？」

「噂くらい何も問題じゃないわよ。それとも、あなたは私と噂になるのも嫌なの？」

「そんなんじゃないが……人前だと恥ずい。」

「よく言うわよ。あなた、偶にもっと恥ずかしいこと言ったりしたりしてるじゃない。……ああそうだったわね、あなたこういったことは天然級だったわね。あの子達もかわいそうに……。」

ガーベラは翼の鈍感さに溜め息をつくほど呆れてしまった。

「まあいいわ。そこはじっくりとやってけばいいわけだしね。じゃあ翼、話がそれだけなら私は行くから、後はヨロシクね。」

「後ってどういう『翼^{さん}！』……こういうことか……。マナ、刹那、茶々丸、何か聞きたいことがあるならまずはその物騒な物を下げてくれ。それとエヴァもその魔法をキャンセルしろ。」

翼はこれからの説明に頭を痛めることになるのであった。

【続く】

第二十一話「ケー・アイ・エス・エス」(後書き)

誤字脱字報告、感想もお待ちします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0582n/>

魔法先生ネギま! ～黒き翼の異世界譚～

2011年11月12日11時58分発行